



10

和ヶ原聡司

イラスト ■ 029

Satoshi Wagahara  
Illustration ■ Oniku

はたらく魔王さま! 10

恵美と声屋を連れ戻すためエンテ・イスラへやってきた魔王と鈴乃は、アルバートと合流し、皇都蒼天藍に近づいていた。しかしアシエスとうまく融合できなくなった魔王は、鈴乃から戦力外通告されてしまう。仕方なく千穂へのお土産を物色していると、アシエスに異変が起こる。同じイエソドの欠片であるアラス・ラムスに危機が迫っているのではと考えた魔王は、地球から持ち込んだスクーター「機動デュラン参戦」を爆走させ、力を行使できないことを知りながらも、恵美たちのもとへ向かうのだった!

緊迫のエンテ・イスラ編。悪魔と勇者、そして天使と人間の戦いの行方は!?



和ヶ原聡司  
イラスト:029  
Satoshi Waghara  
Illustration: Oniku

10

電撃文庫

わ-6-10



はたらく魔王さま! 10

和ヶ原聡司



電撃文庫



9784048661614



1920193005905

ISBN978-4-04-866161-4  
C0193 ¥590E

ASCII MEDIA WORKS  
アスキーメディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体590円

※消費税が別記に加算されます



わがはらさとし  
和ヶ原聡司

『10巻を喜び和ヶ原と相棒と???』

和「俺、この巻の最後の1枚が落ちたら仕事するんだ」  
相「それ生命力超強いやつ。てか、そこにいるの誰!?!」  
和「『10巻めで頼』ってネタやりたくて連れてきた」  
相「そこは『ありがと』でしょうが!!」  
和「……10巻、読んでくれてありがとう」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま! 1~10

イラスト:029

10巻と声にすると1巻から数年しか経っていないことに驚きます。あまりに時間が経つのが早いので気づけば三十路まっしぐらです。絵は当たり前として、人間としても成長できるように2014年精進してまいります。

1年間で1万名様に当たる大プレゼント!  
電撃文庫創刊20周年大感謝プロジェクト 秋

秋の特賞(20ポイントで応募)  
著者直筆サイン入り電撃文庫1年分  
(2014年4月刊~2015年3月刊) **5**名

秋の大感謝賞(5ポイントで応募)  
著者直筆サイン入り装幀複製原画 **10**名

秋の20周年賞(2ポイントで応募)  
特製しおり10枚セット(秋冬バージョン) **1,000**名

秋のWチャンス賞(抽選の方の中から抽選でプレゼント)  
特製ノート(秋バージョン) **1,480**名

応募方法と応募券は反対側のオビ折り返しをCheck!

よく聞け、勇者エミリア、

DVD&Blu-ray

好評発売中だ!! 全6巻

フリーター魔王さまの  
庶民派ファンタジー!!

20th 大感謝プロジェクト  
電撃文庫



よく聞け、勇者エミリア、

DVD&Blu-ray

好評発売中だ!! 全6巻

フリーター魔王さまの  
庶民派ファンタジー!!

20th 大感謝プロジェクト  
電撃文庫

よく聞け、勇者エミリア、

DVD&Blu-ray

好評発売中だ!! 全6巻

フリーター魔王さまの  
庶民派ファンタジー!!

20th 大感謝プロジェクト  
電撃文庫

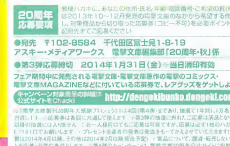
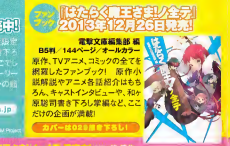
よく聞け、勇者エミリア、

DVD&Blu-ray

好評発売中だ!! 全6巻

フリーター魔王さまの  
庶民派ファンタジー!!

20th 大感謝プロジェクト  
電撃文庫



電撃文庫編集部 編  
B5判/144ページ/オールカラー  
原作、TVアニメ、コミックの全てを  
網羅したファンブック! 原作小  
説解説やアニメ各話紹介はもち  
ろん、キャストインタビューや、和ヶ  
原聡司書き下ろし掌編など、ここ  
だけの企画が満載!

電撃文庫編集部 編  
B5判/144ページ/オールカラー  
原作、TVアニメ、コミックの全てを  
網羅したファンブック! 原作小  
説解説やアニメ各話紹介はもち  
ろん、キャストインタビューや、和ヶ  
原聡司書き下ろし掌編など、ここ  
だけの企画が満載!

電撃文庫編集部 編  
B5判/144ページ/オールカラー  
原作、TVアニメ、コミックの全てを  
網羅したファンブック! 原作小  
説解説やアニメ各話紹介はもち  
ろん、キャストインタビューや、和ヶ  
原聡司書き下ろし掌編など、ここ  
だけの企画が満載!

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

HP: <http://maousama.jp>

# エンテ・イスラ



スローン村

北大陸

魔王城  
(元イスラ・セントゥルム)

ファイガン

カシアス城塞市

西大陸

東大陸  
(エフサハーン)

セント・アイル帝都

ホンファ

サント・イグノレド

グエンヴァン

皇都蒼天蓋

南大陸

## EXHIBIT - VOLUME





contents

序章	P010
魔王、立場を失う	P027
勇者、戦陣に踊る	P115
魔王と勇者、エンテ・イスラの変革に立ち会う	P181
終章	P294
続章	P314



# 和ヶ原聡司

イラスト ■ 029

Satoshi Wagahara  
Illustration ■ Oniku

10

はなつてく健康になろう

## 序章

時計の針は既に午前二時を示し、真つ当な学生ならばもうとくに寢床に入っていないければならないはずだが、佐々木千穂は、上野恩賜公園から真つ直ぐ、笹塚のヴィラ・ローザ笹塚二〇二号室へとやってきていた。この部屋の主である鎌月鈴乃は今はいない。

千穂は泊まりのための荷物が入った鞆を部屋の隅に置きながら、二〇二号室に入るのが久しぶりな気がして、思わず部屋の中を見回してしまった。

今、この部屋の主は日本でも、世界でも、地球でも、どこでもない場所に、千穂の想い人と一緒に旅立っている。

千穂の大切な人達を見つけるために。

千穂の大切な仲間達を救い出すために。

「どうしたの？ ま、私の部屋じゃないけど上がってよ」

その代わり、今この部屋の鍵を預かっているのは目の前の女性。

日焼けした肌を惜しげもなく晒し、長い黒髪を無造作に縛った女性、大黒天祿。

一度は千穂とも銚子の海の家『大黒屋』店主として雇用契約を結んだから、千穂にとって

は一応、元雇い主と言えなくもない相手だ。

だが、千穂が日頃アルバイトしているマグロナルド幡ヶ谷駅前店でお世話になっている木崎真弓店長と天祢には、大きな違いがある。

少なくとも、天祢は千穂が認識するところの『普通の人間』ではない。

本人の弁を信じるなら、毎年健康診断を受けていて異常は見当たらないというから生物学的なことだけで言えば人間、つまりホモサピエンスなのだろうが……。

「はい、お邪魔します」

「いやー、しっかし暑かったねー。麦茶とか飲む？ あ、一応鈴乃ちゃんには許可もらってっから、好きに冷蔵庫漁っていいみたいだよ」

「あ、じゃあ、私がやります」

千穂は腰も下ろさずに、最新型の大型冷蔵庫の中から麦茶を、シンク下の棚からグラスを二つ、引き出し型冷凍庫の中から氷皿をそれぞれ取り出して氷をグラスに投入。

最後に小さなお盆に乗せて卓袱台の天祢の前に置く。

「手慣れてるねー」

天祢は、千穂が他家の台所で一切の迷いを見せずに動いたことに驚いているようだ。

「今もよく使わせてもらってますから」

千穂はなんでもないように言っ、天祢の対面に腰を下ろす。

「この台所？　なんで？」

首を傾げる天祢。千穂はそんな彼女の顔を見て、あることに気づいて微笑んだ。

「ん？　何？」

「いえ、今思ったら、一番よく使ってたのは鏡子に行く前までだったなって思っただけ。私達が天祢さんのお店にお世話になる少し前のことです」

「そうなの？」

「魔王と勇者の娘」アラス・ラムスがヴィラ・ローザ笹塚に現れ、そのアラス・ラムスを奪還せんと日本にやってきたガブリエルとの戦いの過程で、二〇一号室に生活に大いに支障をきたす大穴が空いてしまった。

奇しくも恵美の聖剣と融合したことで身を守られたアラス・ラムスのために、恵美は以前にもましてヴィラ・ローザ笹塚に足しげく通い始める。

魔王城の家事一切を取り仕切る芦屋は、大穴の影響が恐ろしい二〇一号室ではなく、二〇二号室の台所を借りて調理をすることが多くなり、何かと魔王城への差し入れを欠かさなかった千穂も、必然的に鈴乃の部屋の手伝いを使うこととなった。

誰が望んだわけでもない。だが、いつの間にか、そうして一つの所に集まった者達が一つの食卓を囲むことに、誰も疑問を抱かなかった。

その後、大家からの通知で大穴を補修するべく住人の一時退去が決まった際、世話になった

のが天祢が経営を任された海の家「大黒屋」だったのだ。

思えばその辺りから、日々の食事だけでなく、アラス・ラムスを含めた真奥や恵美達七人が意識して行動を共にすることが多くなったように思う。

そして大黒屋の仕事が中断し、アパートの修繕も完了して全員が笹塚に戻った頃には、もはやそうするのが当たり前のように、七人は頻繁に食卓を共にするようになっていた。

魔王と勇者、宿敵と宿敵、異世界人と異世界人。

ほんの一年前には一同に会して平和に食事することなど思いもしなかった七人が、このアパートに集って、そこにあるのは決して笑顔だけではなかったが、それでも大騒ぎしながら同じ時を過ごしたのだ。

その決してありえなかったはずの「平和」が乱され、今あの食卓にいたのは自分と、隣の二〇一号室に一人残った漆原半蔵だけだ。

「天祢さんは」

「ん？」

「真奥さん達のことを、どれくらいご存知なんですか？」

「んー。それほど詳しく分かってるわけじゃないけど」

天祢は顎に指を当てながら、考え込むような仕草で天井を見上げた。

「真奥君が地球の人間じゃなくて、もっと言う人間でもなくて、穢れた……いや、魔力を持

つてるところを見ると多分悪魔とか魔物とかそんな感じの生き物になって、芦屋君や遊佐ちゃんやあの黒い鶏君の話聞いてると凄く力持ってたみたいだから、多分そういう連中の親分とか王様とかそんな感じで、何かの理由……多分遊佐ちゃん達みたいな、清められた力の持ち主達と争った末に負けたからこっちの世界に逃げてきて、こっちは世界を巡る力が正にも負にも振れずにきちんと整ってるから魔力が手に入られなくて、飯を食うために仕方なくバイトしてるってくらいかな。推測できるのは」

「……推測って言うか、もう、その」

そこまで言われてしまつては、もう真奥の素性をほぼ全て言い当てているに等しい。

「誰かに聞いたんですか？ 私は会ったことないんですけど、アパートの大家さんとか」

「ミキティ伯母さん？ ああ、千穂ちゃん会ったことないんだ？」

「踊ってる姿をビデオで見たことが」

「は？」

「いえ……」

「まあ私は誰かに聞いたわけじゃないよ。自分が見た範囲での推測。当たってたの？」

「訂正も補足も必要ないくらい……」

「あつはつは、なんだか、残念そうだね」

千穂の複雑そうな顔を見ておかしそうに笑った天祢は、小さく息を吐いた。



「ま、でも私にだってそれくらいの推測はついたんだ。ミキティ伯母さんやうちの親父<sup>おやじ</sup>だって年齢や血液型くらいまでは当てて見せるんじゃないかな」

「ど、どういう理屈なのかよく分かりませんけど……それで……」

「ああ。そうか、千穂ちゃんが聞きたいのは、そういうことじゃなかったっけね」

出鼻を思い切り挫<sup>くじ</sup>かれた千穂だったが、それでも勢い込んで身を乗り出すと、天祢は不敵な笑みを浮かべて一気に麦茶を煽<sup>あか</sup>った。

「……………こめかみに、キタ……………うぐ」

「あの」

天祢の不敵な笑みが一転、眉根<sup>まゆね</sup>を寄せて苦しみはじめ、千穂は目が点になる。

「あははは、ごめんごめん……………でも、まあ、あれだ。世の中の真実<sup>まこと</sup>ってのは、意外とシンプルなものなんだよ。よそから来た悪魔を片手でぼっこにできる私だって、冷たいもん一気に飲めばこめかみも痛くなるんだ。でまあ」

グラスを卓袱台<sup>ちゃぶだい</sup>に置くと、天祢はやおら立ち上がる。

そして風の通る窓を閉めると、二〇一号室側の壁に手を触れた。

「天祢さん？」

「千穂ちゃんには話すよ、言った通り、千穂ちゃんには、ね……………んっ」

千穂の目には、天祢が指先で小さく壁を押したようにしか見えなかった。

だが、壁の向こうで何が起こったかは、床を伝ってくる、何か大きなものがのたうち回っているような振動で察することができた。

「でも、万が一を考えて、絶対に聞き耳立てられないように対策は立てさせてもらうよ。このアパート古いから、隣の漆原君の耳にうっかり入っちゃったら大変だからねー？」

「……ですよねー」

千穂は顔をひきつらせながらも頷いた。

はつきりそうと言ったわけではないが、アパートに戻ってきた漆原に殊更に二〇一号室に籠るように言ったのは、ちよつと注意をすれば結構隣の音が聞こえてしまうこのアパートで、天祢が語れることを漆原に聞かせようとしたからだった。

妙なところで察しのいい漆原だからそれくらいはしてくるだろうと思っていたが、なまじ対応してくれただけに、どうも今の天祢の『対策』のせいで痛い目を見てしまったようだ。

そして天祢は、言葉ではあくまで千穂との約束を尊重しつつ、千穂の目論みは分かっていたのだということを目だけで明確に物語っていた。

「……じゃあ、改めてお聞きします」

千穂も、そのことについては特別言及しない。

漆原には後で謝っておかねばならないが、天祢が言葉にしない以上、千穂が勝手に折れては聞き出せることも聞き出せなくなるかもしれないからだ。

「おお、メモまで取るの？ 本気だね？」

千穂は泊まりの荷物の中から普段からアルバイトで使っている三色ボールペンとメモ帳を取り出して、至極真面目な顔で頷く。

「初めて見聞きすることはとにかくメモを。覚えることが仕事のうちは、こうやってなんでもメモに取る習慣ができたんです。……真奥さんと一緒に働きはじめてから」

何も分からない世界に飛び込むときに、最初にする仕事は、とにかく覚えること。知ろうとすること。

それを千穂は、ずっと以前に大切な人から教えてもらっている。

「そっか」

天祢は改めて畳に腰を下ろし千穂に視線を合わせて、言った。

「で、何を知りたいの」

千穂は、大きく息を吸った。

今日までのことを、自分が見聞きしたことを、自分が望む知識を、全てを総合し、天祢に最初につけるべき質問は、これしかない。

「地球の生命の樹セフィロトと宝珠セフィラは、今どこでどんな状況にあるんですか？」

「っ……………」

千穂の言葉に、先ほどまで余裕綽々だったはずの天祢は、はつきりと驚きの表情を浮かべ

て息を呑んだ。

「ち、千穂ちゃん？」

「はい」

「ちよ、ちよつとごめん、いくらなんでもこればかりは予想外すぎた。え？ 待つて、何をどうしたらそんな考えに辿り着けるの？ だつて、え？ 私はてつきり、私やミキティ伯母さんの正体とか、魔力ってなんなんだろうとか銚子の海岸の真実とか、そういうとこ突っついてくのかと思つてたよ！」

本気で驚いているらしい天祢に、千穂は静かに言う。

「もちろんそれも気になりますけど……多分、大元を教えてもらえれば、その過程でそこも通るんじゃないかなと思つて」

「はあ……ええ？ マジで？」

「こう言つたら失礼かもしれませんが、天祢さんの正体そのものは、きっと枝葉末節のことなんだと思います」

「でも……いや、ごめんね大げさに驚いちゃつて。ちゃんと聞かれたことには答えるよ？ でも、よくまあそんなところに一人で辿り着けたね？ 真奥君あたりと相談でもしたの？」

「いいえ、特別誰かに相談したわけじゃ……。でも、私一人で辿り着いたわけでもありません」  
千穂は手にしたメモ帳とペンを、少しだけ強く握りしめた。

「真奥さんや遊佐さん達と一緒に過ごした時間の中で、少しずつ少しずつ色々なことを見てきて、色々な情報を逃さないようにして、必死に思い出して……だから、私一人で得られた質問じゃありません。真奥さん、遊佐さん、芦屋さん、漆原さん、鈴乃さん、アラス・ラムスちやんにイルオーン君。天祢さんはもちろんカミーオさんやマレブランケの人たち、サリエルさんにガブリエルさん、それに……この」

千穂はすっと、自分の右手を差し出した。

「指輪を私に預けてくれた人を見せてくれた記憶……」

「その紫色のは、9番目か」

天祢は千穂の指に嵌る紫色の宝石をあしらった指輪を見て、表情を厳しくする。

「随分無残な姿になっちまったもんだ。それを千穂ちゃんに預けた奴は、エンテ・イスラとかいう所の人間なんだね？」

「はつきり本人がそう言ったわけじゃありませんけど、まず間違いありません。その、『人間』かどうかは、分かりませんけど」

「話して通じる生き物ならなんでもいいよ」

「とにかく、私が見聞きしてきたこと全部、私が一緒に過ごした人達との時間全部をぶつけるには、この質問しかないんです」

「よし、分かった。しつこいようだけど、答える前に一つだけいいかい？」

「はい？……わ！」

「ふむ、特に後ろに紐が付いてるとかいことはなさそうだね」

天祢は千穂の返答も待たず、千穂の額に手を当てる。何を探られたのかは分からないが、天祢はようやく脱力して頷いた。

「な、なんだったんですか？」

「ん。千穂ちゃんにその指輪をくれた奴が、今もこっそり千穂ちゃんに繋がってるんじゃないかって思ったんだけど、そこまではないみたいだね。記憶を写されたとか言うから、今も覗かれたりしたら漆原君に痛い目見せた意味がないしさ」

とりあえず漆原が痛い目を見てしまったことだけは確定した。

やはり後で、巻き込んだことを謝っておこうと千穂は改めて心に誓う。

「さってと、今、地球の生命の樹やセフィラ達がどうしてるかって話だけ」

「やつぱり、あるんですね。しかも、セフィラは複数」

「やりにくいなあ。いちいち確認しなくても、嘘なんかつきやしないよ」

「す、すいません」

千穂は前のめりすぎたかと反省し、一つ深呼吸して天祢の言葉に真摯に耳を傾ける姿勢を取る。

とはいえ、一度聞いて分からないことは、何度でも聞くつもりでいた。

それもまた真奥の教えだった。二度で分かなければ三度。いまから天祿が明かそうとする話には、そうするだけの価値と意味がある。

「まず地球のセフィラ達は、もう生命の樹と同じ場所にはいない。とつくの昔に散り散りになつてゐる。それこそ千穂ちゃんが歴史の教科書で習うような昔にね」

「結構、最近なんですね？」

「ん？」

「いえ、その、歴史の教科書で習うことは、少なくとも今の私達が把握している年表の中にセフィラとセフィロトが分かれる出来事があつたことですよね？ もっと、それこそ地球に生命が生まれた何億年も前とかそれくらいのことかと思つてました」

「……今どきの女子高生は、時間のスケールの認識も柔軟なのかね。実際生きてると、それでも死ぬほど長い時間だと思ふけど……まあいいや。で、早速バラしちゃうけど、私自身は、アラス・ラムスちゃんやアシエスちゃんみたいにセフィラから直接生まれたわけじゃない。どっちかっていうと、彼女達を親に持った、セフィラから生まれた子と人間のハーフだと思つて。まあこの言い方もちょっとおかしいんだけど」

「ちよ、ちよっと待つてくださいね」

今の言葉の内容だけでも、恐ろしいほど沢山の情報を含んでいた。

一つ、アラス・ラムスとアシエスの寿命が異常に長大なのだという事。彼女達は、将来人

間の伴侶を得た上に子孫を残すこともできるということ。セフィラの子の形質は、さらにその子供に受け継がれていることは、天祢の行動の端々を見ていけば間違いない。

千穂は走り書きでメモを綴り、天祢は千穂が必要なことを書き終わるまで待っていてくれた。「それで私の両親どっちがセフィラから生まれたかって言えば、親父の方だね。セフィラ・ピナーの子、マムリドってのが本名らしい。今は大黒天智って名乗ってるけど」

「マムリドさん……何か、意味のある言葉なんですか？」

アラス・ラムスもアシエス・アーラも、鈴乃が言うにはエンテ・イスラで意味のある言葉だったらしい。イルオーンも、詳細は不明だが恐らく意味のある名なのだろう。

ならば地球のセフィラから生まれた者の名も、そうではないかと千穂は推測した。

「なんだったかな。『母なる鉛』とかそんな意味だったと思うけど、でも男なんだよね」

天祢は苦笑して続ける。

「で、だ。千穂ちゃんの最初の質問に答えよう。『地球の生命の樹』があつた場所だけど」

「は、はい！」

千穂は息を呑む。

『生命の樹』や『セフィラ』に関する情報は、今の千穂や真奥、恵美の周りで起こっている一連の出来事の根幹を為すものだ。

天祢や、自分に記憶を写した存在の言葉からも、地球にも生命の樹が存在することだけは疑



いの余地はない。

ならばエンテ・イスラの生命の樹のことを知る上で、地球の生命の樹の情報は今何よりも必要なものだった。

その情報が目のある。千穂は少なからず真実が見えはじめたことに興奮を覚え、だからこそ天祢のわずかな言葉の言い回しの違和感に気づかなかった。

「いつも見えてるけど、残念ながら今の千穂ちゃんには行くことはできない場所にある」  
「いつも見えてる？」

「割と毎日ね。まあ、雨の日とかはダメだけどさ。あそこ」

天祢はそう言つて、ゆっくりと腕を上げ、すつと窓の外を指さした。

千穂は天祢の指し示す方向に視線を向け、そして息を呑む。

ぽっかりと、夜空に浮かぶ月。

「月……に？」

地球の生命の樹は地球の衛星、つまり月にある。

その事実が頭に染み込む間、さらに千穂の脳内でこれまでの出来事が嵐のように駆け巡った。そして、その嵐がもみくちやにした情報が頭の中であるべき場所に収まった瞬間、千穂は戦慄する。

「サリエルさん……の、力は、月に近ければ近いほど……天界の、至宝、じゃあ、エンテ・イ

スラの天界と魔界は……」

「どうしたの？ そんなに驚いた？」

「あ、い、いえ、その、驚きましたけど、と、とにかく続けてください」

千穂は上の空になりそうな精神を必死で立て直しながら、震える手でペンを走らせ先を促した。

「うん？ まあそんな私が『伯母さん』って言うくらいだからもう分かるよね。ミキティ伯母さんはうちの親父の姉さん。このアパートの大家の志波美輝は、セフィラから生まれた子だ。ただ、ミキティ伯母さんの場合は他のセフィラとちよつと違って、その役割上……」

千穂は頷きながら必死にメモを走らせる。

千穂の望む未来に繋がるかは分からない。だが、未来のことを考える材料が、それこそ秘密の宝箱が自分に向かって寶石の雨を降らせるかのように手に入る。

必死にペンを走らせながら、不思議な高揚感に思わず笑みが浮かんだ次の瞬間だった。

「あぎやつ!!!!」

突然、叫び声が聞こえて天祢の声が止まり、千穂何事かと周囲を見回す。

今のは、漆原の声だ。しかも、かなり深刻な叫び声だった。

「え……え？　なんで!？」

だが漆原の叫び声以上に深刻そうな声を上げたのは、他ならぬ天祢だった。

「なんで声が聞こえるの？ 私、さっきちゃんとガード固めて……」

千穂としては漆原に何事が起こったことよりも、漆原の声が聞こえたことに対して驚いている天祢に物申したいところではあるが、とにかく非常事態であることは間違いない。

まさかこの期に及んで悪魔だ天使だと言った連中の襲撃があるとは思えないし、あっても天祢がいればどうにでもなるような気もするが、それはそれとして千穂も思わず腰を浮かせて非常事態に備えて周囲に気を配る。

と、

「……」

玄関のドアが、ノックされた。

軽い音。だがなぜか千穂の耳には、そのノックの音が貴族の邸宅のドアノッカーを叩いたかの如く優美で上品な音に聞こえた。



魔王、立場を失う



およそ戦場にあるとは思えない豪華な食事の数々は、全く恵美の食欲を刺激しなかった。

食べなければ気持ちとはまかく体が持たない、とは分かっている、やはりどうしても食欲は湧かない。

これは全くおかしい話だが、恵美はオルバに囚われてファイガン義勇軍の仮初めの総大将につくまで、これほど美しく、味わい深い料理がエンテ・イスラにあることを知らなかった。

食べたことがなかった、ではない。

存在を知らなかったのだ。

元々西大陸の農村の出身の恵美の実家は、温かかったが贅沢をするような経済状況の家庭ではなかったし、そもそも世界が魔王軍の侵略に晒されるまで村を出たことすらなかった。

勇者として世界を巡る間も、エメラダやオルバが社会的に高い身分の人間だったとはいえ、路銀は常に節約する必要があったし、貴族や王侯の招きでもなければ概ね庶民の宴会料理を月に一度口に出来るかどうかというレベルだった。

食生活の多様さ、という意味では、エンテ・イスラで過ごした十六年よりも、日本で過ごした二年弱の方が遥かに豊かなものだった。

恵美とアラス・ラムスの目の前に届けられる朝昼晩の三食は、エンテ・イスラでの旅路の間に口にしたものや、日本で日々食べていた食事とは比べるのも馬鹿馬鹿しいほどに、高級な食材を用い、腕の良い料理人が調理をしているのだろう。

それでも、

「まあ、これ、すずねーちゃのこーんすーぶとちがうよ」

アラス・ラムスはスープを一口飲んで、違和感を隠さずに顔を顰めた。

「そう？　じゃあ、こっちの炒飯は？」

正確には日本で言うところの炒飯とは全く違うものだろうが、他に言いようもない米に似た穀物を炒めた料理を小皿に分けてアラス・ラムスに食べさせようとする。

だがアラス・ラムスは、やはり一口食べて飲み込むものの、はつきりと言った。

「あるしえーるのとちがう」

「そう、でも、今はこれしかないの。お願いだから、我慢してね？」

アラス・ラムスの中では、贅を凝らしたエフサハーンの料理も、日本のアパートの不自由な台所で作られた家庭料理には及ばないらしい。

「唐揚げは？　アラス・ラムス、唐揚げ好きでしょ？　小さく切ってあげるから……」  
ならばと試しに切り分けた鶏の唐揚げは、口に入れる前から拒否されてしまった。

「ちーねーちゃのかわいい！」

「まあ」として、本来ならこのアラス・ラムスの反応に対して、好き嫌いをしてはいけないと叱らなければならない場面だろう。

だが、恵美にはそんな気は微塵も起こらなかった。

アラス・ラムスに言われるまでもない、恵美だって、全く同じ気持ちなのだから。如何に食材と料理人が一流でも、食卓が冷たければ、味わう気持ちが冷えるのだ。

「でもね、食べないときつと夜にはお腹空いちやうわ。美味しくないわけじゃないでしょ？だから食べましょ」

「うー……」

アラス・ラムスは恵美の言葉に、難しい顔をしながら目の前の料理を睨みつける。

アラス・ラムスはそういうところは赤ん坊らしく、何か気に入らないことがあると恐ろしく頑固になる瞬間がある。

今回はたまたまそれが食事に関してのことだったのだが、どんなに状況が気に入らなからうと『食べない』という選択肢だけはあり得ない。

だから恵美は、その一言をつい不用意に発してしまった。

「ね？ アラス・ラムス、帰ったらまた、ベルとアルシエルにご飯作ってもらいましょ？ だから今は……」

「いつかえられるの？」

不用意な一言は、重い一撃となって恵美の身に返ってきた。

「……」

帰れない。



夢の中ですら。

恵美は目の前で湯気をあげる料理の数々が、涙で霞むのを見た。

「何もしないで食べるご飯は……美味しくないわよね」

恵美は最大限の精神力を動員して涙を零さないようにアラス・ラムスから顔を逸らし、そして、

「でも……食べなきゃ……ね」

アラス・ラムスをなだめて、味気ない食事を再開したのだった。

※

恵美は父の生きた証である故郷の麦畑を人質に取られ、意に染まぬ作戦に従事させられていた。

恵美を「戦力」として捕えたオルバ、そしてラグエル。彼らは恵美を「エフサハーンを悪魔の手から解放する義勇軍」の総大将に据え、皇都・蒼天蓋に果食うマレブランケを駆逐するための希望の旗印とした。

だが恵美の認識では、そもそもエフサハーンにマレブランケ達を引き入れたのはオルバ本人であり、恵美にはまるでオルバ達の真意が掴めなかった。

一方、ガブリエルによってエンテ・イスラに連れ去られた芦屋は、悪魔大元帥アルシエルとして再び蒼天蓋に君臨させられていた。

そうしなければ、芦屋自身はもちろん、天界の策に嵌りエフサハーンに降り立ったマレブランク達、さらには日本にいる真奥にすら危険が及びかねない。

恵美率いる義勇軍と芦屋率いる蒼天蓋マレブランク軍の激突の構図がエフサハーンの国土の中で整う中、真奥と鈴乃、そしてアラス・ラムスと等質の存在であるアシエス・アーラは、恵美と芦屋とアラス・ラムスを「救う」ためにエンテ・イスラの地へと降り立っていた。

真奥達本来の敵である天使達に気取られぬよう火薬庫からやや離れた場所に降り立った真奥と鈴乃とアシエスは、スクーターで東大陸の大地を駆け情報を集めながら蒼天蓋へと迫る。

その道中で、鈴乃は東大陸が悪魔に支配されているながら過去の魔王軍侵攻の際とは異なり、国全体が必ずしも下降ムードになっていないことに違和感を抱く。そして悪魔、という存在の本質について真奥に迫り、魔界の真実の一端を窺む。

偶然から恵美のかつての仲間、アルバートと合流した真奥と鈴乃はアルバートの情報を元に、恵美の居所や、義勇軍が首都に迫っていること、全てを清算するための解決策を話し合う。

そして最終的にはやはりアシエスと融合し、魔王の身でありながら聖剣を振るう真奥の力が肝要であるということになった、はずだった。

だが、如何なる理由か、真奥とアシエスの聖剣は発動せず、千穂と千穂の学校を救うために

発現した聖法<sup>せいぽう</sup>気でも魔力でもない力どころか、本来出てきてはいけないものを吐<sup>は</sup>き出す結果に終わってしまう。

恵美と聖法気とアラス・ラムスの聖剣。真奥の魔力とアシエス・アーラの聖剣。

絶対的な力が全て封じられ、短期決戦の予測が全く立たなくなってしまう真奥は、一週間しか休みを取っていないマグロナルドのアルバイトシフトに穴を空けないで済むかどうか、戦々恐々とはじめるのだった。

## ※

エンテ・イスラ東大陸の中心、皇都<sup>こうと</sup>・蒼天蓋と呼ばれる地域の外縁。衛星都市ともいえる村の宿の薄暗い一室で、真奥貞夫<sup>まおくさだお</sup>はいらだたしげに薙<sup>は</sup>ぎしりしながら、自分を見下ろす二人を睨<sup>にら</sup>み上げた。

「……謝れ」

「なんだ、藪<sup>やぶ</sup>から棒に」

「いいからお前ら、俺に謝れ」

「だから何言い出すんだテメエは」

「この俺に向かってお前ら、こんなフザけた扱いして、このままで済むと思ってんのか」

「フザけた扱いとはご挨拶だ。お前の身を案じての配慮だというのに」

日頃の和服姿ではなく、大法神教会の法衣を纏った鎌月鈴乃は、呆れた顔で言った。

「ベルの言う通りだぜ魔王」

小柄な鈴乃の隣に立つとそれこそ大人と子供ほどもスケールが違う筋肉質の大男、仙術道士アルバート・エンデも頷く。

「何が俺の身を案じてた。こんな屈辱は初めてだ」

「んなこと言ったつてよオ……」

アルバートは困った顔で頭を掻いた。

「魔王、お前この二日、飯食って寝るしかしてねえじゃねえか」

「アルバート、てめえ、俺を漆原みたい……言っていいことと悪いことがあるぞ」

「ウルシハラ？」

アルバートは鈴乃に助けを求めるが、鈴乃は肩を練めて首を振るばかり。

「仕方あるまい。もう明日には皇都の中央区、蒼天蓋天守に達してしまうのだ。我々の敵の本拠に乗り込もうというのだぞ。それなのに」

鈴乃は苦々しげにそう言う、視線を真奥からずらす。

そこには、粗末ながら清潔なベッドの上で、昼食に食べた川魚の唐揚げ甘酢あんかけのカスを口の端に付けたまま幸せそうな顔で眠るアシエス・アーラの姿があった。

「魔王、今のお前は全く戦力にならない。だがお前の身に何かあつては千穂殿やアラス・ラムスが悲しむ。となれば、この宿で待機していてももうしかあるまい」

「……………くそっ」

真奥は痛いところを突かれて歯噛みすると、壁を力一杯殴りつけて、

「んぐっ!!」

拳に伝わる痛みには喉の奥で苦悶の声を上げてしまう。

「な、魔王、悪いことは言わねえからここで待ってろよ。全盛期のお前だったら今の一撃で街の数ブロックは吹き飛ばしてたろ。それなのに今は漆喰の壁に穴も開かねえ。そんなんじや、いざ戦闘なんてことになりやオルバどころか鎧紅巾にも勝てねえよ」

「ぐぐぐぐぐ」

アルバートは恵美ほどではないにしろ、真奥にとつては宿敵の一人と言える男だ。

それなのにこんな憐憫の目で諭されてしまつては、魔王として屈辱以外の何物でもない。

「おいアシエス!!」

「むぎや?」

戦力外通告という、魔王として絶対にあつてはならない屈辱に耐えかねた真奥は、満腹で眠りこけるアシエスを引き起こすと、サロペットパンツの肩紐を掴んでぐくと揺らす。

「一体どーなつてんだよ! なんで俺魔力が戻らねえんだよ!! てかお前本当に、ちーちや

んの学校で使ったあの力はどうしたんだよ!! いい加減なんか分からないのか!!」

「……………」

アシエスは突然叩き起こされ、焦点の定まらない目のまま真奥に揺らされるがままになっていたが、真奥の叫びが終わると同時にぼそりと呟いた。

「……エビ……」

「エビ!? エビがどうした!?!」

「エビの塩焼き食べれば、分かるカモ」

「……」

三白眼で寝ぼけ顔のアシエスを睨みつけたまま、無言でグーの拳を振り上げる真奥の腕を、鈴乃が全力で止めにかかる。

「ま、待て魔王! それはダメだ! 気持ち分かるがそれはダメだ!!」

「放せ鈴乃。今の時代は男女平等だ」

「平等でも矜持に賭けてやってはいけないことがある!」

「そんなことだからいつまで経っても男性専用車両ができないんだ」

「お前は自転車通勤だろうが!!」

無為な争いがしばらく続いたが、今の真奥は腕力という面でも鈴乃には全く敵わない。諦めてアシエスから手を離すと、

「ちえ、だめかア……………ふみゆ」

これほど人の神経を逆なでする捨て台詞ぜりふもないだろうという程の爆弾を残して、アシエスはそのまま夢の世界へと戻っていった。

そこでまた真奥が怒りを再燃させて眠っているアシエスに殴りかかろうとしたため、今度はアルバートも止めに入る。

「あいだだだだ!! 分かった! 分かったよ!!」

鈴乃も実は結構な腕力を持っているが、アルバートはもう体軀たぐからしてパワーが有り余った男である。

パワーファイター二人に両腕を固められて、世界征服を目指した魔王は涙目になりながら仕方なくアシエスへの殺気を腹の底に収めたのだった。

「まったく手加減しろっての……………あー痛……………」

真奥は曲がってはいけない方向に曲がりそうになった肩をほぐしながら、先ほどよりもずっと弱い調子で二人を睨みつけるが、今の鈴乃とアルバートの目が何を言いたいかはよく分かる。

「くそっ! 一体どうなってやがんだ」

真奥は拳を握ったり開いたりして顔を曇くもめた。

魔力が戻ってこない。

その事実が真奥にとって衝撃だったし、鈴乃にとっては計算外の出来事だった。

恵美や芦屋を一度に日本に連れ帰ろうとするなら、どうしても大天使達との接敵は避けられない。

少なくとも現時点で、ガブリエルとカマエルの姿が見えていて、実際に刃を交えている。

鈴乃も腕に覚えはあるが、それでもアラス・ラムスと融合する前の恵美にすら遠く及ばないとの自覚はある。

恐らくは今隣にいるアルバートと一対一で戦っても敗北は必至だろう。

そのアルバートすら、アラス・ラムス融合前の恵美に及ばないはずだ。

真奥の力を欠いた状態で大天使二人と事を構えられるとはとても思えない。

では恵美との接触に成功して、恵美がエンテ・イスラ脱出のために大天使を圧倒できる力を振るって単純に敵を撃滅すれば良いかというと、それだけではなんの意味もない。

それで全てが丸く収まるのなら、他でもない恵美がとくにやっているはずだからだ。

今回の騒動は、単純に恵美や芦屋の身柄を日本に移すだけでなく、二人を取り巻く状況を全てまっさらな状況にリセットした上で、どの勢力からも日本への追撃の手がかからないように解決しなければならぬ。

それには単純に「仲間に悪さした敵をやっつける」だけではなく、これ以上恵美や芦屋に対して各勢力が政治的、軍事的な欲を抱かない「戦後処理」を施さなければならないのだ。

鈴乃が思い描いていた救出行の理想では、戦闘はもちろん「戦後処理」に於いても真奥がア



シエスの『聖剣』を振るうことが重要だった。

が、真奥が聖剣どころか百均の果物ナイフを出すだけで体調に支障をきたしてしまうようなら、次善の策として望外の戦力たるアルバートとの協力で事を収める以外に方法はない。

「焦るな魔王。お前が悪いわけではない。焦って解決できる問題とも思えない」

「でもよ！ それじゃ一体なんのためにバイト休んでまでここまで来たんだよ！ これじゃ俺、本当に観光ついでに食っちゃ寝してるだけじゃねえか！」

真奥の中ではエンテ・イスラ五大陸の一つ、東大陸全土を巻き込んだ大騒動とアルバートのシフトを削ったことが等しく天秤にかかっているらしいが、鈴乃は小さく首を振る。

「誰にも予想できなかったことだ。それに、お前が今そうなっていないければあの日、私も千穂殿もルシフェルも無事ではいられなかった。そう思えば今の状況にも意味はある。あまり不貞腐れるな。『王』なら目の前だけでなく大局を見る」

「でもよお……」

「力を発揮できない理由を放置したまま戦場に出て、お前が傷つくのを私は望まない。ここは私達の帰りを待っていてくれ。必ずエミリアもアラス・ラムスも、エミリアの父上も、アルシエルも無事に連れ戻して見せる」

「……鈴乃」

鈴乃は諭すように、ベッドに腰掛ける真奥の前に跪いて視線を合わせると、その手を取って

力強く告げる。

「これまで私もエミリアも、お前のことを敵だ敵だと言いながら、最後の最後でいつもお前の力に乗りかかり続けてきた。今回はかりは、それを返上させてほしい。これは『新生魔王軍』元帥としての上申でもある」

「お前、本当に都合のいいときしかそれ言わねえな」

「こう言えば、お前が弱いということは何となく分かってきたからな」

鈴乃は面白そうに口の端を上げると、立ち上がり法衣の裾を払った。

「それに総大将は、安全な場所であつて返つて部下のやることを見ているものだ」

「俺そういうの嫌いだ」

「嫌なことを避けて通れないこともあるのが人生というものだ」

「一体日本で何があつたのかは知らねえが……俺は魔王の軍門に下つたつもりはないぞ。念の

ためにな」

真奥と鈴乃の妙に通じ合ったやり取りに不安になつたのか、アルバートは釘を刺す。

アルバートも恵美の日本での生活を是認こそしたが、自分自身が魔王サタンと一緒に行動していること自体、イレギュラー中のイレギュラーなのだ。

「分かつてる。たまたま、恵美を面倒事の中から助け出すって目的が一致してるだけだ。だが今だけは、目的が一致してる仲間は一人でも多い方がいい」

「仲間……ねえ。改まって言われると、複雑どころの話じゃねえなあ」

アルバートは肩を練めるが、その顔にはそれほど嫌悪感がないようにも見える。

「ところで前から聞いてみたかったんだけどよ」

「あ？」

「お前もエメラダも、なんで恵美が俺のこと倒さずに日本に住み続けることを許してるんだ？ 恵美のしたいようにさせるったって限度があるだろ？ 日本でオルバとルシフェルが暴れてからしばらく、恵美よりも、お前とエメラダが恵美に内緒で俺を殺しにくるんじゃないかってビビってた時期もあったくらいなのに」

「ああ、そういう話もなかったわけじゃねえ」

「あったのかよ」

真奥はさらりと吐かれた暗殺計画の存在に顔を曇め、アルバートはそんな真奥の顔をむしろ面白そうに見る。

「エメの奴がどう判断したかは知らねえが、俺には俺の理由があつてエミリアに隠れてお前を討伐することは諦めた。もちろんエミリアの意思を尊重したいと思つたことは間違いないが、あとはそうだな」

アルバートは真奥に歩み寄ると、その肩を力強い手でばしと叩く。

「いって！ なんだよ!?」

「ササキの嬢ちゃんと、アドラメレクの野郎に感謝しとけ」

「ちーちゃん……アドラメレク？」

予想外のところで飛び出してきた千穂と、今は故人である悪魔大元帥の名に真奥は首を傾げるが、アルバートはそれ以上は言わずに首を横に振った。

「さて、出るならそろそろ出なきやな。俺達が先行してるのは間違いないが、ファイガン義勇軍も皇都中央区まで一日二日の距離にまで迫っている。エミリアが本当に義勇軍にいるなら、義勇軍上洛の混乱に紛れて俺達も蒼天蓋天守に向かわなきやならねえ。距離だけ考えればギリギリだ。魔王、お前はその聖剣の嬢ちゃんと大人しくしてろよ」

それだけ言うと、アルバートは目を瞬かせる真奥を尻目に、宿の部屋を出たのだった。

皇都・蒼天蓋と一口に言っても、広大である。

鈴乃達が目指す蒼天蓋天守のある中央区は、八巾騎士団の上位格の正蒼巾、銀蒼巾、正翠巾、銀翠巾の四騎士団や高級官吏、皇族や貴族、統一蒼帝に忠誠を誓う異民族の族長の大使館などが集まる、いわゆる貴族街であるが、何せ大陸全土の貴人が集結する街なのでやたらと広い。騎士団が天守から外に向けて平常の速度で行軍するのに、徒歩だと一日では中央区から出る事ができないほどだ。

そしてその中央区を囲むように広がるのが民商区と呼ばれるエリアで、ここには商家や富裕民、下位格の正橙巾、鑲橙巾、正紅巾、鑲紅巾の四騎士団が住まう地域であり、ここを徒歩で行軍して抜けるにはさらに一日かかるというのがセオリーだ。

中央区と民商区には区画整備と、侵略対策のための城壁が縦横無尽に走っており、一部の城壁はそのまま長城として郊外の農工区と呼ばれる産業地域の外側まで伸びている。

概ね北東、北西、南東、南西方向へと延びる長城は統一蒼帝の治世よりずっと古代からある巨大建築物として世界的に有名である。

治安の良い大陸西側に伸びる長城は歴史が進む中で破損も著しいが、東方に伸びる長城はエフサハーンの内乱の火種ともなっている異民族の反乱を今も恐れる統一蒼帝が、何年かに一度の大公共工事と銘打って大陸中から人を集め、常に修繕を施しているため、今なお強固な城壁として機能していた。

皇都の郊外区画である農工区は中央区、民商区をさらに凌駕する広大さで広がっていて、ここで生産された農産品や工業製品は皇都のみならず大陸中を潤していた。

鈴乃達が真奥を置いていくことにした宿がある村はこの農工区の更に外縁。皇都から東大陸中に伸びる皇道と呼ばれる幹線道路沿いにある宿場町や衛星都市のような場所だった。

まだ置いてけぼりが決まる前に、真奥は皇都近縁の地図を眺めて、

「そう考えると電車とか車ってすげえなあ……ここから皇都中央区までって、大体京王八王子

から新宿くらいまでだろ？ 半日どころか二時間かからず辿り着くじゃん。都心から八王子までとか普通歩こうとか思わないもん」

とのたまつて、アルバートの目を白黒させたものだ。

ホンファ村郊外でアルバートに出会ってからの、真奥と鈴乃とアシエスのここまでの旅路は順調そのものだった。

アルバートの手配したキャラバンの荷馬車に怪しまれることなく乗り込んだ真奥達は、心配していたスクーターのガソリンをホンファ村以降一滴も減らすことなく皇都・蒼天蓋の郊外に辿り着くことができた。

何せアルバートには、真奥や鈴乃と違い、自身の活動を縛るしがらみが一切ない。

鈴乃も、アルバートがセント・アイレの重鎮であるエメラダの手足となつて情報収集活動に動んでいるという話は恵美から聞いている。

だがアルバート自身はあくまで個人的にエメラダに協力しているに過ぎず、セント・アイレという国に忠誠を誓っているわけでも籍を置いているわけでもない。

背後に政治的・国家的しがらみを持たず、それでいてエンテ・イスラ全土でも比肩し得る者のない力の持ち主で、旅慣れていて財力もある。

しかも本人曰く、

「俺あ、魔王討伐メンバーの中じゃ一番顔が売れてねえからな。おかげで情報集めるにも余計

な手間がかからなくていい」

とのこと。

「勇者」エミリア・ユステイナは言うに及ばず、西大陸随一の強国である「神聖セント・アイレ帝国の宮廷法術士」エメラダ・エトウ・ヴァ。世界最大の勢力を誇る宗教「大法神教会」の最高幹部六人の大神官たるオルバ・メイヤーと豪華絢爛なメンバーの中で、アルバートの出自に関しては「北大陸の樵」だの「仙術道士」だのというなんとも掴みどころのない肩書きが流布している。

アルバート自身が旅の間も、魔王軍を退けた後も己の出自を大きく明らかにせず、また故国の北大陸に戻っていないということもあって、アルバート・エンダの人物像は、他の三人に比べてあまりエンテ・イスラの民衆には広まっていないのだ。

おかげで情報収集の際に余計なバイアスがかかることもなく、彼自身の人柄も相まってここまでの道中、周辺の情報は、かなり正確なものを仕入れることができていた。

「アルバート殿。先ほどのあれはどういう意味だったのだ？」

鈴乃は厩に繋がれた馬の馬具の部品を自分の体のサイズに合わせながら、ふとアルバートに尋ねた。

厩に繋がれたこの二頭の馬もまた、アルバートが手配した軍用馬である。

ずんぐりした体格ながら長距離を走る体力がある種で、エンテ・イスラ全土でキャラバンや

騎士団などにも用いられている馬だった。

真奥が戦力にならない以上、今後先に進むのは鈴乃とアルバートだけということになるが、当然アルバートはスクーターの運転などできない。

一方鈴乃は乗馬の経験もあるため、ここから先、目立たないためにも馬を使わない理由はどこにもない。

この一件で、日本を出立する前、鈴乃に乗馬経験のないことを糾弾された真奥がまたぞろ口を尖らせ拗ねたのは、また別の話である。

「ん？ 何がだ？」

鈴乃の問いに顔を上げずに答えるアルバート。

「千穂殿と、それとアドラメレクに感謝しろ、とは……」

「ああ、それか」

アルバートは自分の馬の鞍と鎧の様子を確かめながら言った。

「西大陸人のあんたには眉を顰めたくなる話かもしれないが、俺は最初から、魔王軍が単純に人間を滅ぼそうとしたんじゃないことは分かった。悪魔が話を通じる奴だってこともな」

「何？」

「俺あ元々岳仙兵団の第十五次戦团长だったんだ」

「岳仙兵団の戦团长!? 北大陸中の少数民族の中から精兵だけを選りすぐっていたというあれ



か？」

鈴乃は驚きを露わにする。

山岳地帯が大陸面積の多くを占め、少数民族が無数にひしめく北大陸では、東のエフサハーンや西のセント・アイレのような、広大な国土を持つ国家が育たなかった。

その代わり山々や沿岸部、北部の寒冷帯などわずかな平地や領土を持った氏族国家が無数にひしめき合い、各民族の代表が連合会議を設けて政治を運営する、連合国家の体を為し、歴史を刻んできた。

岳仙兵団は、各民族国家の中で特別に法術や武術に秀でた戦士を集めた北大陸最強の戦士団であった。

北大陸全土の有事の際には兵団が一九となって立ち向かうことが定められているが、一度編成される度に各民族の代表者から一人が、持ち回りで戦団長に就任する。

アルバートは歴史上、十五回目の大陸有事の際に選ばれた戦団長ということになる。

岳仙兵団が他大陸の騎士団と大きくあり方が異なるのが、氏族国家間で揉め事が起こった際には岳仙兵団に所属する者同士で戦うことがある点である。

北大陸の諸国家の関係性は、他大陸とは一線を画する。

理由として、まず一つの氏族国家の人口が極めて少ない。

次に厳しい気候と農業に適した土地が限られた国土であること。さらには氏族国家同士の縄

張りに距離があり、ある民族が敵民族の土地や民を一方的に支配することができなかった。

そのため無暗に血を流して敵民族を倒すのではなく、公正な『試合』で戦争の決着をつける特異な文化が発達した。

現在でも国家間協議で解決しない問題を『紛争』で解決する場合、大体は岳仙兵団に所属する強者同士が決められた場所で行い、減多なことでは戦死者が出ることはない。

歴史的に殺戮が発生した紛争も皆無ではないが、殺戮を起こした民族は例外なく、周辺の他民族から『危険な民族』の烙印を押された上、全方位から攻められ全滅している。

近年は民族間に大きな争いもなく、多少の揉め事も、北大陸連合首都フィエンシー、通称『山羊の国』と呼ばれる多民族都市での『試合』や合議によって決着を見ている。

いずれにせよ北大陸の諸国家が、他大陸の国家形成とはまるで異なる道を歩んできたことは間違いない。氏族ごとの文化形態も多様で、そんな各氏族から精兵を集めた岳仙兵団の長を張っていたというアルバートの将器もまた、他大陸の常識では測れない。

『まあアドラメレク軍には全く歯が立たずに壊滅したんだから、その氏族選りすぐりの精兵なんて話も今じゃ聞いてらんねえくらい恥ずかしい話さ』

『そのようなことは……』

『とにかく俺の第十五次岳仙兵団は、アドラメレク軍の侵攻にコテンパンにやられた。過去十五回の編成で最多の戦死者を出した。中央大陸の悲惨な話は聞こえてたから、誰もが自分の氏

族の滅亡を覚悟した。そんなときだ。アドラメレクは生き残った岳仙兵団の戦士達と有力氏族の長を『山羊の囲い』に集めて言ったんだ」

上背も、体軀も、アルバートの二倍三倍はあろうかという、悪魔大元帥にして牛頭の槍戦士であるアドラメレクは、全氏族の長と生き残りの岳仙兵団を集め、言った。

『我らが目的は殺戮ではない。魔王軍に抗し得る戦士を大陸外に放逐し、我らの支配を受け入れれば、各氏族民の命を保障しよう』

もちろん戦団長であるアルバートはその申し出を切って捨てようとした。

だが、アドラメレクは血気に逸る岳仙兵団達を諫めて言った。

『戦士達よ、命あらば再び我と干戈を交える日も来よう。だが今勝てぬ戦に命を散らし、あたら守るべき民の安寧を危険に晒すことが戦士の役割などと思うなら、貴様らは目前の血に飢え牙を剥くだけの飢狼も同じ。それでも尚戦おうと言うのなら止めはせぬ。その命を守るべき民を巻き添えに、我が槍の錆と散らすがよい』

悪魔から敗軍の兵としての生き様を論される屈辱に、自刃する者も少なからずいた。

だが結果としてアドラメレクは、各氏族との約束を守り、岳仙兵団が解体され有力な戦士達がアドラメレク軍の悪魔によって国外に護送された後、北大陸の地を無用に荒らすことはなかった。

アルバートら兵団の戦士達も、なればこそアドラメレクとの再戦を目指し、国外で再起を図

る腹積もりでそれぞれが他大陸に落ち延びた。

だが、そこでアルバート達が見たものは、ほぼ魔王軍の支配下に落ちた各大陸の有様だった。再起を図ろうにも拠り所となる国は軒並み悪魔の支配下に降り、魔王軍に好く抗し得ると思われていた東大陸のエフサハーンや西大陸の神聖セント・アイル帝国、南大陸のハールーン王国も既に魔王軍の支配下にあった。

氏族の戦士の集まりというだけで組織的な外交力を持たなかった岳仙兵団の戦士達は、散り散りになった挙句にその大半が北大陸に戻るどころか、各大陸の騎士団の傭兵にすらなることができず、その後再び結集するのは勇者エミリアが四つの大陸を解放するまでお預けとなる。

再集結したときに集まった戦士達は、放逐された人数の半分以下であった。

「魔王軍の支配が良かったなんて言うつもりはねえ。だが、結果としてアドラメレクは俺との約束を守った。俺の氏族の長は言ったよ。アドラメレクは刃向かう者を一片の容赦もなく血祭りに上げたが、決して徒に民を殺すような真似はしなかったとな」

「そのようなことが……」

「エミリアやエメやオルバと一緒に再びアドラメレクと対峙したときもな、俺はリターンマツチのつもりだったから、俺一人でやらせてくれて言ったんだ。そうしたらどうなったと思う？ アドラメレクの野郎、一騎打ちを拒否しやがった。安い誇りに浮かされて戦い負けるなら、貴様ら人間は永遠に我らの支配からは逃れられんってな具合にな。俺は結局最後まで、自

力で奴を超えることができなかった」

アルバートの顔には、後悔も憤怒もない。ただそこには、戦いの記憶だけがあった。

「奴は悪魔でも戦士でもねえ。為すべきことのために感情を捨て、人の先に立つたために何が必要かを知っていた。一番適当な呼び方は『政治家』だろうな。安いプライドで戦ってた俺なんかとは、人間の出来が違った。悪魔に人間の出来つつのものおかしいな」

「いや、最近はおかしくもないようだが」

鈴乃は手綱を引いて馬を厩から外に引き出すと、宿の建物を振り返る。

「それもそうか」

アルバートもその視線に釣られて顔を上げて笑った。

この宿には今、人間の出来を常々評価されている魔王が不貞腐れているのだ。

「そんなアドラメレクが従ってる魔王サタンって野郎が単なる血に飢えた魔物であるはずがねえ。民衆の被害が大きかった南や西はそう悠長には構えてられねえかもしれない。だからあれほど魔王を憎んでいたはずのエミリアが日本にいる魔王をすぐには殺さねえって言い出したとき、なら少しくらい生態を観察する猶予があってもいいかと思つた。『悪魔』って連中が、一体何者なのかをな」

「私も、最近そのことについてよく考える」

鈴乃はエンテ・イスラへ出立する前、天使の正体が本質的に人間と同じであると知ったとき

のことを思い出していた。

そして、ホンファ村郊外で、アルバートと出会う前日の背中合わせの会話。  
人間の王達となんら変わらぬ精神で、民を率いた真奥の告白を。

「……………っ」

「どうした？」

突然顔を伏せた鈴乃を見てアルバートは首を傾げるが、

「い、いや、なんでもない」

鈴乃は突然降って湧いた動揺を打ち消そうと殊更激しく首を横に振る。

何故、自分はあるな行動に出たのだろう。

悪魔を理解したところで、結局エンテ・イスラの総意は魔王サタンや魔王軍を決して許しはしないし、真奥の心の奥底を理解したところで鈴乃に利することなどありはしない。

そのはずなのに、気づけば真奥の体温を感じられる場所で、真奥の心が乗った言葉を聞き、それを心の底に収めてしまった。

そしてそれが微塵も不愉快でないばかりか、心のどこかが暖かくなる思いすらあった。

真奥や魔王軍の行動に対して抱いた疑問を純粹に解決したいと思っていたのは確かだ。  
だからと言って、あそこまで親身になる必要もまたなかったはずだ。

真奥に寄り添った背が突然熱を帯びたような気がして、慌てて首を横に振る。

「……アルバート殿は」

「ん？」

「アドラメレクのことを、一個の意思ある存在としてどう思っているのだ？」

「一個の意思ある存在？」

「ああ、そのつまりだ……」

この問いをすることは、エンテ・イスラの人間としては不謹慎極まりない。

だがそれでも、鈴乃の問いたいことを正確に伝えるためには、こう言葉にするしかなかった。

「アドラメレクを、どんな『人間』だと思っている？」

その問いに、アルバートは屈託なく笑った。

「あんた面白い奴だな。エメとですらそんな話したことねえや」

その笑いは、鈴乃の内に秘めた葛藤を全て理解している顔だった。

他ならぬアルバート自身が、悪魔大元帥アドラメレクの記憶と、巷間伝わる魔王軍の印象と

のギャップに首を傾げていた一人だからだ。

「人に知られたら面倒だから、誰にも言うなよ」

アルバートは軽い口調でそう言っただけ、にやりと笑った。

「戦士としても、兵や民の上に立つ者としても、アドラメレクは俺の理想だ。あいつが人間で、もう三百年早く北大陸に現れてたら、今頃北大陸にはエフサハーンやセント・アイレみたいな

でつけれ国があつたかもしれねえな」

「……そうか」

鈴乃もまた、アルバートの笑みに釣られるように小さく微笑んで頷いた。

「それで、この後どうすんだ？ さつき魔王に、何か策があるみてえなこと言つてたが」  
過去の思い出話は、一旦これで終わり。今は直近の未来にある戦いを見なければならぬ。

鈴乃は小さく頷いて、もう一度宿屋を振り返る。

「魔王がアシエスの聖剣を使えない以上、正面突破で大々的にエミリアやアルシエルを奪還するのは難しいだろう。ならば闇に紛れて全く別の者を確保し、エミリアがいる義勇軍が進軍する理由を失わせる。義勇軍と皇都軍の衝突を避けることができれば、エミリアとアルシエルが争う必要がなくなり、二人の身柄を確保する次の策を打つ時間ができる」

時間さえあれば、真奥がアシエスの力を駆使し、魔力を取り戻す手段を見つけ出すこともできるかもしれないという打算もあつた。

もちろんそんな悠長なことをしては、真奥の望む一週間という期日を遥かにオーバーしてしまふが、東大陸の安寧と恵美、アラス・ラムス、芦屋の身の安全には代えられない。

「ほう？ どうするんだ」

「『教会の狂信的な暗部』が伊達ではないところを見せてやろう」

鈴乃はアルバートのからかい半分の皮肉を綺麗に返すと、法衣のさらに下から、顔の下半分



を覆うマスクを引き上げて顔を隠してしまふ。

「義勇軍に先んじて皇都中央区に入る。作戦目標は二つ。今から半日以内に統一蒼帝と、ノルド・ユステイナーの居所を探る。ノルドの安否は間違いなくエミリアの心の枷。そして統一蒼帝の存在は、義勇軍の進軍理由だ。可能ならば、二人を天使やマレブランケの影響下から脱出させる。それだけで、大きな戦いは回避できる」

「なっ……!!」

さすがのアルバートも、この案には驚きを隠せなかった。

「統一蒼帝を誘拐するってのか!? マレブランケ共の巢窟の蒼天蓋から? しかも半日って、不可能じゃねえだろうが、完全に休みなしのペースだぜ!?」

「我々なら、可能だ」

鈴乃はなんでもないのでのように頷き、長い法衣の裾を器用に払いながら、ひらりと馬の鞍に飛び乗った。

薄暗い厩の中から、陽光眩しい昼の空の下に二頭の馬が出て、鞍上の鈴乃は決意を秘めて手綱を引き絞った。

「悪魔も、人間も、訳が分からないまま争うのはもう沢山だ。なんとしてもエミリアとアルシエルの戦端が開かれる前に、統一蒼帝を義勇軍に引き渡し、両軍の激突を回避する」

## ※

馬をいなかせて颯爽と走り去る鈴乃とアルバートを窓越しに見送りながら、真奥は窓枠を齧り取らんばかりの力で歯噛みする。

確かに現状の自分では間違ひなく二人の足を引っ張ることにしかならず、戦力外通告は妥当と言わざるを得ない。

日本での戦いで聖魔法でも魔力でもない圧倒的な力を振るった真奥とアシエスなのに、エンテ・イスラに来て以降、あの謎の力はもちろん、本来真奥に備わっているはずの魔力すら戻らず、いざアシエスの力を行使しようと思うと一気に体調を崩してしまう。

「一回休みはこの際仕方ねえが、このままここでポケっとしてるわけにはいかねえよなあ」

だが、休みにかまけてこの状況を放置していいわけでは決してない。今の真奥の身の上に起こってる異常を解明できないと、今回の救出行の成否に限らず未来に限りなく不安が残る。

今後日本に戻ってなんらかのトラブルが起こった場合、そのとき対応する力が自分に戻っているかどうか、保証できない。

真奥にカマエルやリヴィクトッコを退けた謎の力どころか、魔力すら戻らない理由は、推測でしかないがいくつか考えられる。



べようとしてたノニ！」

「食ったことあのかよ！ ノルドがお前にそんな贅沢ぜいたくさせてたとは思えんがな！」

目覚める直前と直後でメニューが変わってるアシエスに構わず、真奥まおくはアシエスを引き起こした。

「おら！ 訓練行くぞ訓練！」

「はへ？ 訓練って……またゲロ吐くはノ？」

「そういうことを女の子が言うもんじゃありません!! そうなりたくないから原因を突き止めるためにも訓練するんだろうが!!」

アシエスにはやたら強気に出る真奥だが、実際この宿に至るまでの二日間、アシエスがそう言っても不思議でなくらいにはモドしてしまっているのだ。

「まー、訓練もいいんだけどさ。マオウと同じで、私も結構疲れるんだヨ」

「ん？」

アシエスはベッドから降りると、不満げな顔をして一度、大きく伸びをする。

「チョーシ出ないのは私も一緒いっしょなノ。とにかくお腹空くんのだヨ。元々マオウの力が聖法せいほう気じやないブン変な馴染なじみ方してるかも知れんシ、モウチョット労いたわってホシイ」

ここまでの道中、誰よりも食べ、誰よりも眠り、誰よりも楽をしているアシエスに言われて果てしなく釈然しやくぜんとしない真奥だが、実際に自分がこれだけ変調をきたしているのだから、ア

シエス側にもなんらかの異常が起こつていても不思議ではない。

「……分かったよ、悪かった」

真奥は勢いに任せてアシエスを叩き起こしたことを詫びながら、それでも複雑そうな顔で言った。

「とはいえ、鈴乃やアルバートに言われるがままここで大人しくなんかしてられねえからな。飯食いながら色々聞くが、いいな？」

「ん？ スズノとアルバート、どこ行つたノ？」

アシエスはこのとき、初めて二人がいけないことに気づいて周囲を見回した。

「俺達置いて先行した。だが、このままじゃきつと長期戦になっちまう。お前だつて早くアラス・ラムスに会いてえだろ。力と知恵を貸してくれ。そうじゃねえと後乗りしてもお互いの安全を確保できねえし、何より俺がバイトをクビになる」

真奥に許されたエンテ・イスラ親征の獅子は一週間。

それはとりもなおさず、彼がアルバートのシフトを抜けた日数でもあるのだ。

それをオーバーしてしまうとドタキャンの上に無断欠勤することになり、間違いなく日本での職を失う。

それは真奥にとって、絶対にあつてはならないことだった。

「えー!? 私達オイケデツリポリ!? ヒドいなー!」

「……………まあ、とりあえず、飯行くか」

ぶんすか怒るアシエスに突っ込む気力も失せた真奥は、とりあえずアシエスの手を引いて、宿に程近い食堂に向かったのだった。

「そもそも一から説明してほしいんだけどよ、お前やアラス・ラムスが、俺達と融合って、なんのためにするんだ？」

「さア？ あ、マオウ、その煮物の皿取って」

「っ……」

真奥としてはかなり核心に迫った問いをしたつもりだったのだが、アシエスはそれを煮物の皿よりも軽い調子で受け流した。

「……………あのなあ」

カボチャに似た野菜の煮物をがつつくアシエスの口の周りが汚れてゆくのを見ながら真奥は顔を顰めるが、それを目の端で捉えたか、アシエスも眉根を寄せた。

「マオウさあ、答えがそうカンタンに手に入ると思ったら大間違いだぜ」

「ああ!?」

「私だって知らないんだヨ、どうしてオトーサンやマオウと融合できるのか、なんで融合する

必要があるのか、融合するとどうしてあんなことが出来るのか、私も知らないノ」

アシエスは根菜の煮物を頬張りながら、珍しく理路整然としたことを言い出す。

「でも、お前『ヤドリギ』がどうか……」

真奥は今更ながら、笹幡北高校の校門前でアシエスが口走った単語の意味を確かめるが、

「マオウ、ご飯食べるってことを、『食べる』って言葉だって知ったのはイツ？」

「あ？」

「赤ちゃんは『ご飯を食べよう』って思って、ご飯食ベル？」

「ん？ んん？」

アシエスの言わんとすることが分からず真奥は首を傾げる。

傾けたまま、アシエスが真面目な顔でサラダボウルと饅頭が積まれた大皿を自分の方に寄せるのを、真奥は見逃さなかった。

「それをスルことと、それを自分の意志で行おうとすることと、その行動が『食べる』って呼ばれる行動だって知ることと、『食べる』ことで何が起るのか知るまでの間には、長い時間が必要なんだヨ。私は、オトーさんやマオウ達と融合できて、それが多分私が生きるのに必要で、それが『ヤドリギ』って呼ばれることだとは知ってるけど、そうすることで何がどうなるかはまだ知らナイ。多分、私の仲間達は誰モ」

「仲間？」

真奥は話に別方向からの風向きを感じて、少し身を乗り出す。

「ネーサマから聞いたことナイ？ マルクトとか、ゲブラーなんかの話」

「ああ……やっぱり他のセフィラも、お前やアラス・ラムスやイルオーンみたいに、人間の形を取るのか？」

「イルオーンを知ってるンダ!? 驚いたナ」

驚きつつも口に饅頭を運ぶのはやめないアシエスだが、それでも話は続ける。

「マルクトは、私達の中で一番頭がいいンダ。ネーサマとも仲が良くて、私も色々なことを教えてもらっタ。『ヤドリギ』って言葉も、マルクトから聞いたンダ」

「……そいつらは、今どこに居るんだ？」

真奥としては、そのことも気になる。

アラス・ラムス、アシエス・アーラ、イルオーンという実際に目の前に現れたサンプルに加え、マルクトの名はたびたびアラス・ラムスの口から出てきている。

イエソド、ゲブラー、マルクト以外にも多くあるセフィラそれぞれに人型を取った存在があるのだとしたら、彼ら彼女らはやはり世界中に散り散りになっているのだろうか。

それとも散り散りになっているのは碎かれたイエソドだけで、他のセフィラはどこか所定の場所にあるのだろうか。

「……わかんナイ。最後に話をしたのは、もうずっと昔だから……」



「リスみてえに口一杯に食い物詰め込みながらしんみりした顔されても同情できねえ」

両手に違う餛飩の入った饅頭を持ちながら交互に食べつつ、しょんぼりするアシエス。

いずれにしろ、アシエスが知らないのなら今それを真奥が考えたところでなんの意味もない。  
「でもま、あれだ」

「んッ」

真奥は鼻を鳴らしながら、普段アラス・ラムスにそうしてやるように、アシエスの頭をテールの向かいからポンポンと撫でる。

「アラス・ラムスまでは、あと一歩のところまで近づいてるんだ。頑張らなきゃな」

「ちえ……そう来るか」

アシエスは少し不満そうに言うのと、両手の饅頭を一気に口に入れる。

「仕方ないから訓練には付き合うケド、お腹が減るのは本当なんだからネ。あと饅頭十個は食べるヨ！ そうじゃないと力出ないからネ！」

「ああ……って、十!?」

真奥は度肝を抜かれて自分の皿を見る。

アシエスが先ほどから頬張っている饅頭は、肉や野菜や春雨のような加工食材を刻んで炒めて出汁の効いた餛飩を絡めたものが中に入った、かなり大ぶりの饅頭だ。

美味しいことは認めるが、一個でご飯二膳分のポリウムがありそうな炭水化物の塊である。

正直アシエスが同時に二個、食べ進めていることすら驚きなのだ。

真奥自身はサラダやスープなどと合わせて食べると一個半が限界である。

そしてもちろん、そのサイズと味を保証するためのお値段も、それなりに大ぶりだ。

「……まあ、足りなくなることはねえけど」

真奥は、パーカーの懐に忍ばせている革袋の中的路銀を思い憂鬱になる。

支払う金額の多寡以前に、そもそもこの金は鈴乃の金だ。

もちろん今回のエンテ・イスラ親征が完了した晩には、恵美とノルドの身柄も無事に確保している予定なので、最終的には彼女達に全ての経費を請求すればいい。

だが、現状事態の打開のための戦力になってもいけないにも関わらず、好き放題飲み食いした挙句に領収書をもって会社の経理に提出するようなことは、真奥の矜持が許さなかった。

『働かざる者食うべからず』

真奥の心の芯に穿たれた、決して揺るがぬ鋼鉄の楔である。

働きもせず女の金を当てにして太平楽に飲み食いするなど、魔王としても、男としても、絶対にあつてはならないことだ。

「……厳しく行くぞ」

真奥は腹の底から響く低い声でそう言い、アシエスは頷くと、

「オウ！ おつちやーン！ 饅頭あと十個!!」

丁度通りがかった店主の男性に声をかける。

「日本語で言つてどうする。あ……（亭主、この饅頭をあと十個、頼む）」

真奥は概念送受を用いず、昔覚えたイアホアン語をたどたどしく話すと、どうやら通じたらしく、

「（……十個？ あんたが食うのか？）」

店主の男は驚いて真奥を見る。

「信じられないだろうが、この子が食うんだ。気に入ったらしい。少し時間がかかってもいいから、頼む」

店主の男は目を剥いてアシエスを見るが、アシエスが余裕の表情を見せると呆けたように頷く。

「（大食らいのうちの体も、一度にそんなには食わなかったがな。まあ、待ってる）」

そう言つて厨房に引込んだ店主の男は、ものの五分もせずに戻ってきた。

真奥は驚くが、厨房の奥をよく見ると、大きな蒸籠が沢山積みあがり、食欲をそそる蒸気を吹いている。恐らくある程度のはじめ調理されているのだろう。

「（食いきれなかったら後で包んで持たせてやる）」

大皿に積まれた十個の饅頭は、店主が抱える大皿の上に盛り上がった、さながら雪国のカマクラのような有様だ。

「マオウ、おっちゃんなんて言ってンノ？」

「まあ、食いきれなくても後で包んでやるって感じかな」

「……ホホウ」

真奥を介した店主の言葉に、アシエスは不敵な笑みを浮かべた。

「私をナメたこと、後悔させてやるヨ！」

次の瞬間、アシエスは飢狼の目となって饅頭カマクラに襲いかかったのだった。

「うぶ、もう限界」

「お前は本つつ当に残念な奴だな!!」

アシエスがギブアップ宣言を出したのは、七個目の饅頭を食べ終わった瞬間だった。

日頃から何かとよく食べるアシエスだし、それこそ漫画に出てくる大食いキャラのようにこの恐ろしい量の饅頭もペロリなのかと思いきや、四つ目あたりから明らかにペースが落ちはじめた。

結局完食できたのは十個中七個。

それでもアシエスの細身を鑑みれば十分驚異的な量を腹に収めているのだが、あれだけ大見得切って食べるはじめた手前、残念感漂う結果であることは否めない。

真奥にとってさらに心臓に悪かったのは、アシエスが遠慮なくお冷のおかわりを注文していたことだ。

エフサハーンは水資源が豊富な土地だが、だからといって日本のように店で出される飲料水は、決して無料ではないのである。

真奥は饑餓よりも、水のおかわりの回数を数えて気が重くなっていた。

何度でも確認するが、今真奥とアシエスが飲み食いするのに使う金は、全て鈴乃の金なのである。

「……すまねえ、残した分は宿に持って帰って食うから、包んでもらっていいか」

真奥は重苦しい声で店主にそう言うと、店主はいかつい顔を少し綻ばせながら頷いた。

「(いいってことよ。この小さい体でうちの倅と同じくらい食うんだから、大したもんだ。いい食いつぶりだったぜ)」

褒めてもらったところ申し訳ないが、真奥は全く喜べない。

あれだけ腹に詰めた後に運動させようものなら、もう聖法気とか聖剣とか魔力とかエンテ・イスラとかヤドリギの謎とか一切関係なく、生き物の節理として、間違いなく吐く。

食休みにかなりの時間を取らねばならないことを考えると、ただでさえ時間がないのに頭を抱えたくなった。

そのときだった。

「!?」

店の外で、炸裂音のようなものが連続して、真奥は顔を上げた。

「うが……?」

アシエスも、雪山の巨大類人猿のような声を上げながら真奥と同じ方向を見る。

「ああ、あれは魔除けの爆竹の音だ」

そんな二人の反応に気づいたか、店主は真奥達と同じように窓の外を見て解説してくれた。

「(ついこの前、皇帝陛下が世界中に戦争ふっかけてたかと思いきや、悪魔がまた蒼天蓋に入り込んで、おまけにファイガンから義勇軍だか討伐軍だかが出てるって言うじゃねえか。折角安定を取り戻した国がまた崩れるんじゃないかねえかって、皆不安になってんのさ。本来は年始に一年の平和を願って鳴らすもんなんだがな)」

「(……はお)」

最初にガブリエルから聞いた話や、これまでに集めた情報の中から、どうやらファイガンという港町から興った軍が「ファイガン義勇軍」と呼ばれ、蒼天蓋解放のために動いているらしいことは真奥達も掴んでいた。

そしてその義勇軍の中には「勇者エミリア」が加わっているという噂が、既に真奥や鈴乃の耳にも入っていた。

だがホンファ村の食堂の女将も言っていたように、エフサハーン全体には、統一蒼帝とマレ

ブランケのどちらが支配者になっても庶民の生活に大した変化はないという妙な厭世観が蔓延している。

「(……あんたは、この国にどうなってほしいんだ?)」

「さあね。明日のメシが食えなくなるようなことがなきゃそれでいい」

「(それだけでいいのか?)」

「(他に望めることがない。ここはそういう国だ。大陸東部の異民族がこの混乱に乗じて政変を画策してるとか八中が触れ回ってたけど、それもどこまで本当なのやら)」

店主は肩を竦めると、アシエスが残してしまった饅頭の皿を下げる。

「(包んでくるから待ってろ)」

そこで店主は暗い話を打ち切り、厨房へと下がっていった。

真奥はそれを目で追いながら、小さく溜息をつく。

「国の運営ってのは、難しいな」

アパートにテレビが来てから、時折見るニュース番組の中には、日本以外の国の話題も多く出てくる。

大小さまざまな国の話題を見るたびに、自分が目指した『征服後の世界』はどのような姿をしていたのだろうと考えてしまうのだ。

そして鈴乃に告解した通りの国をもし作り上げていたとしたら、真奥の臣下たる悪魔達は、

また悪魔の下に置かれる彼ら人間達は『明日のメシが食べ』るのだろうか。

「(ほら。それと、食いつぶりに感心したから、代金は一個分負けてやる)」

そこに店主が戻ってきて、紙袋と、小さな赤い筒状のものが短冊状に繋がったものを持ってきてくれた。

「(これが、さっき外で鳴ってた爆竹だ。あんた達、角のこの宿に泊まってる大法神教会司祭付の旅人だろう？ 旅の土産というには少々物騒かもしれないが、この国では縁起のいいものだ。邪魔にならないなら、持っていきな)」

「土産……ねえ」

真奥は日本語で呟くと、小さく会釈して紙袋と爆竹の短冊を受け取る。

「おい、アシエス」

「ヴん？ 何？ 訓練ならスグには無理……」

「分かてるよそんなことは。でも散歩くらいなら平気だろ。腹ごなしにちよつと歩くぞ」  
「いいケド……うぶ、どこニ？」

真奥は複雑な顔で手の中にある紙袋と爆竹を見下ろして、言った。

「買い物だ」



※

「え？ マジで買い物すんノ？ ……うブ」

膨れた腹をさすりながら真奥の後に続くアシエスは、真奥が本当に、街の雑貨屋に入っているのを見て目を丸くする。

「他にやれることもねえからな。なら、時間無駄にしたくねえし」

「ま、イーんだけど……なんなのココ」

真奥が選んだのは、反物や伝統工芸品を扱っているらしい雑貨屋だった。

土産物屋、というにはあまり華美に偏っておらず、店の大半は実用的な雑貨ばかりである。

それでも店内には織物や衣類、食器、彫刻などが所狭しと並べられていて、ちょっとしたデパートのワンフロアのようなのだ。

「マオウ、こういうの買うノ？ なんかイメージと違っただけド」

アシエスが棚から手に取ったのは、鳥をあしらった寄木細工の小物入れだった。

とはいえ、中にどのような「小物」を入れるのか、悩むサイズの箱でもある。

「あれにガソリン入れるとカ？」

「入れねえよ」

アシエスが次に指さしたのは、これも水鳥をあしらった水差しだ。

「お、これなんか良さそうだな。おいアシエス、ちょっとこれ持ってきてくれ」

「ン？ ……ンン？ ……げっぶ」

アシエスは真奥から饅頭と爆竹を受け取るが、真奥が手にしているものを見てまた首を傾げた。

「私も生まれて間もないからよく分かんないんだケドさ、そーゆーのツテ、女の子が使うんじゃないノ？」

真奥が手にしているのは、花と鳥をあしらった薄桃色の巾着だった。

花の枝に止まった美しい色合いの羽を持つ小鳥が二羽、寄り添っているデザインに、イアホアン語で書かれた吉祥を表す文字。

どう見ても、真奥が用いることのなさそうなデザインの品である。

「俺が使うわけねーだろ。土産だよ土産」

「ミヤゲ、ミヤゲ……ああ、お土産カ」

「ちーちゃんにな」

「チホにお土産……？ マオウ、言っちゃナンだけど今そんなことしてる場合カイ？」

「本っ当にお前にだけは言われたくねえな！」

真奥はひきつった笑いでアシエスを振り返ると、巾着を元の棚に戻す。

「簪は鈴乃のイメージがあるし、ちっと高いからなあ。あー、でもちーちゃんこういう櫛とか結構喜びそう。……うん、高いなあ」

真奥は細い声でそう言くと、他の棚に目をやる。

「帰ったら、誕生パーティーしなきゃいけないんだよ」

「誕生パーティー？」

「ちーちゃんと恵美のな」

「そーなの？ エミって、ネーサマと融合してる人のことだったッケ」

アシエス自身は恵美との面識はないが、真奥と出会ってからここまでの道中で何度も会話に出てきた名なので、さすがにどういう人物かは把握している。

逆に言えば、真奥と会うまでノルドはアシエスに自分の娘のことをあまり多く語らなかったのだろうか。真奥は、無事にノルドを救い出せたとして、なんとなくその辺りのことで恵美と揉めそうな気がしてくる

「ああ。本当ならお前やノルドに会った日の少し前にやるはずだったんだけどな。恵美のバカがこんなことになっちまってずっと延期されてよ。他にも色々忙しくて、結局今までなんの準備もできなかったんだ」

思えばパーティーをすると決まっていた日からもう随分と日が経ってしまった。

やむを得ないことだし、そんな雰囲気でもなかったせいもあって肝心の千穂の誕生日、真奥

は千穂に祝福の言葉一つ贈ることができなかった。

それどころか、パーティーが予定されていた日に、鈴乃に嵌められたという事情こそあるものの、恵美を心配する千穂を無用に傷つけてしまっている。

そのことを真奥は自分でも意外なほど後悔していた。

恵美の行方の手がかりが掴めて以降は鈴乃とともにエンテ・イスラ行きの準備に追われ、それこそ出立のその日まで、千穂と恵美を同時に祝う誕生日パーティーに用意するプレゼントを忘れていたと、千穂自身の前で思い切り言ってしまった。

これでは鈴乃に「悪い男」呼ばわりされても反論のしようがない。

いや、悪い男というより、もうダメ男の部類だろう。

「もうちーちゃんにだけは、悲しい思いはさせたくねえからな」

日本に残った千穂は、毎日不安に苛まれながらも、気丈に日々を送っているのだと思う。

だからこそ日本に戻ったときには、この数週間がダメだった分、きちんと笑顔にしてやりたいと、真奥は心から思うのだ。

「……ん？」

心なし楽しそうに千穂への土産を選んでるように見える真奥の背を見ながら、アシエスはふと違和感を覚え、自分の額に手を当てる。

別に食べすぎで熱を出したわけではないが、今真奥が千穂のことを話したとき、なぜか額の

奥に一瞬熱がこもったような気がしたのだ。

アシエスはしばらく額を自分の指でぐりぐりと押していたが、違和感が取れないのでいじめるのを諦め、肩を竦める。

「だからマオウは、スズノのお金でチホのプレゼントを買ってるとうあダツ!!」

そしていつもながら大した悪意もなく、アシエスは正直に、かつ的確に真奥の痛いところを抉り、真奥はつい条件反射的にげんこつを繰り出してしまふ。

「この分は、後で自分の財布から日本円で払う!」

「ううーマオウはヤメといたほうがいいーヨー……ポリーヨクオトコだよヨー……あれ?」

脳天の痛みになりながら、アシエスはふと気づいて真奥を見上げた。

「そのエミって人にもプレゼント、するの? エミって、女の人だよネ?」

「ん?」

「や、誕生日のお祝いって、大切な人のためにやるもんなんでシヨ? チホやスズノが大切な友達なのは分かるけど、エミって人もそんなノ?」

「鈴乃が大切かどうかはさておくが……ノルドか? そんな妙な話を吹き込んだのは……」

日本の誕生日の文化まで、アシエスが元から知識を持っていたとは思えない。となれば彼女の身の回りにいた誰かが教えたか、ここ数日の間に真奥が見ていないところで誰かが何かの弾みで教えたのだろうか。

「私とオトーさんが昔お世話になった人に聞いタ。サトーってゆーノ。私達のウソの名前はそのオッチャンに借りたンダ」

「へいへい左様で」

真奥は溜息をついてから、手に取っていた木彫りのペーパーウェイトを置いた。

「恵美の分は、まあちーちゃんの手前、仕方なくっていう感じかな。俺が恵美の分のプレゼントを用意してないとちーちゃんが怒る……いや、違うな、なんか悲しみそうな気がしてな」

「ふーん？　チホが喜ぶから、エミにもプレゼントするノ？　変なノ」

「ちーちゃんは恵美と仲いいからな。っていうかちーちゃんは、何かと俺達悪魔と恵美や鈴乃達を仲良くさせようとすんだ。まあ日本にいる間は、恵美や鈴乃の機嫌を損ねてもいいことねえし、ちーちゃんのためなら仕方ないから恵美にも気を使ってやろうかなって感じた」

「フーン……オンナゴコロはよくわかラン」

したり顔でアシエスは腕など組んで見せるが、ふと気づいて真奥の腕を引っ張った。

「で、結局マオウにとってエミってどういう人なノ」

「そうだなあ。アラス・ラムス挟んで色々あったりするが、あいつ個人は俺にとって」

真奥は小さく頷く。

「やっぱ、ライバルってのが一番しつくり来るな」

「らいばる？」

アシエスは眉根を擧める。

言葉の意味が分からないわけではなく、真奥の真意を捉えかねているのだろう。

真奥はそんなアシエスの顔を見下ろして苦笑すると、食器が並ぶ棚の前へと移動した。

「恵美は俺と同じかそれ以上に強くて、俺の正体を知ってて、唯一俺に对等かそれ以上の目線で向かってくる奴だ。それに、俺に無いものをあいつは全部持つてる。本人が気づいてるかどうかは知らねえがな。羨ましいと思つたことは一度や二度じゃねえよ。だからこそ俺は、あいつには負けたくねえし、きつとライバルつてのが一番正しい。あいつもよく、俺のこと宿敵宿敵言つてるしな」

「ん~~~~、でも誕生日をお祝いしてプレゼントすんのか。やっぱヨク分からん」

アシエスは真剣に困つた顔で腕組みしながら体をうねらせはじめが、恵美を直接知らないアシエスにこれ以上話しても意味はあるまい。

真奥は話を打ち切つて商品の棚に目を移し、あるものに気づいて目を見開いた。

「お、これいいんじゃないか？」

食器が並ぶ一角にあったそれを手に取つた真奥は嬉めつ眇めつして、それに種類があることに気づく。

「なんだっけ、これ贈ると縁起がいいとかいう話あつたよな」

木製のそれは一つ一つが手掘りの細工ものらしく、この店に多い鳥や翼のモチーフ以外にも、





ワイングラスや蹄鉄、花や星などがあしらわれたものが沢山ある。

「なあアシエス、これならいいよな？ 実用品だし、細工可愛いし、使わなくても保管するのに邪魔にならなそうだし」

「分かんナイけど、いいんじゃない？ ……ウ」

アシエスの至極適当な後押しで真奥は心を決め、品定めを開始する。

「ちーちゃんは、やっぱ花かな。恵美は……そんなに高くなさそうだし、アラス・ラムスの分もあつた方がいいから……アラス・ラムスって鳥好きだったよな。鳥でいいか」

恵美にというより、アラス・ラムスのことを考えて真奥は「それ」を、三本手に取る。

「（これ、こつちを一本で、こつちを二本で包装してくれ）」

真奥は手に取ったそれを店主のところに持って行って会計を済ませる。

とりあえずこれで千穂に対して最低限の面目は立つという場違いな達成感を覚えながら、

「さてと、おいアシエス。お前そろそろ腹の具合どう……あれ？」

真奥はふと振り返ったアシエスの顔色が、蒼白になっっていることに気がついた。

目の焦点が定まらないようで、浅く荒い息を吐いている。

真奥はその様子を見て、嫌な予感にかられた。

丁寧とは言い難い難い包装してもらった「それ」だけはしっかり受け取り上着のポケットにねじ込みながら、真奥はアシエスを担ぎ上げて店の外へと飛び出す。

「おい！ もうちよつと耐えろ！ 道の真ん中でそれはやめろ！」

だが、真奥の願いは無情にも叶えられないことはなかった。

「うげろろろろろろろ……」

「うわああああああああああああ!!」

二つのことが、同時に起こり、真奥は悲鳴を上げた。

不幸中の幸いは、それが起こったのが先ほどの雑貨店の中であつた、ということだろう。

まず、真奥の肩の上で、アシエスが吐いた。

それが明らかに許容量を超えた食べすぎによることは疑いもなく、時間をおいて体が拒否反応を起こし、限界を超えたものを洗いざらい拒絶したということとは納得ができる。

だがそれ以上に問題なのは、ほぼ同時にアシエスの額から、地面に向けて紫色の光が突き立ったことだった。

「おおおおおお!!」

アシエスの額から放たれた光は、舗装されているとはいえ、日本のようにコンクリートで舗装されているわけでもない土が剥き出しの地面に、アシエス自身が落ちてしまいそうな陥穽を穿った。

真奥は慌ててアシエスの落下を防ぐべくサロベットパンツの肩紐を掴むが、紫色の光は如何なる物理的な力を持っていたものか、そのままロケットのようにアシエスと、その肩紐を掴ん

でいる真奥ごと空中に持ち上げはじめたではないか。

「ばっ……なっ!?」

真奥は慌てふためくがもう遅い。

轟音とともに何事かと出てきた街の民衆の中には先ほどの食堂の店主の顔もあり、謎の少女ロケットが今まさに蒼穹に飛び立たんとしているのを目を丸くして見上げている。

だがそのロケットの母船の部分は、食べ過ぎた胃の内容物を吐しゃ物としてぶちまけながら宙に浮いているのだから始末に負えない。

「おい! アシエス!! どうした!? 何が起こった!?」

アシエスの肩紐にぶら下がって宙吊りになりながら真奥はアシエスに呼びかけるが、アシエスは朦朧とした顔をしたまようめくばかり。

そうこうしているうちに、足元では例の魔除けの爆竹が鳴りはじめたり、街常駐の鑲紅巾の兵が駆けつけたり、合掌して拝みはじめる者が現れたりともう大混乱になっている。

「なんなんだなんなんだよいきなり!?」

吐瀉物は生物としての自然現象なのだろうから置いておくとして、紫の光は明らかにイエソドの欠片の反応だろう。

アラス・ラムスと同じくアシエスの欠片も彼女の顔にあるらしいことがこの極限かつ意味不明な状況で確定したわけだが、真奥が何もしていないのにイエソドの欠片がここまで強烈な反

応をするということは……。

「クソっ……鈴乃とアルバートの奴、何かしくじりやがったか!?」

どう考えても、今皇都かその周辺のどこかにいるアラス・ラムスの影響だ。

ここまで強烈な反応が出るからには、アラス・ラムスが相応の力を発揮しなければならない状況に置かれているということだ。

真奥にはそれが恵美が聖剣を振るい、天使クラスの強力な敵を相手に戦っていることくらいしか考えられなかった。

「おいアシエス！ 気をしっかり持て！ 取りあえず一度降り……」

「うぶっ」

「あ、おいっ!」

そのとき宙に浮かんだアシエスが、両手で口元を押さえた。

「や、やめろ！ この高さでそれは……っ!!」

アシエスの女性としての矜持と、下の大地への無差別爆撃を心配した真奥だったが、アシエスはなんとか耐えた。

耐えた代わりに。

「うわああああああああああああ……」

額の光の放射が一気に強まり、真奥はアシエスから手を離すこともできず、制御を失った口

ケットよろしく錐揉み回転しながら街の上空を横切り、町はずれの遊水池に墜落したのだった。

※

真奥とアシエスがロケット発射される少し前のこと。

「……案外、大したことないわね」

エフサハーン皇都民商区の丘に敷かれた幕営で、恵美は東の地平にはつきりとその姿を現した蒼天蓋天守を眺めて呟いた。

「何がだ？」

隣に立つオルバがその言葉を聞いて顔を向けると、恵美は肩を竦める。

「蒼天蓋。大空を覆わんばかりの美しい城と町って触れ込みで、初めて来たときには実際そうだと思ったけど。こうして改めて見ると、そんなに綺麗じゃないって」

「そうかな。私が言うのもなんだが、西大陸最高の建築がサント・イグノレッドだとしたら、東大陸はやはり蒼天蓋だと思うが」

オルバの言う通り、かなりの遠距離から見ても巨大な城の裾にはさらに中央区の町が広がっており、さながら巨大な山を描いた一幅の絵画のような景色が広がっているが、恵美はその光景に微塵も心を動かされなかった。

「本当、あなたが言うことじゃないわね」

教会を裏切り、東大陸全土や魔界の悪魔まで奸計に巻き込み利用しようとするオルバに、景勝を語る心があるとは驚きである。

「私も実物は見たことないけど、春に桜が満開になった京都や姫路城の写真なんか見てると、こんなの比じゃないんだろうなって思うわ」

「ふむ、まあ気に食わないと言うのならエミリア、君がこれから統一蒼帝陛下を『救って』蒼天蓋の景観について進言すればよからう」

恵美は暗い瞳でオルバを睨むと、顔をそむけて、丘に設置された幕営本部の天幕へと向かう。これから、恵美も交えて『皇都解放作戦』の軍議が始まるのだ。

蒼天蓋の城と中央区を制圧する悪魔の軍を、『勇者エミリア』率いる東大陸解放軍、通称『ファイガン義勇軍』にて駆逐する作戦だ。

だが、そもそも東大陸全体にマレブランケの軍を引き入れたのはオルバであり、恵美をエンテ・イスラに留め置くに当たり、オルバ自身がマレブランケと協力していた節があった。

それなのに今、恵美の力を使ってそのマレブランケを駆逐しようとしている。

蒼天蓋の民商区と農工区の境界に至る今日までに、既に二人のマレブランケ頭領格を、義勇軍は打ち滅ぼしていた。

日本に渡る前は、あれほど悪魔を斬ることを渴望していたはずなのに、ドラギニエツィーノ

とスクルアミリョーニイという名のマレブランケ頭領格が滅ぼされたと聞いた瞬間の罪悪感  
は、筆舌に尽くしがたいものであった。

恵美は自分の手に目を落とし、かつて自分も、今義勇軍の中にいる誰かと同じように悪魔に  
手をかけていたことを思い出し、そのおぞましさと、おぞましいと感じる自分の心の身勝手さ  
に呆れながら、拳を握りしめた。

『ま、きょうとってなに？　とうきょ？』

と、そのとき、恵美の脳裏に明るい声が響く。

『……うん、日本の、大きな町よ。東京と似てるけど、違う名前の町』

『きょと……ときょ……うきょと……う？』

アラス・ラムスは『とうきょ』と『きょ』とが混ざってしまったらしく、しきりに二つ  
の都市の名を繰り返している。

アラス・ラムスの様子にはんの少しだけ心の温かさを取り戻した恵美は、腰に提げた武骨な  
剣の鞘の位置を直すと、また歩きはじめた。

恵美は今日に至るも、一度も進化聖剣・片翼は発動させなかった。それどころか、前線  
に出ることもなく「敵」と一度たりとも刃を交えていない。

オルバも、恵美が直接力を振るうよりも義勇軍の旗印として鎮座している方が都合が良いよ  
うで、恵美が妙な気を起こさない限りは義勇軍内での恵美の行動に注文をつけてくることはな

かった。

そのおかげでなんとかアラス・ラムスの宿る聖剣で「敵」の命を絶つことだけは避けてきたが、もはやオルバの行動は、完全に恵美の理解を越えている。

「え、エミリア様！」

と、本部の天幕の前に控えていた八巾騎兵が青い顔で、戻ってきた恵美に駆け寄ってくる。

「どうしたの？」

「蒼天蓋に潜入した先遣隊からの伝令です。お、お心静かにお聞きください」

「何、早く言って」

恵美が望まぬ戦いを強いられていることについてほとんどの八巾騎兵に責任はないが、それでも不愛想になってしまうのは仕方がない。

最初は恵美のただならぬ雰囲気（きふい）に多くの八巾騎兵達は恐れをなしていたが、どうやら今はそんなことを言っていられないほどの情報（じふほう）がもたらされたようだ。

「し、信じがたいことなのですが……」

伝令の騎兵は青い顔と震える声で、それを告げた。

「蒼天蓋の天守閣に、悪魔大元帥アルシエルありとのことですよ！」

「なんですって!? 芦屋が!?」

これは、さすがに恵美も驚いた。



「あ、あしや？」

「……あ、ううん、なんでもない」

ついエンテ・イスラの人間の前で何も知らない日本人を前にしたようにアルシエルの日本の名を口走ってしまったが、それくらい、衝撃的な伝令であった。

「そ、それで、本当にアルシエルなの!？」

恵美は動揺を抑えて確認すると、伝令兵は動揺がそのまま表に出たように何度も首肯した。

「どうやら間違いではないようで、悪魔大元帥アルシエルは数日前に突如現れ、マレブランケを統率し、エフサハーン全土から、蒼天蓋城の麾下にある八巾騎兵を招集し我らファイガン義勇軍を待ち構えているとのことです……!」

一体どういう理由で、芦屋が蒼天蓋にいるのかは恵美には推測のしようもない。

だが、芦屋がいるのであれば、恵美はこう聞かざるを得ない。

「魔王は!? 魔王サタンはいるの!？」

真奥と芦屋がマレブランケの軍に引き入れられ新たに魔王軍を興すのは、かねてより恵美と鈴乃が危惧していたことだ。

これまでの経緯からそんなことはあり得ないと心のどこかで思う恵美だが、それでも最悪の展開には備えなければならぬ。

そして伝令の騎兵の返答は、

「は？ い、いえ、魔王サタン？ そんな報告は……そもそも魔王サタンはエミリア様が倒したのではなかったのですか？」

というものだった。

ファイガンを発つてから分かったことだが『勇者エミリアの安否』の情報は地域によって違いが見られたが、魔王サタンは勇者エミリアによって倒された、ということだけは確定事項として巷間に流布しているらしい。

だからこそ伝令の騎兵も、魔王サタンの名に首を傾げたのだろう。

「……そう、そうね。アルシエルがいる、そう……」

恵美は眉根を寄せて唸る。

芦屋が単独で蒼天蓋にいる理由は全く以て不明だが、マレブランケの行動を忌み嫌っていたことからしても、今の状況が芦屋の本意でないことくらいは察しがつく。

ならば、一体誰が、なんの目的で彼を蒼天蓋に連れてきた？

「いずれにしても」

「っ……」

「あ、お、オルバ殿……」

恵美の背後にはいつの間にかオルバが追いついてきて、恵美に考える暇を与えなかった。

「アルシエル一人ならば、今のエミリアの敵ではあるまい。我々のやることに変わりはない。

案ずるな」

「で、ですよ。アルシエルは先の大戦でもエミリア様に恐れをなして中央大陸に撤退したわけですし……」

青ざめていた伝令の騎兵は、オルバの言葉で少しずつ顔色を取り戻してくる。それを横目で見ながら、恵美の表情は暗くなった。

つまり、

「……それが、私の役割なのね」

悪魔大元帥アルシエルと互角かそれ以上の力で刃を交えられるのは義勇軍の中では恵美とオルバしかいない。

オルバは「勇者エミリアが東大陸を救う」という状況を、アルシエルやマレブランケ達を利用して再現しようとしている。

その真の目的は今の恵美には知りようもないが、オルバに課されたその役割を果たせなければ、恵美の夢はそこで潰えることだけは確実だった。

「では、中央区攻略と統一蒼帝をお救いするための作戦立案の軍議を始めよう。皆、集まっているな」

オルバが先に立って天幕に入り、恵美は一瞬遅れてその後を追う。

薄暗い天幕の中は恵美の暗い心をそのまま表しているようだが、そのとき、

「あるしえーる、いるの？」

小さな声が、恵美の心を打った。

「あるしえーるいるなら」

アラス・ラムスの声は、恵美の心とは全く正反対に、光り輝いていた。

「ばばもいる？」

「……………ばば……………魔王……………」

恵美ははっと身を強張らせて、立ちすくむ。

「ん？ どうしたエミリア」

急に固まった恵美を見てオルバが声をかけてくるが、それでも恵美は、しばらく凝固したまま動けなかった。

「……………あ」

今私は、何を考えた？

アラス・ラムスの言葉に、何を思った？

「私は」

思うはずがない。

思っていないはずがない。

そんなことが、あるはずがない。

「……悪いけど軍議は欠席させてもらうわ。気分が良くないの。相手が誰であろうと、一番強い相手と私が戦う。それでいいんでしょ」

恵美は早口にそう言うと、誰の返事も聞かずに身を翻して天幕を飛び出した。

「え、エミリア様!？」

先ほどの伝令の騎兵の声を背に受けながら、恵美は早足で自分にあてがわれた天幕に飛び込むと、簡易寝台にへたり込む。

呼吸が苦しい。

動悸が酷い。

「……私……どうしちゃったのよ……っ!」

恵美は、寝台を叩き壊すほどの勢いで殴りつけた。

「何があっても……何があっても! あいつは! 私!! 私とお父さんの……っ!!」

『お前に新しい世界を見せてやる』

夕暮れの新宿で、愚にもつかない夢物語を語ってみせた笑顔が、フラッシュバックする。

「……敵……のくせに……」

恵美が窮地に陥ったとき、大した力も持っていないくせに、人を食ったような顔で飄々とした態度で現れて、馬鹿みたいなこと言いながら、結局全部丸く収めてしまう。

「なん……で……」

「まあ、きつとばはくるよ！ いいこいいこしてもらお、ね？」  
もう、限界だった。

「……………そう……………ね……………来て、くれるよ……………ね……………」

心が弱っていたことを、言い訳にするつもりはない。

だがもう、誤魔化しきれなかった。

ずっと恵美は、心のどこかで、下らない冗談と文句を言いつつ、飄々と恵美と恵美の大事なものを窮地から救うために『真奥貞夫』が現れることを望んでいた。

それを、認めたくなかった。

有り得ないと本気で思っていた。

何せ、今に至るもエンテ・イスラの仲間であるエメラダとアルバートが、なんの動きも見せていないのである。

恵美の異変に気づいていないということはないだろうが、彼らが動けないのに、異世界にいる真奥達が動ける道理はどこにもない。

梨香に飛ばした概念送受も、肝心なことは何一つ伝えていないわけで、よしんば梨香が真奥や鈴乃に連絡を取ったとしても、恵美の状況を把握することは不可能だろう。

だが芦屋の身がエンテ・イスラにあるならば、真奥はその行方を必死に探すだろうと思ったとき、恵美の心の奥底の、隠われていない部分が悲鳴を上げたのだ。

芦屋を追って真奥がエンテ・イスラに來れば、自分の窮地にも気づき、ついでに救ってくれるのではないか。

そんな、あさましい思いが、露呈してしまった。

無茶な話なのだ。

恵美の置かれた状況を打開するには、単に恵美とアラス・ラムスの身を保護して日本に連れ帰るだけでは不十分なのだ。

恵美の心を縛る父の麦畑は遙か遠い西大陸の地にあり、それを諦めきれないが故に、恵美は望まぬ戦いに身を投じている。

たとえ真奥が絶対的な力を持つ魔王型を取り戻して現れたとしても、オルバとラグエルを同時に倒すことは難しいだろう。

真奥が恵美を庇う行動を見せた途端、誰かが西大陸のオルバの配下に指令を飛ばしてしまえば、その瞬間麦畑を救うことは物理的に不可能になる。

今の恵美の状況全てを知る人間がこの世からいなくなるか、エンテ・イスラ中が『勇者エミリア』への関心を失わない限り、もう日本に帰ったところで安息は永遠に訪れない。

既に東大陸には勇者エミリア生存の噂が巡りはじめており、いずれ八巾騎兵やオルバ達が公式の情報として全世界に向けて表沙汰にするだろう。

そうすれば、どこに逃げようと、エンテ・イスラ中の『聖剣の勇者エミリア』の身柄と雷名

を欲する勢力から追手がかかる。

だからといって、例えば恵美が父の煙や故郷の夢を諦めて日本に逃げ帰ったところで、かつてのルシフェルや鈴乃やサリエルがそうしたように、チリアットやファーフアレルロやオルバがそうしたように、目的のためには日本に被害を及ぼすことをなんとも思わない者達が日本にやってくる、恵美の身柄を追い求めるだろう。

そうすれば恵美は、守るはずだったエンテ・イスラの民達を追い払うために、剣を振るわねばならなくなる。

状況の全てが、恵美に絶望の道を示していた。

何をどうしたところで、今の恵美が完全に救われることなどあり得ないのだ。

それでも。

「嫌よ……どうしてよ……なんで、こんなに私の心に入り込んでるのよ！　ふざけないでよ！」

恵美の声は、嗚咽にまみれていた。

芦屋が、エフサハーンやエンテ・イスラを支配するために戻ってきた、という考えは、微塵も起こらなかった。

真奥がそれを許さないだろうことが、恵美には分かっていたからだ。

真奥が許さなければ、芦屋もその意に背くことは決してないと分かっていたからだ。

そう心の底から確信できるほどに、恵美は真奥と時間を共にしていたのだ。



「……魔王……ま……おう……っ！」

恵美は、心の奥にちらつく、周りの誰からも好かれていた笹塚住まいの、アルバイト青年の顔に呼びかけた。

「……たす……けて……」

涙が止まらない。

己の心のありようが分からず、怖く、悔しく、苦しく、それでいてどこか不思議な安堵を覚えて、恵美はただ泣いた。

この瞬間、自分を今まで支えていた、世界と人類を、義憤と正義の志で救う『勇者』というアイデンティティーが砕け散ったことがはつきりと分かった。

心が挫けた原因が、オルバを始めとしたエンテ・イスラの者達の『勇者』への心無い仕打ちだけだとは思わない。

もともと自分は、そんな崇高な志など持てる心の器を持った人間ではなかったのだ。

「……エメ、アル……ごめんなさい、ごめんなさい……お父さん……ごめんなさい、私、もう、一人じゃ戦えない……」

【まま】

エミリア・ユステイナと言う名の勇者は、生まれや血がどうであれ、ほんの数年前まで、農夫の一人娘として平和な暮らしを享受する、どこにでもいるただの少女だった。

齡十八にも満たない少女が憎しみの果てに生み出した勇者の志は、今、潰えたのだ。

「分からない、私、どうしたらいいの……お父さん、エメ、魔王……お願い、誰か……」

【まま】

そのときだった。

恵美は何も働きかけていないのに、まるで恵美の傷ついた心を癒す神が現れたかのように、アラス・ラムスが一人でベッドの上に顕現した。

その額は、なぜか聖剣を発動するときのように、他のイエソドの欠片に呼応したときのように、三日月型に光り輝いている。

アラス・ラムスは涙に濡れる恵美の顔を、綿のように柔らかく暖かい両手で包み微笑んだ。柔らかな紫色の光とその微笑みがあまりにも眩しく、自分の心の淀んだ闇を照らすようで、

恵美はその手に縋りつく。

「……ああ、ごめんなさいアラス・ラムス……でも、私、ちょっともう、ダメみたいで……」  
なんて情けない有様だろう。

アラス・ラムスの『本当のまま』がライラであったことに一丁前に傷ついておきながら、自分を守るべき『娘』を前にただ泣くことしかできない。

だが、アラス・ラムスはその恵美に向かって、その柔肌と同じくらい純粋な心の色の言葉をかけた。

「わたしも、ずっとひとりだったよ」

「……？」

「でも、いまはままといっしょ」

「アラス・ラムス……？」

「まあ、いつもぼぼといっしょ。ちーねーちゃ、あるしえーる、すずねーちゃ、るしふえる、えめねーちゃ、みんなままといっしょ」

そしてアラス・ラムスは、その瞬間だけ恵美から目を離してどこか遠くを見るように横を向き、小さく咳いた。

「きつと、あしえすも、いっしょ」

「アラス・ラムス……？」

「だから、だいじようぶ。ね？ もうすぐ、また、みんないっしょ」

「みんな……いっしょ……」

恵美は、真っ赤になった両目を拭いながら、震える溜息を漏らす。

「……そうね、そうよね、みんな、ずっと一緒だったのよね……」

恵美は、今更そんなことに気づく。

敵であつた、それは間違いない。

でも、日本での自分達は、敵だとか悪魔だとか人間だとかそんなことを越えて、ずっと一緒

に過ごしていたのだ。

例えそれが、どんなに『間違ったこと』だったとしても。

「でも、もうダメよ。ちよつと気づくのが遅すぎたわ。ここまで来てしまったら、例え私がお父さんの麦を諦めたって、もう魔王達とは一緒にはいられない……」

「なんで？」

「……だって」

恵美は、右手を見下ろす。

「私は自分の夢を失いたくないがために、オルバの言いなりになって魔界の……魔王の民を、殺したんだもの」

望まぬ戦いではあった。相手に非がなかったとも言えない。

だが今の恵美には、自分の行動が、かつて悪と断じてきた魔王軍の行動とまるで同じようにしか思えなかった。

悪魔が、ただ殺戮を繰り返すだけの意志疎通の測れない魔物ではないと知っていながら。

自分の欲望のために、恵美は己の名を神輿に担ぐファイガン義勇軍が、罪の程度も分からないマレブランケ頭領格を殺すことを止めなかった。

せめて己の夢を守るためと言い張り、自分自身で剣を振るって戦うことができたならまだ違ったかもしれない。

だが、結果として恵美は抗うことも動くこともせず、ただ、座して状況を静観していた。悪魔を駆逐する勇者、義勇軍の総大将として、他人に手を汚させた。

「魔王は、道理の通らないことが大嫌いなものよ。どんな言い訳をしたところで、私の利己的な行動を許さないわ。多分アルシエルも一緒。だから……」

恵美がそう言い募ろうとしたときだった。

「……？」

天幕の外が、にわかに騒がしくなりはじめた。

主だった兵達は皆軍議に参加しているはずだが、気がつくや外が、奇襲でも受けたかのような騒ぎになっている。

大勢の兵達が行き来し、何事か言い合っているようだが……。

「え、エミリア様、失礼いたします」

そのとき、先ほどの伝令の騎兵の心配そうな声が、天幕の入り口から聞こえてきた。

「あ、あの、大丈夫ですか？ ご気分が優れぬようでしたが……」

「……ごめんなさい、大丈夫よ」

あれだけ大声で泣いてしまったのだから、誰かに聞かれていてもおかしくはない。

今更取り繕う気力もなかったので、目尻を軽く拭うと立ち上がって顔を見せる。

アラス・ラムスの額の光はいつの間にか消えていて、先ほどの神秘性も一緒になりを潜め、

惠美が伝令の騎兵に注意を逸らした瞬間ベッドの上でうだうだと転がりはじめた。

「あ、あの、お取り込み中恐れ入りますが……」

惠美の泣きはらした顔を見た伝令の騎兵はかすかに動揺した気配を見せたが、すぐに惠美に軍議が行われている幕営の本部に来るよう伝えた。

「蒼天蓋城より、悪魔大元帥アルシエルの書簡が届いたとのことだ」

「アルシエルの、書簡？」

「は。それがエミリア様宛とのことだ、至急お越しいただくようオルバ殿が……」

惠美は軽く鼻をすすり、大きく息を吐くと、頷いて宿営天幕を出た。

どうも、妙な具合だ。

芦屋……アルシエルは、自分がこの軍の中にいることをどうやって知った？

惠美はアラス・ラムスを融合状態に戻すと、早足で幕営本部に向かう。

そこには不機嫌な顔をしたオルバと、緊張した様子の将校達が惠美を待ち構えていた。

「来たか、エミリア」

オルバの前には羊皮紙が広げられていた。それが恐らくアルシエルからの書簡だろう。

「私宛に届けられたそうね。……見せてもらっていいのね？」

「致し方あるまい」

オルバの口調が固いのも無理はない。

オルバは、アルシエルが日本で『芦屋四郎』として恵美と敵味方の垣根を越えて交流していたことを知っているのだ。

先程はアルシエル出現の報にも動揺しなかったことから、アルシエルのエンテ・イスラ帰還までオルバは想定していたのだろう。

だが今のオルバは、アルシエルの書簡について、想定外の事態に直面したときのような厳しい顔つきをしている。

義勇軍の八巾騎兵達の手前、敵の総大将から来た勇者宛ての書簡を握り潰すことはできなかったようだが、いずれにしろアルシエル側から接触があること自体、オルバにとっては予想だにしない出来事だったのではないか。

西大陸の山の麓で再会してから今日まで、恵美の見える範囲でオルバが日本に向かった様子はなかった。ということは、アルシエル帰還にはオルバの協力者（或いはオルバが協力者なのかかもしれない）が動いている。

『芦屋四郎』ならともかく『アルシエル』の行動を制限できるとオルバが考えていたのだとしたら、相当の実力者がオルバの後ろにいると考えるのが自然だ。

ラグエルがオルバと一緒に行動していたことを考えれば天界の天使の中の誰かと考えて間違いはないだろうが、なればこそ『アルシエルの書簡』など、例えアルシエル本人がしたためたとしても恵美の下に届くはずがないのである。

「どういふことなの……」

恵美は、オルバとその背後にいる者以外の、別の意思を感じて顔を顰める。

「エミリア様、お気をつけください。我々には読めない文字で書かれております。悪魔の呪いがかかった文字の可能性もあります」

恵美のそんな表情をどのような意味に取ったものか、八中騎兵達の怯え方は尋常ではなかったが、とにかく見てみないことには判断のしようもない。

恵美はオルバから羊皮紙を受け取ると、喉を鳴らしてその書面を見る。

中央交易言語で書かれた悪魔大元帥アルシエルの署名と、エミリアの名、そして、

「……………んえ？」

したためられた文面に、心の底から、疑念の声を上げた。

「何が書いてあるのだ」

オルバのいらだたしげな声も、この場合はあまり恵美の神経を逆なでしなかった。

「え……と、とりあえず魔界の文字とか呪いとかじゃなかったけど、お、オルバ？ あなたこれ読めなかったの？」

恵美の問いに、オルバは忌々しげに鼻を鳴らした。

「彼の世界の文字だということは分かっている！　だが声に出した言葉なら概念送受でなんともなるが、書かれた文字の全てを理解できるほどあの世界にいたわけではない」



と、オルバは羊皮紙の端を指差す。

「表音文字であるヒラガナ以外には、この文字が『冷えた状態』、これが『荷物』を表すということ。後ろの文章は、復讐する意志を示す慣用句だということくらいしか分からない」

「……ま、まあ、間違っていないけど……」

恵美は複雑な表情で頷きながら、再び書簡に目を落とした。

これは、アルシエルが恵美に何かを伝えようとした書簡だ。

そしてアルシエルが恵美と積極的に敵対する意志がないということもなんとなく分かる。だが、何を伝えたいのかということが全く分からない。

「何が書かれておるのだ！ まさかアルシエルが、エミリアに荷物を送るなどというような話ではあるまいな」

「えっと……ううん、そういう話じゃないとは思う……」

恵美は、答えながら必死で頭を回転させていた。

芦屋がこの文字列を選んだのは、確実に理由があつてのことだ。

芦屋は、自分に何を伝えようとしている？

「では何が書いてあるのだ！」

「ええっと……ちよっと待って、本当に意味が分からないのよ。どういう理由でこんなことが書かれてるのか……」

オルバが混乱し、惠美が首を傾げるのも無理はない。悪魔大元帥アルシエルの書簡には、  
「冷奴と茗荷の借りをいつか必ず返しに来る」

ただ、これだけが至極丁寧な書き文字で記されていたのだった。

「そもそも、どのような文意なのだ」

「え、ええっとね」

オルバに説明を求められ、惠美も困惑しながら素直に答える。

「これはヒヤヤッコつて読んで、その、冷やした豆腐のことなんだけど」

だがその内容は、張りつめた緊張の糸に対して申し訳なくなるくらい間抜けな説明をしているような気がしてならない。

「トーフ？　なんだトーフとは」

お味噌汁に入れると美味しい、という条件反射的な発言を、惠美は危ういところで思いとどまった。

「え、えっと、こっちではなんて言えばいいのかな、白くて柔らかくて、大きさは小さな煉瓦くらいで、水を含んでブルブルしてて……味はあんまりしないんだけど」

「あ、味!?　そのような面妖な物質を、異世界の民は食すのですか!?」

八巾騎兵の将校達が顔を合わせて囁き合うが、惠美は説明しながら妙な引っかかりを感じていた。

「め、面妖って……まあ、確かにそうかもしれないけど」

この組み合わせには、覚えがある。

自分にしか分からない意味がある。

もつと言え、何かの折にこれを食べた。

一昨日の昼食の献立が思い出せないときのようなもどかしさを感じながらも、恵美は言葉を続ける。

「で、これは『ミョウガ』って読むんだけど、赤紫色の球根みたいな形で、齧ると凄く苦くて鼻に突き抜ける匂いがある植物で……」

「は、話を聞くだけに恐ろしい魔の食材ですな」

「異世界の民の食文化とはそれほどまでに奇怪な……」

散々な言われようだが、これには恵美の説明の仕方に問題があるのも確かである。

それ以上にエンテ・イスラで引き合いに出せる食材を恵美が知らないことが大きい。

「それを刻んでこの冷やした豆腐の……上……に」

豆腐も茗荷も分からない東大陸の人間にどうにかその献立の詳細を伝えるべく、いつのまにか茗荷を包丁で刻むパントマイムをしていた恵美は、見えない茗荷を見えない豆腐の上に乗せようとして、

「……………あ」

瞬間、恵美の心と体は、あのときへと立ち戻っていた。

夢の中で必死に探し求めた、古くて狭くて騒がしくて、それでいて不思議な和やかさに満たされていた、あのアパートの食卓の光景。

その瞬間恵美の目の前にあったのは、顔を顰める真奥と、恵美の分まで押しつけられた、冷奴の上の山盛りのミョウガ。

「どうした、エミリア」

「……っ」

オルバの声で、恵美はふと我に戻る。

将校達が心配そうな目で恵美を見ていたが、当の恵美はそれどころではなかった。

先ほど、自分の天幕で泣いたときは全く違う心の焦りが、降って湧いた。

頬が紅潮する。胃の腑と目の奥が熱くなる。

恵美は、アルシエルが何を伝えようとしたのか理解した。

それを理解した瞬間、自分の心の中に言い知れぬ安堵と喜びが広がったことに、恵美自身が驚き、心が乱れる。

ほんの数分前、それまでにはあり得なかったことを望み、それが叶えられることがないと自己完結して絶望したことが、今目の前で再び希望に変わろうとしている。

「お、オルバ」

それでも、感情の塊が転がり出そうになるのをなんとかとどめ、恵美は全力で思考を回転させはじめた。

「な、なんだ」

緊迫した恵美の言葉に、オルバもつい緊張して答える。

「今すぐ、蒼天蓋に向かいましょう。もう、一刻の猶予もないわ」

「なんだと？」

「迅速に動かなければ、あなたや私の意志に関わりなく、エンテ・イスラは再び闇に包まれることになるわ。アルシエルには、全力の私が相手でも堂々としていられる秘策があるようね。」

日本語を使った暗号で、命が惜しければ軍を退けと言ってきているのよ」

おかげで心にもないことが、すらすらと出てくる。

「で、出まかせを言っているのではあるまいな」

義勇軍の八巾騎兵達の手前、あまり強い口調に出られないオルバを、恵美は毅然と見返してより厳しい口調で続けた。

「これは本当よ。この『ヒヤヤッコ』と『ミョウガ』を使えば、悪魔大元帥アルシエルは、悪魔大元帥ルシフェルや、魔王サタンすら凌駕する力を手に入れられるのよ」

「な、なんだと？」

恵美は、一切嘘は言っていない。

恵美は動揺する軍議の場を眺めながら、オルバにそつと耳打ちした。

「アルシエルは、私の目の前でこの『ヒヤヤッコ』と『ミヨウガ』を使って、魔王サタンとの力関係を逆転したわ。私も危うくやられそうになった。この意味、あなたなら分かるでしょ？」

「……………ま、まさか……………」

「私が日本から突然帰ったのもそれが大きな理由の一つよ。サタンを身代わりに『ミヨウガ』を回避しなかったら、どうなっていたか」

「あ、あの日本という国に、そのような強大な力があるはずが……………」

「あなた、ルシフェルと一緒に日本で魔力を得ていたじゃない。あの世界にも私達の知らない未知のエネルギが存在して、アルシエルはそれを見つけたのよ。力では敵わないはずの魔王を遥かに凌駕する、魔力よりもずっと強大な力…………『ヒヤヤッコ』と『ミヨウガ』を」

恵美は敢えて、八中騎兵達の分からね『日本語』でオルバに語りかける。

そうすることで、オルバにだけ恵美の真意が伝わるように。

一切嘘はない、一方向だけから見た真実が伝わるように。

「ば、バカな……………」

「あなたが何を画策しているのか知らないけど、急がないと本当に手遅れになるわよ。今のアルシエルの力を侮れば、私だって無事では済まないわ」

「くっ…………し、仕方あるまい」

オルバは身を翻し、将校達に出立の伝令を飛ばさせる。

確かに元からオルバは、恵美に蒼天蓋にいるアルシエル達を攻めさせるつもりではあった。だが、このアルシエルからの書簡を読めるのが恵美しかない、という状況が、彼の心を不安にさせているのだろう。

たった一つの不確定要素がどれだけ結論を歪ませる可能性を秘めているか、策謀家であるオルバだからこそよく分かっているはずだ。

恵美はそんなオルバの背を見つめながら、つい、耐えきれなくなつて一筋流れた涙を慌てて拭い、そして言った。

「お一人様一パックの卵をレジを往復して買おうとしてただけの男じゃなかったのね」

どのようにして書簡を義勇軍に送ったかは分からないが、たった一文で、恵美を取り巻く状況をひっくり返してしまつた芦屋の手腕と発想に、恵美は素直に脱帽した。

今の恵美にアルシエル『芦屋から伝えられる』『冷奴と茗荷』の『借り』を恵美に『返す』者など、この世に一人しかない。

「魔王が……来る」

『冷奴と茗荷』の『借りを返しに来る』のは誰か。

恵美に冷奴に乘せられた山盛りの茗荷の借りを返すのは、間違いなく真奥だ。

恵美は思わず顔が綻ぶのを止められず、慌てて胸を押さえる。

何が解決したわけでもない。

例え真奥が魔王型を取り戻し、自分に味方してくれたからと言って、父の麦畑は相変わらずオルバやラグエル勢力下において危険な状態のままだ。

だがそれでも、絶望に暗く閉ざされていたはずの視界が明るく開けたように思えるのは錯覚だろうか。

恵美は、真奥が芦屋だけを救って恵美を見捨てるとは、微塵も思わなかった。

勝手な話だが、今まで真奥はぶつくさ言いながらも一度たりともそのような行動は取ったことがないし、恵美のことを嫌ってはいても、アラス・ラムスを愛する気持ちは本物だ。

何より真奥が恵美を見捨てるようなら芦屋はわざわざ恵美に真奥が来ることを示唆する書簡を送ってくるはずがない。

真奥がエンテ・イスラに現れれば、間違いなく芦屋と、恵美と、アラス・ラムス全員を日本に連れ帰るために行動するはずだ。

恵美がこの数ヶ月で見してきた『真奥貞夫』は、そういう男だ。



勿論、楽観はできない。

何度もう言うように真奥が魔王として恵美の力になってくれたとしても、それだけで恵美もアラス・ラムスも芦屋も、日本に帰ることはできない。

さらに、芦屋の書簡にある『いつか』の単語から察せられるのは、いつ来るのかまでは分からないということ。

それでも恵美の胸中は、

「魔王が……来てくれる」

その思い一つで満たされていた。

真奥が現れば、どんな方向であろうと間違いなく状況は大きく推移する。

だが推移した結果がどうなるのかは、恵美にはまるで分からない。

分からないが、真奥が今の芦屋や恵美を取り巻く状況を見たらどう思うかは、なぜか簡単に分かった。

真奥がこんな状況を気に入るわけがない。

このふざけた茶番を構成する全ての構成要素を、オルバも、背後で暗躍する演出家も、そしてもしかしたら恵美の夢も、全て纏めてぶち壊すべく行動するだろう。

その先はどうなるのか、分からない。

恵美自身ははっきり自覚していたわけではないがこの瞬間、恵美はある意味で、父の麦畑

も、日本での平和な生活も、何もかもを諦めたのだった。

恵美は、真奥が現れたその先を考えることを諦めた。

自分の夢を、父の麦畑の行く末を、日本に残してきた『遊佐恵美』にまつわる全ての行く末を考えることを、やめたのだ。

恵美には、真奥がいつ来るかは分からない。いつ真奥が動き出すかも分からない。何をするのかも分からない。

分からないならばせめて、今は敢えてオルバや裏で暗躍する連中の掌の上で踊り続けなければならぬ。

黒幕達が疲れ果てて手を下ろそうとしても、決して踊るのをやめてはならない。

そして『観客』の誰もが想像しなかった本物の『主役』が現れた瞬間が最高のクライマックスになるように、努力し続けなければならない。

「それくらいしか、バカな私にはできることなんかないもんね」

不思議とその一言に、自嘲の色はなかった。

恵美は今、心の底からの言葉を吐いたのだった。

気負わぬその一言はだからこそ明るく響き、それを聞いていたのか融合状態のアラス・ラムスが嬉しそうに言った。

「ままだ？ ちょっとげんき？」



「……ええ、なんだか、元氣が出てきたわ」

自分でも現金で、勝手な話だと思う。

だから恵美は、もし全てがうまく行って、もう一度、あの温かい食卓の主<sup>あそび</sup>に会うことができれば、

「許してくれないだろうし、今度こそ完全に敵になっちゃうだろうけど、それでも」

過去のこととは一旦置いて、この数週間のことを素直に謝ろう。

そう、心に決めた。

**NO. 1**



冷涼だがしかし、饅<sup>まん</sup>えた空氣が蔓延<sup>まんえん</sup>する空間で、鈴乃<sup>すずの</sup>の後に続くアルバートは、足元にまとわりつく埃<sup>ほこり</sup>に顔を顰<sup>しか</sup>めながら歩を進めていた。

「あんだ、蒼天蓋<sup>そうてんがい</sup>にこんな場所があること知ってたのか？」

「情報だけはな」

「情報だけって……ああ、そうか」

「狂信的な暗部の一端、と言えるだろう。アルバート殿も知らぬわけではあるまい。宣教師の半分は、サンクト・イグノレッドが派遣した間諜<sup>かんてい</sup>の役を担<sup>か</sup>っている。それでいて神のために命を捧<sup>たも</sup>げることを厭<sup>いと</sup>わぬ者ばかりだから、こうして色々な情報を、命を賭<sup>か</sup>してサンクト・イグノレッドに送ってくる」

「にしたってこりゃあ大したもんだぜ。一体どれだけ時間と人間をつぎ込めばこんなことができるんだ？」

鈴乃とアルバートが歩いているのは、地下道である。

だが、ただの地下道ではない。

蒼天蓋を農工区の外側まで駆け巡る長城の地下に張り巡らされた、カタコンベ。地下墓所の大回廊であった。

鈴乃の手にある法術<sup>ほうじゆつ</sup>の灯りと、足元の埃以外に動く物のない広大な石造りの回廊は、時が止まってしまったかのように静かであった。

「統一蒼帝の有事の際は、定められたルートに従って蒼天蓋の『雲の離宮』より皇都の地下に張り巡らされた地下墓所を通じて避難するという。もちろん歴史上、一度も利用されたことはないが、機密保持と万が一の際の運用のため、正蒼巾の騎士達の詰所は全てこの地下墓所に通じる場所にあるそうだ」

「教会の人間のおんたがエフサハーンの『機密保持』を語るのも、皮肉なものだな」

周囲を警戒しながら、それでも迷いなく先に進む鈴乃の後に続きながら、アルバートは肩を竦めた。

するとそれに同調するように、鈴乃も頷く。

「その機密自体が、建前でしかないのだから仕方がない。統一蒼帝がこの道を使って落ち延びるようなことがあるとすれば、それはエフサハーンという帝国そのものの終焉に他ならない。これだけ広大な国土に内乱の火種を抱えた国の皇帝が皇都から動座することがあるとすれば、それは現体制の崩壊と同義だ。ならばこそ、この道は存在しなければならないが、使われることは永遠にない。だから機密でありながら、存在が公になる。場所によってはエフサハーン以前の古代国家の墓所があるとかで、観光地になっている地下道すらあるそうだ」

「ああ、何か聞いたことがあるな。皇都東方に向かって伸びてる城壁の地下が昔の王朝の王の墓になってるとかなんとか。それがこれか。だがいくら公然の秘密つつたつて、そんなのが誰でも気軽に入れるようになってちゃ、それこそ内乱を起こしたい方にしてみりゃ好都合なん

じゃねえか？」

「だから、この通路を管理するのは皇帝に最も近い正蒼巾の者でなければならないんだ」

実際に二人がこの地下道に入ったのは、皇都の民商区を区切る城壁の八巾騎兵の詰所からだった。

当然八巾騎兵の詰所だから部外者の二人が気軽に入れるはずがないと思いきや、本来城壁の警護に詰めていなければならないはずの八巾騎兵の姿はなく、完全にもぬけの空だった。

異の可能性は考えなかった。

城壁沿いの詰所などエフサハーン中だけでも百以上あり、鈴乃とアルバートの動きを捕捉できていない蒼天蓋側が、いちいち防備の穴に来るかも分からない敵を誘い込むような面倒な異を張るはずがなかった。

「鑲翠巾以下の騎兵は、地下道の存在は知っていても『雲の離宮』に通じる正しい道は知らないはずだ」

八巾とひとくくりになっているエフサハーンの騎士団だが、その中には厳密な序列がある。最上位に位置する正蒼巾と、最下位に位置する鑲紅巾の騎兵とでは直接会話をすることが憚られるほどに身分差があることも珍しくない。

「ん？ じゃあ一体お前、何を目印に道進んでるんだよ？ いくら教会の外交部の連中が情報に通じてるからって、正蒼巾しか知らない道はさすがに……」



アルバートは泡を食って尋ねるが、振り向いた鈴乃の薄く細められた目の鋭さに言葉を呑んでしまう。

そこにいるのはエミリアが日本で信頼する友、鎌月鈴乃ではなかった。

「アルバート殿、あなたには見えないのか？」

死神の二つ名で称された大法神教会最高位の異端審問執行官は、薄く微笑んで再び前を向いて歩き出す。

「この大都市の地下に一体いつからこの地下道があったのかは知らないが、何百年という長きに渡り巡回された道の石は、まるで表情が違う」

「お、おお？」

「聖務」のために侵入する場所の地理情報など、ある方が稀だ。それに地下空間では灯りに火を用いるより、法術を用いた方が安全だ。正着巾は法術士としても優秀な者達ばかりだから。法術の灯りが長年通った道というのは、とても分かりやすい」

「……大したもんだぜ」

そう思っただけで、鈴乃の足元からは全く足音が聞こえない。

この広大な空間に響いている足音が自分のものだけだと気づいたアルバートは、改めて目の前の小柄な女がただの聖職者ではないことを確認する。

そしてそのことに思い至ってから、さらにおかしいことに気づいた。

「ならなんで……正蒼巾の奴らが、いないんだ」

「……」

「義勇軍の中にはこの道を知ってる階級の奴もいるだろう。場合によっちゃここから義勇軍が攻めてくることだって考えられるはずだ。蒼天蓋に残った正蒼巾が義勇軍に味方するにしろアルシエルに味方するにしろ、さつきから全く人の気配がねえっていうのは、おかしくないか？」

「その理由は分からないが……それを言うならこの地下道に入った八巾の詰所だってもぬけの空だった。エフサハーンに来て気づいたが、どうも八巾達の動きが妙だ。明らかにあるべき場所に兵員がなく、必要のない郊外など、皇都から離れた場所に多く人員が裂かれている」

鈴乃すずのはホンファ村までの道で、正紅巾せいこうしんの移動巡察に出くわしたことを思い出す。

「義勇軍が接近していることを皇都側が気づいていないはずがない。この兵員配置には理由がある。そして理由は不明でも、今の私達にはこの配置は好都合なのは間違いない。存分に利用させてもらう」

鈴乃は灯りを少しだけ前に飛ばし、小さく唸る。

「それに、ゴール地点が見えた以上先に進むしかあるまい。例えそれが、虎穴であろうとな」

「おお……」

気がつけば二人の目の前には、巨大な門があり、わずかにその隙間を開けていた。

それこそ、その身の内に虎の牙を隠しているかのような門の隙間の向こうには、遥か上方へ

と続く階段があり、しばらく様子を見るが悪魔や正蒼巾の騎兵が配置されている気配もない。

「行くぞ。遅れるな」

鈴乃は法術の灯りを最低限に絞ると、風のように疾駆してあつという間に長大な階段を上り詰める。

アルバートもちろん遅れずについてゆくが、やはり千段近くあろうかというこの階段にも翼や見張りの気配はなく、妙な不安は拭えない。

階段を上がりと、そこは大回廊や階段と同じつくりの、一切の灯りのない廊下。そう長くはない廊下の突き当たりは、なんのともかきりもない壁であった。

「回転ドアかなんかになってんのか？」

「いや、上だ。アルバート殿、ちょっと肩を貸せ」

「上？……って、お、おい!?」

鈴乃はアルバートの返事も聞かず、軽く飛び上がると、そのままアルバートの肩に着地するではないか。

「肩を貸すって、日本ではこういうことを指すのか？」

肩の上に立たれたアルバートは不満そうだが、鈴乃はなんでもないうちに天井に顔を向けている。

「やはりこういうときには、男手が欲しいものだ」

「男は脚立じやねえんだぞ。……何してんだよ」

法衣の裾が長いので、不埒な事態に陥る心配のないアルバートは鈴乃の手元を見ようと顔を上げると、

「しつかり踏ん張ってしてくれ」

「は？ おごっ!？」

いきなり肩に大きな負荷がかかり、苦鳴を上げてしまう。

「うぬぬ……ふっ!」

鈴乃の靴底が肩に突き刺さり、それでも懸命に耐えていると、およそこの小柄な女からは想像もできない低い気合の声とともに、唐突に足元の埃が巻き上げられて、頭上から光が差ししてくる。

「……なるほど、壁じゃなくて、床に隠し通路の出入り口があるってことか」

「そういうことだ。上から引き上げるから、まずは私を上げてくれ」

アルバートは言われた通りに鈴乃をそのまま頭上に押し上げ、すぐ上の空間から差し出された鈴乃の手を取ると、これまたその細腕に全く見合わぬ力で引き上げられる。

鈴乃の手を離し、自分の力で床に手をつけて体を引き上げたその先は、十二畳程の、更衣室のような設えの部屋だった。

室内が薄暗いのは、単純に外が夜だからだろう。実際鈴乃もアルバートも、かなり長い間地

下の道を歩いていった。

ところどころに太い蠟燭が灯されているおかげで、なんとか部屋の全景は見取れる。

鏡張りの壁面の前にはこれまた名だたる職人の手によるものと思われる細工が施された櫥の椅子が設えられ、別に小さな鏡台も置かれている。

壁にも華やかな顔料とともに金箔まで用いられた花鳥図が全面に描かれ、城の一室としては手狭かもしれないが、かなりの貴人が用いる部屋なのだろうということが察せられる。

かすかに漂う甘い香りは、花か香木によるものではないだろうか。

「なんの部屋なんだろうな、ここは」

アルバートも決して低い身分の人間ではないが、とはいえここまで豪華な部屋を用いるような生活も送ったこともなく、興味本位でふと口に出し、すぐに後悔するハメに陥った。

「廁だな」

「はーそうか、かわ……や………あ？」

アルバートは鈴乃の言葉の意味を咀嚼しきれず、先ほど床に直に触れてしまった掌を見る。

「べ、便所？」

「恐らくは」

アルバートは大いに狼狽えて、部屋中をきよろきよろと見回しはじめた。

「お、俺は貴族の生活ってのはよく分かったのだが、貴族は便所をこんな広くして、落ち着け

るのか。というかその、するところは、どこだ？」

勝手に更衣室か何かだと思っていたアルバートは、便所ならば絶対になくてはならない肝心かなめの設備を探して周囲を見回し、

「……もしかして、あれか？」

部屋の隅の床に、銀を方形に伸ばしたようなものが設置され、そこだけ周囲より一段低くなっているのを見て、なんだか情けない顔になって鈴乃に確認を求める。

「純銀だろうな。管理にかかる手間と費用を考えると、アルシエルなら卒倒するかもしれん」  
そして鈴乃は、そんなどうでもいい推測を告げる。

「な、なんでこんなところに秘密の通路が……」

「秘密の通路というのは、築城の際などに一部の職人にしか分からないように作る必要がある。その際は浴場や、かわや、下水道のような、図面上その設備の周囲に別の大きな空間があっても不自然ではなく、かつ平時には絶対に誰も手を触れない場所に作るのが定石の一つだ」

「いやそりやまあ確かに、平時に便所の床を積極的に抜こうとする奴はいないだろうが……」

「下の通路が回転扉の類いではなく天井を抜く形になっていたのは、侵入者に道を誤ったと錯覚させるためのものだろうな。もちろんここ以外にも別の場所に出る出口があったのかもしれないが、今回私達が辿ったルートはたまたまここに出た、というだけの話だ」

「はあ……ひでえ話だぜ」

何が酷いのかは分からないが、アルバートとしてはそう言うしかない。

「安心しろ。どう見ても貴人のための厠だ。西大陸の庶民が使うようなものとは訳が違う。床も常々清潔に磨き上げられているに違いない」

「そう願いてえなあ」

アルバートは悲しげに掌を見るが、鈴乃はもうこの厠に興味を失ったのか、外に通じる扉で耳をそばだてている。

「む」

「どうした」

「……不思議な場所があるな」

「不思議な場所？」

「大きな魔力が一つと、法術結界が同時に存在している場所があるようだ。少し上の方、何か感じないか」

「んー……ああ、確かにあるな。行くのか」

アルバートは天井を見上げて気配を探るように目を閉じ、すぐに頷く。

「アルシエルではなさそうだが、魔力と法術結界が同じ場所にあるならそれは特別な理由がありそうだ。行ってみる価値はある」

「そうか、だがさすがにこつからは、八巾やマレブランケ共に鉢合わせずに行くのは無理だろ

う、そこはどうす」

「あ」

「あ」

「……あ」

本当になんの前触れもなく、厠すうのドアが開き、掃除道具を抱えた、腕に翠の手巾みどりしやうを巻いた男が二人入ってきて、鈴乃とアルバートを見て、間拔けな声を上げる。

彼らは中に誰かがいるとは思わなかっただろうし、勿論二人とも、上方の気配に氣を取られていて二人の正翠巾騎兵せいさいきんきへいの接近には氣がつかなかった。

「[[[[……]]]]」

見合っていたのは、ほんの数秒だった。

「良かったな、きちんと掃除されていたじゃないか」

「俺、あいつらが氣の毒で仕方ねえ」

「彼らのおかげで、統一蒼帝とういつそうていが雲の離宮のどこにいるのか分かった。感謝せねばな」

鈴乃とアルバートは、妙にしんみりした様子で『雲の離宮』の廊下を堂々と走っていた。

厠で遭遇した二人の騎兵は、統一蒼帝の身の回りを世話するために残された正翠巾の者で、



あの厠は統一蒼帝しか使えない厠の一つなのだそうだ（皇帝専用の厠が複数あることに、アルバートはさらに驚いた）。

有事とはいえ当然統一蒼帝を一人にしておくわけにもいかず、正蒼帝と正翠帝の者数名で、マレブランケに城を乗っ取られてからも皇帝の傍に仕えていたと言う。

ただ本当に皇帝の身の回りを世話し警護するのは正蒼帝で、正翠帝の者達は皇帝の玉体には近づくことができず、皇帝の用いる部屋や道具の整備をして過ごしているのだそうだ。

「大変な仕事なんだろうなあ……この騒ぎが終わったら、あいつら出世できるといいなあ」  
アルバートは眦を拭ってしみじみ呟く。

八巾騎兵の各騎士団の間に横たわる厳然たる格差と、それでも宮仕えに誇りを持って便所掃除に勤しむ正翠帝の騎兵達に、アルバートは先程からやたらと同情的である。

「まあ彼らも不満を持っているからこそ、こうして統一蒼帝の居所を教えてくれたのだろう。どう見ても侵入者の我々だが、悪魔の手のうちに帝があるよりはいいと判断してくれたのだ。後で統一蒼帝には、彼らの功を注進してもいいのではないか」

正翠帝の二人は最初こそ鈴乃とアルバートを誰何したものの、その声に覇気はなく、疲れ果てている様子が一瞬で見取れた。

アルバートが己の身分を明かすと二人の内の一人がアルバートの顔、つまりかつて東大陸を解放した勇者の仲間の顔を覚えており、幸いにして戦端が開かれることはなかった。

統一蒼帝を救いに来たというアルバートの話を信じてくれた正翠巾の若者は、雲の離宮の地図を口頭で細かく教えてくれた上、他の八巾騎兵と遭遇しても戦闘にならないように、八巾騎兵の証たる翠色の手巾を引き裂いて、三本の紐にして二人に手渡してくれた。

三本の紐を左腕に二本、右腕に一本結びつける。

それは八巾の間でしか通用しない、定められた形に引き裂かれた手巾を持つ者は敵ではないことを示すための符牒だった。

「だが彼は、気になることを言っていたな」

「ん？」

正翠巾の若者は、皇帝の世話をするために正蒼巾と正翠巾が「残された」と言った。

そうになると、残された彼ら以外の八巾騎兵達を、「残さずどこか別の場所に配置する」命令が裏で下っているということになる。

だがマレブランケや天使、今に至っては悪魔大元帥アルシエルすらいるこのエフサハーンの中核で、彼ら八巾騎兵達の人事を掌管しているのが統一蒼帝であるとは到底思えない。

では、一体誰が、義勇軍以外の、皇都・蒼天蓋の影響下にある八巾騎兵達を動かした？

「……いや、今はこれを考えるタイミングではない。とにかく、その階段を上った先に帝がいるはずだ。強い法術結界の気配がする。行くぞ！」

ここまで順調に来すぎている感はあるが、統一蒼帝の身柄を押さえることができれば、あと

は誰に存在が露見しようが構わず義勇軍の本陣を目指してひたすら逃げればいい。

ファイガンの義勇軍の第一の目的は蒼天蓋の悪魔からの解放だが、それには当然統一蒼帝の安全確保も含まれる。

それを担保できるだけでも、義勇軍と皇都軍の戦端が開くまでに、少しは時間が稼げるはずだ。

「これ……は？」

最後の階段を駆け上がった鈴乃とアルバートの前に、エフサハーンの皇帝の住まうにふさわしい、当たり前ながら先ほどの願など比べるべくもない贅を凝らした『空間』としか形容のできない広さの部屋が広がっていた。

謁見のためのスペースや外部から人を迎え入れるための調度品がないことから、恐らく私室として使われている場所なのだろう。

大人が並んで十人は眠れそうな巨大な寝台に横たわる人影を発見した鈴乃は、思わず居住まいを正す。

これまで戦略上の記号でしかなかった統一蒼帝だが、それでも一つの大陸の頂点に立つ帝である。

本来なら鈴乃やアルバートの身分では直接目通りできるような存在ではなく、個人的な感情を抜きに、最敬礼にて接しなければならない相手だった。

「（恐れながら、皇帝陛下に申し上げる。寝所を騒がす無礼を、お許し願いたい）」

鈴乃は恐る恐る、イアホン語で、寝台に横たわる人影に語りかけるが、反応はない。

「……？（皇帝陛下……）」

鈴乃は首を傾げながらも、それでも少しだけ語気を強めて一歩寝台に近づこうとした。そのときだった。

「待て」

アルバートが、その肩に手を置いて動きを止めた。

「奴は統一蒼帝じゃねえ」

「何？」

「それにおかしい、法術結界はどこだ。寝台の周りにもこの空間にも法術結界の気配が……」  
その瞬間だった。

鈴乃達と寝台の間の空間が、唐突に黒く歪んだ。

「おいおい、どこのどいつだ。皇帝の寝所に侵入しようなんざ大胆にも程があるぜ」

「っ!?」

鈴乃は目にも留まらぬ速さで簪を引き抜き、アルバートも即座に拳を握って臨戦態勢を取る。だが黒い歪みから現れたそれは、大儀そうにゆっくりと動き、すぐに襲いかかってくる気配はない。

鈴乃は歪みから出てきた隻腕の巨漢を見て、息を呑んだ。

「り、リヴィクオッコ!?」

「……おお、お前か」

知っている悪魔だった。

はんの一週間ほど前。笹塚の千穂の高校で干戈を交えた、マレブランケの頭領格の一人、リヴィクオッコだ。

「知ってる奴なのか、ベル」

「……ああ」

アルバートの間に鈴乃は驚きながらも頷くが、リヴィクオッコの方は鈴乃の顔を見てもそれほど動揺はないように見える。

「人間にとっては結構な深手を負わせたと思ってたが、随分と元気そうじゃねえか」

「……そういう貴様は、まだ傷が癒えんか」

命を賭けて戦った者同士の再会で、お互いの体調を気遣うというのもおかしな話だが、以前千穂が驚いていたように、笹幡北高校での戦闘で負った鈴乃の傷は、もううつすら痕が残っている程度で体調にはなんの問題もない。

だがリヴィクオッコはというと、真奥に斬り飛ばされた腕が喪失したままだ。

もちろん悪魔だからといって失った器官がトカゲのしつぽのように再生するとは限らないが、

こうしてエンテ・イスラで対面しているリヴィクオッコの魔力は、以前より弱まっているように感じられた。

「妙なもんでな。傷口がなかなか塞がらなくて難儀した。魔力による治療が、全く効かなくてな。おかげで、前線にも出られずにこうして人間でもできるような警備なんかしてる」

リヴィクオッコは妙に人間くさい皮肉を言いながら、改めて鈴乃とアルバートを見た。

「そっちの見ねえ顔の男はなんだ。随分と強い聖法氣を持った野郎だな。お前はともかく、そんな奴が来るなんて聞いてねえんだが」

「何？」

鈴乃はリヴィクオッコの物言いに引っかけかきを感じたが、すぐに頭を切り替えて叫ぶ。

「もう退け、リヴィクオッコ。分かっているだろう、このままエフサハーンに留まったらところで、魔王軍再興など、成りはしないと」

「……」

「勇者エミリア率いるファイガン義勇軍が、貴様らマレブランケの支配した都市を次々に攻略し、もう間もなく蒼天蓋城に迫ろうとしている。このままここにいても、無駄死にするだけだ」  
リヴィクオッコは、言い募る鈴乃の目をひたと見据えるが、それでも返事をしない。

「元々不可能な話だったのだ。認めるのは辛いかもしれんが、貴様らマレブランケは、大天使達とオルバ・メイヤーにたばかれ、天界の策略に嵌められているだけだ。無駄に命を散らす

ことを魔王が望むと思うか。今からでも遅くはない。全軍を退いて魔界に帰参するんだ。アルシエルにもそう上申しろ。それくらいのが分からん奴ではないはずだ」

「……」

「リヴィクオッコ!!」

「分かってんだよ、シなことは。俺達がバカだったことも、あのラグエルやオルバって野郎が最初から胡散くさかったことも。でもな、もう俺達は、引き返せねえんだ」

「ラグエル……くそ、また天使か」

ここで予想だにしない名前を聞いて、鈴乃は表情を厳しくする。

ガブリエルとカマエルだけでもどうにもならないのに、その上もう一人天使がいるのでは、最早一秒たりとも無駄にはできない。

彼らは彼らの計画に支障をきたしそうな事態は全力で排除にかかるだろう。こうして雲の離宮で言い合いをしていること自体が、恐ろしく危険なことだ。

「だが引き返せぬということはない! 統一蒼帝を義勇軍に引き渡し、貴様らは魔界に帰参すれば良いだけのことだ! それだけで今ある命が無駄に消費されることもない。魔王サタンはチリアットの罪を問わなかった! 貴様らも……」

「そういうことじゃねえんだよ。お前、何か勘違いしてやがんな」

「何？」

鈴乃の真摯な言葉をリヴィクオッコは一蹴する。そして鈴乃にとっては、衝撃的な一言を發した。

「引き返せねえってのは、今のこの状況からじゃねえ。一番最初の魔王軍の理想からだ」  
「最初の理想？」

それは、真奥が言っていた、魔界の民を飢えさせない、という話のことだろうか。

だが今の状況は、そんなことを悠長に言っている場合では全くないのではないか。

「アルシエル様が言うには、これが魔界の民が未来に生き残るために布石を打つ最初で最後のチャンスなんだそうだ。そこをお前ら部外者に、色々引つ掻き回されたら困るんだよ」

リヴィクオッコの言葉に、鈴乃は混乱しはじめていた。

「アルシエルが天使に乘せられるような形でエフサハーンを支配することを好しとするはずがない！ 一体どういうことだ!？」

まさか芦屋に限って、今の事態を背後で操る存在の影に気づいていないなどと言うことはあり得ない。第一彼自身、ガブリエルによって拉致されたはずではないか。

だが今のリヴィクオッコの話しぶりを聞くと、どう考えても今、皇都・蒼天蓋の指揮を取っているのは芦屋＝アルシエルだ。

そうなると、八巾騎兵の人員配置も、アルシエルの差配ということか？

「知るか。だが、これもアルシエル様の命令でな。この部屋の方に通じていいのは一人だけな



んだ。それ以外の奴が来たときには……」

リヴィクオッコは動揺する鈴乃から目を離す。

その行動の意味を数瞬遅れて理解した鈴乃は、

「あ、おいつ!!」

アルバートの制止も聞かず、武身鉄光を発動させ、大槌でリヴィクオッコに襲いかかった。

「はいそこまで——」

一瞬どころか、数瞬も遅かった。

「ぐっ……!?!」

鈴乃の振るった大槌を、掌でがっちり受け止めたのはリヴィクオッコではなかった。

「いやー、お疲れさんお疲れさん。誰にも気づかれずにこんなとこまでどうやって入ってきたのか知らないけど、本当に遠いところからよく来てくれたよ。新幹線の駅もないのにさ」

「な、なんだてめえは!」

アルバートは唐突に現れた長身の男を誰何するが、本人が答えるよりも前に鈴乃が憎々しげに男の名を呼ぶ。

「ガブリエル……っ!?!」

相変わらず人を食ったような顔の大天使は、鈴乃よりもむしろアルバートを見て意外そうな

顔をしている。

「あれー？ 彼、確かこっちの人だよ。エミリアの仲間の。魔王はどうしたのさ」

「貴様に話すことなどない！」

「おうおう……仕方ないけど嫌われたもんだよね……でもまあ、良かったよー君達、来たのが僕でさ。君、リヴィクオツコだっけ。真っ直ぐ僕に概念送受飛ばしてくるってことは、アルシエルから何か言われてるの？」

「……」

「くっ!!」

やはり先ほど鈴乃から目線を逸らしたのは、単純に魔術を行使するための意識集中だったのだろう。

だがそうすると解せないのは、天界に騙されている自覚のあるリヴィクオツコが、何故アルシエルに言い含められてガブリエルに鈴乃達の情報を飛ばすのかということだ。

そんな鈴乃の表情に横切る疑念の影を楽しむように眺めたガブリエルは、にやにや笑いを深くして言った。

「まー、君達の方も疑問はあるだろうけど、何かあるならせーんぶ終わった後にでもアルシエルに聞きなよ。ま、すぐに聞きに来られればの話だけど」

「な、なんだと!? むぐっ!!」

「うがっ!? な、な!?」

ガブリエルは、ほんの少し指先を動かしたただけだった。

だがそれだけで、鈴乃は大槌を繰り出した姿勢のまま、アルバートは拳を握り構えた姿勢のまま身動きが取れなくなってしまう。

「とりあえずさ、今丁度いいところだから君達に現場引つ抜き回されたくないんだよ。やるならしかるべきタイミングで、役者揃えて来てくんないかね」

「な、に……をつ!?」

「ぐおおおおつ」

鈴乃もアルバートも必死に抵抗を試みるが、指一本動かすこともできない。

「役者が揃ったらまたおいで。そんなときは、そこで寝てるエミリアの父親と、上の方で悠々自適に過ごしてるあの老皇帝も、好きにしていいいからさ」

「なっ!?」

鈴乃もアルバートも、首を動かすことができない。それでも視界の端にいる、寝台に寝ている男の姿を捉えようと必死に目を見開こうとする。

「そんじゃねー。次いつ会えるかは分からないけど、ばいばい」

だが、そこまでだった。

急激に、風景が遠さかる。

胸に障る大天使も、何かに耐えるよう顔を俯かせるマレブランケも、雲の離宮も、寝台の男も、目に見えている光景の何もかもが万華鏡のように分解され、鈴乃とアルバートは異空間に放り出されてしまった。

「こ、これは!?」

「ゲートだ! クソっ!!!」

恐らくガブリエルが聞いたのであろうゲートに、二人は飲み込まれていた。

なんとか姿勢を正そうとするが、金縛りの力の後遺症なのか、うまく体を動かせない。

法術を発動させようにも、ガブリエルの圧倒的な力で形成されたゲートの奔流は、一瞬たりとも二人が流れに逆らうことを許さなかった。

「くそ……くそおおおおおお!!!」

鈴乃は悔しさのあまり、絶叫する。

結局はこの体たらくだ。

また圧倒的な力の持ち主に手もなく足元を拘われ、何もできないまま時間が過ぎ去るのか。

「おい、ゲートの出口だ!!」

「……っ。何!?」

鈴乃は涙が零れそうになった目尻を拭って、アルバートの方に首だけ向ける。

早すぎる。



まだゲートに放り込まれて一分も経っていない。

だが異空間の彼方に、確かにゲートの出口である光が見える。

ということは、地球や異世界などに飛ばされたのではないということか？

「どこに出るか分からねえ、気をつけろ!!」

アルバートに言われるまでもなく、鈴乃は何が起きてもいいように対シヨック姿勢を取る。

やがて、出口の先の光景がうつすらと形を帯びてくる。

「……街？」

「出るぞっ!!」

唐突に世界が色を取り戻し、空気が満ち、異空間の力の奔流ではない、暖かな太陽の光が視界を満たした。

二人は、空中に投げ出されていた。

だが、眼下の道行く人々の動きがはつきり見て取れるほどの高さでしかない。

かなり大きな街のようだ。

ゲート出口の開閉で気流が乱れたか、迫ってきた鳩の群れが鈴乃とアルバートのすぐ近くで急激に隊列を見出し散開してゆく。

鐘の音が、耳を打つ。おかしい。真奥と別れてから数時間。

今、エフサハーンは夜のはずだ！

鈴乃は太陽の位置を目の端で確認しながら息を呑んだ。

まさか、ここは。

「おい！ あんた飛べるか!? あそこのでけえ建物に平らな屋根がある。降りるぞ!!」

鈴乃の動揺には気づかないアルバートが、とりあえず眼下の大きな建物を指さす。

その建物を、次いで街並みをしっかり見て、鈴乃は今度こそ確信した。

「っ!!」

二人は法術で滑空し、なんとかアルバートが指し示した屋根に着地することができた。

だが、鈴乃の動揺は収まらない。

そしてアルバートも、着地して周囲の様子を見回し、すぐに鈴乃と同じ懸念に辿り着いたようだった。

「こ、ここは……」

アルバートは、屋根から眼下の町を見渡して絶句する。

そして彼方に見える一際巨大な建造物を見て、震える声で言った。

「セント・アイレ帝都……?」

「やはりか……っ」

鈴乃は歯噛みした。

とんでもない所に飛ばされてしまった。

アルバートの視線の先にあるのは、神聖セント・アイレ帝国の帝城エレニエムの威容であつた。下手に世界を渡っているよりも、ある意味ずっと状況は深刻だつた。

皇都・蒼天蓋から、世界地図の反対側に飛ばされてしまったのである。

鈴乃は増幅器がなければグート術を使えないため、もう一度蒼天蓋に戻るには聖具「天の階」を使うしかないが、それが設置されているのは、帝都の西端。帝城から馬で二日はかかるセント・アイレ司教座しかない。

だが今の鈴乃とアルバートには、移動に何日もかけていられるような悠長な時間はない。完全に万事休すであつた。

鈴乃は、力なく聖堂の屋根にへたり込んでしまい、それでも震える手でなんとか法衣の懐から携帯電話を取り出した。

今出来ることといえば、真奥にこの情けない有様を伝えることだけだ。

だが知らせたところで、今の真奥に何が出来るだろう。

自分達がのつびきならない状況にあると知れば、彼は自分の状況も顧みずに動き出すだろう。だが、全く戦う力を持たない今の真奥が動いたところで、三人もの天使を同時に相手にできるとはとても思えなかった。

「くそっ……」

鈴乃がまるで子供のようになり、悔しさを拳に込めて、聖堂の屋根に叩きつけようとしたそのと



きだった。

「おい、おい待て。ちょっと待て。そう悲観することはないかもしれねえぞ」

「……………」

「帝城がそこにあるってことは、ここはオレアス区だ。ってことは…………あれだ！ あの建物  
が、法術監理院だ」

「法術監理院？ それはエメラダ殿の…………ん？ セント・アイレのオレアス区？ ま、待て、  
ということとはまさかこの建物は…………」

鈴乃は、たった今自分が拳で叩き割ろうとした屋根を見て、目を丸くする。

「そうだ。俺の記憶が確かなら、審理の場所はここ、セント・アイレ司教区のオレアス大聖堂  
だ」

鈴乃は崩れた足に、力が戻るのを感じた。

まだ希望はある。うまく立ち回れば、すぐにでもまた蒼天蓋に戻るかもしれない。

鈴乃の瞳を見返したアルバートは強く頷いた。

「今、エメが、俺達の足の下にいる」

※

突風が吹きすさび、蒼天蓋の空を黒雲が覆いはじめる。

蒼天蓋大天守に続く城壁の上で、その風と雲を眺めていたガブリエルは、雲間に隠れつつある宵の月を見上げて、にやりと笑った。

「元から見ちゃいないだろうけど、でも、これで今この瞬間、この都市で何が起こつても、誰の目にも触れないね」

突風に運ばれる言葉は虚空に散って誰の耳にも届かない。

「勇者エミリアに、新生魔王軍を率いる悪魔大元帥アルシエル。役者は揃った。そう、思ってるんだろ？ 甘いよ。精々楽しむがいいさ、筋書きのないドラマってやつをね」

ガブリエルは、蒼天蓋の北の郊外を眺めながら、満足げに頷いた。

「ラクしすぎると、人間ダメになるもんだ。どっかで必死に動かなきゃダメなんだよ。僕らだつて生きてるんだから」

※

「これは……どうしたことでしょう」

義勇軍の戦闘を歩く将校が、強張った声を上げた。

「アルシエルは、何か畏を巡らせているのでしょうか」

将校が不審がるのも無理はない。

エフサハーン一の威容と美しさを誇る皇都・蒼天蓋の中央区が、静まり返っているのだ。

昨日まで繰り返し出された斥候の報告でも、義勇軍の接近とアルシエルの激突を警戒して非常に不穏な空気が皇都中に蔓延していたことは確かだ。

もちろん義勇軍の接近を察して戒嚴令が敷かれている、という可能性はある。

だがフアイガン義勇軍の前に広がる光景は、戒嚴令というよりも、もはや大都市の廃墟だ。

人っ子一人見当たらない大都市の中心、天守閣に向かって貫く大通りを渡るのは、大都市らしく随所に灯された法術による街灯の光と、時折雲間から差し込む月の光。そして黒雲が吹き降ろす湿った風のみだ。

「なんとも、不気味だ……息が詰まる」

先頭の将校は冷や汗を流しながら、大路に踏み込む号令を発するかどうか悩んだが、

「あなた達は後からついてきなさい」

その傍らにすっと馬を進めてきた姿を見て、将校は驚き目を見張る。

「え、エミリア様？」

「ただし、腕に覚えのある人だけね。ここは今まで攻略してきた街とは訳が違うわ。私とオルバについてこれられないようなら、囲まれて死ぬわよ」

「……」

まるでその言葉に引きずられるかのように、オルバも馬を操り後方から姿を現す。  
なぜかその表情は忌々しげに歪んでおり、これまでに見られた余裕はない。

恵美は目だけでオルバを振り向くと、

「いいんでしょ、私が先陣を切っても」

鋭くそう問いかけた。

「……致し方あるまい」

オルバの答えには、切れない。だが、他に答えようがないという苦澁が、何も知らない将校でさえ感じ取れるほどに満ち満ちていた。

恵美はその答えに満足げに頷くと、さっと騎乗していた馬から降りる。

「今まで、ずっと不景気な顔で乗ってて、ごめんなさいね」

美しい馬の鬣を詫びの言葉とともに撫でると、地に降り立った恵美は大きく息を吸い、一気呵成に声を張り上げた。

「顕現せよ！ 我が力、心悪しき者を打ち滅ぼさんがため!!!」

雄たけびとともに、恵美を中心に烈風が巻き起こる。

夜の空に一条の光を投げかける恵美の聖法気の奔流は、日本で見たそれとは比べ物にならないほどの密度で恵美の体を包み込む。

恵美の手から迸る閃光より生まれた、進化聖剣・片翼は、これまでとは打って変わった武

骨で巨大な刀身をしていた。

身を包む聖法気が実体を伴い凝結し、全身を覆った白銀の光こそは、進化の天銀より生まれた神器の名に相応しい『破邪の衣』の完全体。

かつての魔王軍との戦いでは存在しなかった左手甲に生まれた円盾は、融合したイエソドの欠片、アラス・ラムスによって具現化した新たな力だ。

長い髪が聖法気に浄化されたように蒼銀の絹糸へと姿を変え、瞳は全ての悪魔が恐れ慄いた聖なる緋色に染まる。

かつてエンテ・イスラ全土を救った勇者エミリア・ユステイーナの完全なる姿が、悪魔に支配された蒼天蓋に再臨した。

地上に新たな月が現れたかのようなエミリアの変身を目の当たりにした義勇軍は、その威容に打たれ、関の声を上げる。

彼らは勝利を確信していた。

今度こそエンテ・イスラを覆う闇を打破すべく『聖剣の勇者』が自分達を率いて邪悪な悪魔に立ち向かい、見事勝利することを信じて疑わなかった。

歓声をその背に浴びながら、エミリアは光の中で自嘲の笑みを浮かべていた。

何が勇者だ。

かつて魔王サタンを追い詰めたときよりもずっと強大な、完全無欠の力を手に入れたはずの

自分など、今この場に於いてはただの前座に過ぎない。

「さて……アルシエルはどんな舞台装置を用意してくれたのかしら」

聖法氣の奔流に紛れてそのつぶやきは、隣にいるオルバにすら聞こえなかった。

いつ以来となるかも分からない不敵な笑みを浮かべたエミリアは、音もなく地面からゆつくりと中空へ浮遊する。

天の騎士と呼ぶに相応しいその姿に、再び義勇軍から歓呼の声が上がった。

「……行くわよ、オルバ」

「分かっている……だが、妙なマネをすれば……」

「それこそ分かっているわよ、私はアルシエルと全力で戦うわ。それでいいんでしょ？」

「……むう」

オルバは歯ざしりするが、それでもエミリアがまだ表煙を諦めていないことを理解して、少しだけ安堵の表情を漏らすと、自らも馬の鞍上からエミリアを追うように浮遊した。

「目標、蒼天蓋天守閣の悪魔大元帥アルシエル！ 皆、私に続け!!」

「おおおおおおおおおおおおおおおお!!」

エミリアの鼓舞に答えた義勇軍の雄たけびが都市を揺らし、

「遅れないでよオルバ！ 天光駿靴!!」

エミリアは、夜を貫く月光の如く皇都の大路を飛翔し、オルバもそれを追って飛ぶ。

そのあとを、幾千騎ものファイガン義勇軍に所属する八巾騎兵達の馬の蹄鉄が大地を穿つ音が続いた。

「右翼に悪魔！ 来たわよ!!」

飛翔速度を一瞬も緩めぬエミリアの鋭い声が、オルバに飛ぶ。

「ぬう!!」

オルバは何かを確認する前から、そちらに向けて風の刃を放った。

飛翔するエミリアとオルバに追いつがるように、無数のマレブランケが姿を現したのだ。

オルバの風の刃に撃ち落とされて家々の屋根に墜落するマレブランケだが、相手も悪魔の兵であり、それだけで絶命するほどヤワではない。

だが、

「走れ!! 目指すはアルシエルのみ!! 雑魚に構うな!!」

エミリアの号令は皇都外縁から中央区に向けて疾走する義勇軍の一団の速度をさらに上げる。オルバにも、そして義勇軍の兵達にも、負傷したマレブランケにトドメを刺す暇を与えなかった。

羽虫のように散発的に現れるマレブランケの小隊の数は、明らかに首都防衛には少なすぎる上に、配置するだけ無駄死にするとしか思えぬ陣容であった。

向こうもそれが分かっているのか、遠巻きに魔力による遠距離攻撃を放ってくるか、何合か

刃と爪を交えてはすぐに撤退するという不可解な行動を繰り返している。

そもそも、皇都中央区に残っているであろう八巾騎兵達はどうしたというのだ。

アルシエルが本気でエミリアと義勇軍を迎え撃つのなら、天守まで伸びる大路に騎兵隊の進攻を妨害する罠の一つも設置しないことなどあり得ない。

どう考えてもマレブランケ側が皇都防備のために皇都に残る八巾達を用いて迎撃してきてもおかしくないはずなのに、現れるのは先程から、見た目の迫力で頭数の少なさを誤魔化すマレブランケの雑兵ばかり。

だが、オルバを含めた義勇軍の八巾騎兵達にそれらの奇妙な状況に疑問を抱く暇を、エミリアは与えなかった。

絶対的な力を見せつければ、何が起ころうとエミリアがなんとかしてくれる、という幻想を後に続く者達が簡単に抱くことを、エミリアは経験からよく分かっていた。

そしてあくまで人間であり「勇者の仲間」という、扱いに於いてはエミリアの付属物に過ぎないオルバに、その絶対的な力の進行を止める術はない。

オルバはエミリアが自分の計画に従って動いているうちは、それを止めることができないのだ。なんの障害もない真っ直ぐな道を最高速度で駆け抜ける、エミリアを先頭とした義勇軍は瞬く間に天守閣前の堀へと到達する。

天守閣の西大門の前に布陣した義勇軍だったが、門は固く閉じられたまま。



後続部隊がばらばらとマレブランケと交戦するも、未だ戦況に大きな変化はない。

「さて……」

「……」

油断なく周囲を警戒しながら、エミリアとオルバは天守閣を見上げる。

「私は勇者エミリアー！ 皇都・蒼天蓋を解放すべく、ファイガン義勇軍とともにあり！ 悪魔大元帥アルシエル！ 姿を見せなさい！」

「ムウ……？」

エミリアの、力のこもった声にオルバはやはり不安を隠せない。

これまでのエミリアは、明らかに作戦行動に対して消極的だった。

それなのに今のエミリアは、かつての魔王軍との戦いよりもよほど強い意志で戦いに臨んでいるように見える。

「……『ヒヤヤッコ』とは……『ミョウガ』とは一体なんなのだ」

エミリアの態度が変わったのは、あのアルシエルの書簡を見てからだ。

だが今のオルバにエミリアの言葉を疑う材料はなく、それでいて不安だけが募る。

「おお、あれは!!」

そのとき、エミリアの力に勇気づけられたはずの義勇軍の中から、恐れ的叫びが上がり空にこだました。

「あれは……」

「き、来たぞ!!」

「っ!」

エミリアは、声の指し示す遥か頭上、蒼天蓋天守のバルコニーに現れた影を視認する。

「よくぞ現れた! 勇者エミリアと、薄汚い人間の賊軍どもめ!」

大音声は、それだけで義勇軍の兵達を圧倒する。

魔力のこもる声。

力と心が弱いものは、それだけで意志が萎え、気死も免れえぬ悪魔の声。

蒼天蓋の空に君臨するあの男は、襟の伸びたシャツや裾のすり切れたズボンを纏い、笹塚で預金通帳の残高に一喜一憂していた芦屋四郎ではない。

多くの悪魔を率い、魔王軍四天王として東大陸に君臨した、悪魔大元帥アルシエルなのだ。

上半身を覆う鎧と風に翻るマントは一目で上等な仕立てのものと分かり、まさしく悪魔大元帥の名に相応しい仕立てと禍々しさを誇っている。

エミリアとアルシエルの視線が交わる中空で空間に歪みが生じそうなほどの気力と気力がぶつかり合う。

「だが愚かなことだ! 勇者エミリア! 我が『ヒヤヤッコ』と『ミョウガ』の力を知って尚、立ち向かってこようとは!」

「は、本当のことなのか!? 『ヒヤヤツコ』とは、『ミヨウガ』とは一体なんなのだ!?」

魔力と迫力に満ち満ちたアルシエルの言葉に、オルバが驚愕している。

エミリアはそれを横目に見て、吹き出しそうになるのを必死に耐えながら、なんとか毅然とした態度で言い返した。

それが、合図。

「愚かなのはあなたよアルシエル! 『私と聖剣』の『ヒヤヤツコ』には『ミヨウガ』など不要! いつまで待ったところで、それは変わらないわ!」

アルシエルのメッセージを、エミリアが正確に受け取ったという合図だった。

「……よからう」

遙か高みから見下ろすアルシエルの口が、にやりとしたのをエミリアは確かに見た。

「そこまで言うのなら、我が力を以て貴様に現実を思い知らせるまで! 勇者エミリアよ! かつて引き分けた我らの決着を、今ここで一騎打ちにてつけようではないか!!」

「望むところよ!!」

「ま、待てエミリア、それは………むっ!?」

傍目には完全にエミリアが、アルシエルに乗せられている形になっており、オルバは慌てて止めに入ろうとする。

だが、既に上昇を開始していたエミリアを止めようとしたオルバの前に、立ちふさがった影

二つ。

「よもや……誇りを賭けた一騎打ちを邪魔するつもりはなからうな、オルバ・メイヤー」

若きマレブランケの頭領格、ファーフアレロと、

「貴様には個人的に聞きたいこともある、どうしても邪魔をすると言うのなら、我らが相手になるぞ」

新生魔王軍を率いた現筆頭頭領格、バーバリッティアであった。

「貴様と天使どもがどのような奸計を巡らせていたかは知らぬが……アルシエル様は、愚かな我らとは違うのだ」

バーバリッティアの声には、苦悶と後悔が色濃くにじみ出ていた。

目の前の人間に唆された愚かな過去は、どれほど悔いても後悔しきれない。

「この茶番を終えたら私は、どのような罰を下されようと謹んでそれを受け入れる。だが、そのときは貴様にも道連れになつてもらうぞ」

「く……」

オルバは歯噛みするが、今ここで頭領格二人を相手に、一方的に勝利することはオルバといえど難しいし、よしんばこの二人を排除したところで、さすがにアルシエルとエミリアの戦いに割って入ることはできない。

オルバは明確に、何かが狂いはじめていることを実感していた。

今のエミリアの力を以てすれば、アルシエルやこの二人を一気呵成に排除することなど遺作もないはず。

そしてそれは、オルバと「彼ら」が思い描いていた計画の最終段階であるはずだ。彼らは、この状況を不審に思っていないのか？

そんなオルバの混乱をよそに、エミリアとアルシエルは今、蒼天蓋の天守よりもさらに高空にて対峙していた。

聖なる銀光と邪悪な黒光が、その存在感とは裏腹に、恐ろしく静謐に空に佇んでいる。

「……懐かしいな」

最初に口を開いたのは、アルシエルの方だった。

「……そうね」

「あのときも、貴様は多くの八巾騎兵とともにこの城にやってきた」

「あなたはもつと沢山の悪魔を率いていたわね」

「私は、決して負けたとは思ってはいないぞ」

「戦略的撤退、つてやつね」

エミリアはふと、さらなる高空、重い雲に覆われた空を見上げて言った。

「あの日……魔王は空から現れた」

対峙する二人の記憶は、二年前に遡る。

あの日、皇都・蒼天蓋の全区を解放し、東大陸を支配していた悪魔を駆逐しきった勇者エミリアの前に立ちはだかったのは、アルシエルだった。

戦いは数時間に及び、エミリアの圧倒的な力にアルシエルの敗色は濃厚であった。

そんなときだった。

死を賭してエミリアを討たんとするアルシエルの後ろから、声がかかったのだ。

それはエミリアが誰よりも求めていた者の声。

誰よりもその姿を求め、そして滅さんと心に決めていた声。

魔王サタンの声であった。

アルシエルを含めた全ての悪魔大元帥を攻略し、世界の殆どが人間の手に戻って尚、その声、

その姿、その魔力にエミリアは憎悪とともに恐怖を覚えた。

自分の全てを破滅させた元凶が目の前に在り、その強大な力を初めて感じたとき、エミリア

の内に興ったのは、さらなる憎悪と、圧倒的恐怖。

自分がこの存在に負ければ、世界も、父の魂も、故郷の村も何一つ救われずに終わる。

あのときの暗く重く苦しい感情は、今でも忘れようがない。

そのときの魔王サタンは、劣勢を命がけで覆そうとするアルシエルを諷め、撤退を命じに来

たのだった。

そして初めて、エミリアは言葉を交わした。

世界の敵と。

「  
」

何故だろう、意識が今に戻ったエミリアは、そのときの会話をすぐに思い出せなかった。だがそのこと自体は単なる思い出であり、今必要な記憶ではない。

エミリアは小さく首を横に振ると、アルシエルに視線を戻した。

「本当に、来るの」

「必ず来る。だが……いつになるのかは、分からん。それによって、何が起こるかも」

アルシエル自身、真奥が来ることで状況がどう転がるかまでは予想できないのだ。

それでも、詳しく言葉を交わさなくても、エミリアとアルシエルの認識は、ある一点に於いて一致していた。

真奥は、日本で過ごした時間を、決してぶち壊すような真似はしない。

「分かるな、だから今は……」

「何もできない私達は、せめて力の続く限り踊り続ける。そうでしょ？」

「その通りだ」

アルシエルは拳を握ると、半身を開いて身構え、エミリアもそれに応じるように聖剣を閃かせ、戦闘態勢に移る。

「始める前に、あなたに謝らなさいいけないことがある……私が弱かったせいで、あなた達の……魔界の民を、大勢殺すことになってしまった……ごめんなさい」

「……貴様にも……そして私にも、全てを圧倒する力がなかった、ただそれだけのことだ。戦の後始末は、戦が終わってからすればいい。今はそれよりも……」

アルシエルは、エミリアが『最終形態』と呼ぶ、最強の形の聖剣を見て、呟いた。

「アラス・ラムスは、風邪などひいていいいな」

「元氣よ。この子は、私達なんかよりも、ずっと強い子よ」

「それは……何よりだっ!!」

アルシエルの豪拳がうなりを上げてエミリアを襲う。

音すら置き去りにするその速度を、エミリアは慌てることなく左腕の盾で真正面から受け止めた。

衝撃が風を唸らせ、遥か眼下の地上まで、音と衝撃をまき散らす。

「これでも全力で行ったつもりだが」



「言ったでしょ、アラス・ラムスは強いやつ!! せええええいっ!!!!」

受け止めたアルシエルの拳を弾き返したエミリアは、体を捻<sup>ひね</sup>ってがら空きの胴<sup>みへ</sup>に、破邪<sup>はじや</sup>の衣で包まれ凶器と化したつま先を打ちつけようと蹴<sup>け</sup>りを繰り返すが、それはアルシエルの全く無防備な腹にぶち当たると、甲高<sup>かんたか</sup>い音を立てて弾き返された。

「……ったあい!」

つま先に返ってきた衝撃に涙目になりながら、お互いの初撃がまるで最初から申し合せた練習の一撃であったかのように、二人は一旦距離を取る。

「堅物なのは、頭<sup>かぶ</sup>だけじゃなかったのね」

「デュランダルすら弾き返す我が体だ。本気で来なければ、傷もつかんぞ」

「……これは、思ったよりしんどい持久戦になりそうね!」

「たまには全力を出さねば、カンも鈍<sup>だる</sup>ろう」

「言ってくれるわね、それじゃあ、終わった後に泣き言<sup>なみご</sup>うんじやないわよ!!」

エミリアは不敵に笑うと、聖剣の刃<sup>やいば</sup>を白く輝かせ、無造作に振るった。

「天衝<sup>てんしゅう</sup>嵐<sup>らん</sup>牙<sup>が</sup>つつつ!!」

「ぬうううっ!!」

新宿<sup>しんじゅく</sup>で真奥<sup>まおく</sup>を吹き飛ばしたときとは比べるのも馬鹿馬鹿<sup>ばかばか</sup>しいほどの光の嵐<sup>あらし</sup>が、アルシエルの全身を襲う。

光る風の猛威を身を固めて防ごうとしたアルシエルは、その風すら追い抜いて目の前に迫ったエミリアに反応できなかった。

「空突閃!!」

「ぐうううううううっ!!!!」

エミリアはアルバート直伝の拳法を最大速度、最大威力でアルシエルのガードの上から打ちつけ、アルシエルを吹き飛ばす。

その風圧だけで、法術防御が施術されているはずの天守の屋根瓦が飛び散り、眼下の地上へと落ちてゆく。

アルシエルは慣性を魔力で相殺するが、既にエミリアは吹き飛ばしたアルシエルを追って間近に迫っていた。

「天光、炎斬!!」

「効かぬっ!!!!」

かつて笹塚の戦いで、悪魔大元帥ルシフェルを灼いた勇者の炎を、しかしアルシエルは気合だけで撥ね退けた。

聖なる炎の剣を振り抜いた姿勢のエミリアの肩口目がけ、アルシエルは空中で体を一回転させ、容赦なく蹴りを振り下ろした。

「いっつ……!!」

破邪の衣に守られているとはいえ、悪魔大元帥の全力の蹴りを利き腕側の肩に受け、エミリアは痛みに顔を顰める。

それが、大きな隙だった。

「ぐ、こ、これは……っ!!」

気がつくと、エミリアの全身は、全く動かなくなっていた。

アルシエルは両の手から念動力を強力に伝達する光の糸が伸び、エミリアの全身の自由を奪い、そして、

「おおおおおおお……!!」

「う、わわわわわわちよちよちよつとおおおお……!!」

アルシエルはエミリアを念動力の糸で捉えたまま、大車輪にエミリアを振り回しはじめた。

「ぐるんぐるん……!!」

「あららすらむすそんなのんきなおえつ」

なんとか抵抗しようとするが、アルシエルはどうも本気でエミリアを振り回しているらしい。力に捉えられたままでは満足な抵抗もできず、

「うおおおおおおつ!!」

「バカあああああつ……!!」

回転による遠心力が最大限にまで高まったその瞬間、アルシエルは振り回したエミリアを

そのまま蒼天蓋の天守の屋根に叩きつけたではないか。

普通の人間ならば全身が粉々になり、跡形も残らないような威力で、エミリアは顔から思い切り蒼天蓋の屋根に叩きつけられる。天守閣の屋根は爆薬でも仕掛けられていたかのように、その純粋な物理的威力だけで爆発四散してしまった。

おかげで東大陸一の建築と讃えられた蒼天蓋の天守は、まるでカツラを吹き飛ばされたコメディアンの如き坊主頭の有様だ。

「……立て！ エミリア！ この程度で参るような、ヤワな貴様ではあるまい！」

「……そうね、そうよ、本気でやらなきゃいけないのは分かっているわ、分かっているけど……」  
アルシエルの怒号に、隕石のような速度で天守に叩きつけられたエミリアは、即座に瓦礫を撥ね退けて立ち上がった。

「鼻の頭打ったわよ!! 痛いじゃない!!」

エミリアは両手で聖剣を構えると、瓦礫の尾を引きながらロケットのように飛び立ちアルシエルに突進する。

「せああああああああああつ!!」

「おおおおおおおおお!!」

流星のように白銀の尾を引く。進化聖剣・片翼の剣閃の大乱舞。

四方八方から浴びせかける聖剣の切っ先が描く軌道があまりにも早すぎるため、地上から見

上げる人間達にはまるでエミリアの姿が銀色の光の球になったかのように見えた。

だが、剣が振るわれる度に起こる甲高い音は、その光の速度の剣をアルシエルが全て見切り防いでいる音だとは、誰が想像できようか。

魔王軍最硬の肉体を持つアルシエルは、決してルシフェルやマラコーダのような多様な魔術体系を会得しているわけではなかった。

それでいて魔界の豪族達を取り纏め、旧魔王軍の将として最後まで人間世界の支配を長引かせた大きな理由の一つがこの純粋な肉体の強さである。

アラス・ラムスと融合し、最終形態にまで進化しているはずの。進化聖剣・片翼。すら空手で受け止めるアルシエルの肉体を、普通の人間がどうやって傷つけることができるか。

その圧倒的な肉体の強さを誇示するだけで、東大陸の八巾の精兵達は、悪魔大元帥アルシエルの前に膝を屈したのだ。

エミリアの斬撃とアルシエルの防御は、完全に拮抗した状態にあり、その応酬はいつまでも続くかと思われたが、

「光爆衝破!!」

「ぬっ!」

エミリアの口から漏れた法術詠唱が完成した瞬間、剣の光ではない光の衝撃破が、エミリアの体の中心から膨れ上がる。

斬撃の処理に集中していたアルシエルは反応が一瞬遅れ、かすかな熱を指先に感じたときにはもう、視界が光で満たされていた。

銚子のマレブランケ達を弾き飛ばした光も、アルシエルにはなんら肉体的な痛手を負わせることはできない。

だが、その視界を一時塞ぐには、十分な光量であった。

アルシエルのコンマ数秒に満たない隙を的確に捉えたエミリアは、最後の斬撃を弾いた腕の間を潜り抜け、

「うりやあああっ!!」

「うぐふっ!!」

胸の中心目がけて、真っ直ぐ踵を刺し入れた。

肉体の表面には、まるで傷はつかない。

だが、勇者の全力の蹴りを受けた衝撃はアルシエルの体の内部を駆け巡り、その最硬の肉体は、そのまま最硬の隕石となってまたぞろ天守にぶち当たり、坊主頭の最上階に大きな風穴を開ける。

オルバスら美しいと認めた名勝、蒼天蓋天守は、エミリアとアルシエルが戦えば戦うほど、屋根が飛んだり壁が削れたりテラスが砕けたりと中途半端にに痛めつけられ、もはや見る影もなくなりつつあった。

「お返しよアルシエル！ 立ちなさい！ まだまだこんなもんじやないでしょ！」

「……ふん、あまり全力を出しすぎて、後でガス欠を起こしても知らんぞ」

先ほどと逆転した立場で、アルシエルがゆっくりと瓦礫を押し退けてエミリアを見上げた。

「その言葉そっくりお返しするわ」

「減らず口を……」

アルシエルは舌打ちすると、再びゆっくりと浮上する。

「だが、一応警告しておく、あまり、天守を傷つけるな。下の方まで破壊すると、後悔することになるぞ」

「はあ？」

アルシエルは、悪魔の顔のくせに、子供に大事な秘密を明かす親のような穏やかな笑顔で言った。

「ノルド・ユステイナは雲の離宮に囚われている。護衛こそつけているが、下手に天守に大きなダメージを与えて雲の離宮に被害が及べば、万が一ということもある。折角生き延びていた父親を、こんな茶番でまた喪いたくはあるまい」

この瞬間のエミリアの気持ちを、どう表せば良いだろう。

息が止まってしまったような停止と、驚愕。

そして、みるみる朱に染まる頬と、涙の浮かぶ瞳。

エミリアの追いつけた夢の片方が今、もう少しで手の届く場所にあると、アルシエルは言ったのだ。

「……本当に？」

「あの男が、真実貴様の父親なのならばな。私とともに、日本から連れ去られた」

エミリアは息を呑む。

アルシエルがどのようにして日本からエンテ・イスラに來たのかエミリアは知る由もないが、父が生きて日本にいた、というかつてのガブリエルの言葉が、図らずもこんなところで真実だと分かったのだ。

「お父さん……本当に、日本に……ずっと、近くに？」

「近くかどうかは分からぬ。最初にあの男に出会ったのは、魔王様だ」

「……そう、だったの」

父を日本で見つけたのは、真奥。

エミリアはアルシエルが告げる事実を、しっかりと一つ一つ胸の内に収めてゆく。

「だが、当然今のままでは、ノルドは貴様の手には戻らん。我らの舞台を回している黒幕が、この戦いを見張っている。おかしい動きをすれば、瞬く間にノルドは貴様の手の届かない場所に行ってしまうだろうな」

「……そう」



「どうした、意気が萎えたか？」

静かに答えるエミリアに問うアルシエルだが、もちろん意味のない問いであるということとは分かっていた。

エミリアの緋色の瞳が、まるで悪魔のような闘志でみなぎっていたからだ。

「ありがとう、元気が出たわ」

「そのまま、世界中を更地にしような顔だ」

「女の子に向かって失礼なこと言ってくれるわね。今の話聞いて、踊り続ける覚悟ができたわ。踊り終わった後に、もう一暴れする覚悟もね」

「……上等だ！」

アルシエルはマントを翻し、邪惡な光を全身にみなぎらせ、闘志を新たにエミリアに突撃する。エミリアもまた全身に聖法氣を行きわたらせ、聖劍を構えてアルシエルの突撃を弾き返すべく、空を蹴って音よりも早く剣を振るった。

※

頼りない燭台の灯りの脇で、真奥貞夫はLEDランタンを抱えながら唸っていた。

「ふあああ……あ、暗イ」

「あ、暗い。じゃねえよ。おい、気分はどうだ」

真奥はランタンを置くと、ベッドから半身を起こしたアシエスの顔を覗き込む。

「ン……ちよつと頭痛イ……あとなんか首モ……」

「そりやあんな飛び方すりやな」

額からのエネルギー噴射で空を飛んだこと自体、物理的に無茶なのだ。推進に使われるエネルギーを首の筋肉で支えることを考えるだけで、なんとなく首や背中が痛くなる。

「何があったかナンとなく覚えてるケド……何がどうなったノ？」

アシエスの問いに、真奥は憂鬱そうな顔をする。

「何もどうもなつてねえよ」

遊水池に墜落した真奥はびしょ濡れのまま、気絶したアシエスを背負って宿に戻ろうとしたが、当然というかなんというか、食堂の主からの通報で巡察の鎧紅巾の騎兵が尋ねてきていて、散々に尋問された。

「デ……どうしたノ？」

「鈴乃と大法神教会の名前出して、後は大事にならないように、尋問の鎧紅巾に賄賂渡して黙っててもらった」

「ウワア」

考えられる限り、人として最悪に近い形で真奥は事態を解決したとしか言えない。

人的被害こそなかったものの街道に大穴を開けた拳句に奇怪な行動で街中を騒がせたのだ。

普通なら即時逮捕連行されていてもおかしくない事態である。

不幸中の幸いにも宿に逗留する上で鈴乃が教会司祭の身分で宿帳に記載をしていたおかげで、現場の鎮紅巾では判断のできない国際問題にまで持っていくことができたが、明日明後日には上位の八巾が自分達を捕えにきてても全く不思議ではない状況だ。

「つてわけで、できるだけ早くこの宿を出なきゃならん。体調が大丈夫だったら、出るぞ」

「ウン……」

アシエスは神妙な顔をしながら、ランタンの下に戻る真奥を見る。

「マオウ？ さつきから何やってんノ？ 変な音立てテ」

アシエスは薄暗い中、目を凝らして真奥の手元を見ると、どうもランタンを横向きに抱えて何かを回しているようだ。

「鈴乃とアルバートが連絡寄越さねえんだよ。出てつてからもう八時間は経つてんのに」

「八時間!? ああ、もうそんなニ……マオウ！」

「なんで起こさなかったのかとか聞くなよ？ お前だって普通の状態じゃなかったんだ。お前の容体が分からんうちは、下手に動くわけにはいかねえ。俺のためにも、お前のためにも」  
真奥がそう言つてアシエスの額を指さすと、アシエスもはっと自分の額に手を当てた。

額は今も淡く光っており、真奥はこの姿を鎮紅巾の兵に見られないために四苦八苦したのだ。

が、それを言っても意味はない。

アシエスは飲み込んだ言葉を胸の中で変えて、真奥の手元を見た。

「……連絡ないのとソレはなんか関係あるノ？」

「一応な、携帯電話の充電してんだよ。今俺なんの力も使えねえんだから、概念送受を少しでも受け取りやすくするために。つたく、池ポチャして壊れなかったのは奇跡だぜ」

真奥が回しているのは、手回し充電でLEDランタンを灯し、ラジオを受信し、携帯電話を充電できる優れたもののアウトドアグッズである。

エンテ・イスラに来てからアルパートと番号交換をしたときにしか充電していない真奥の携帯電話は、いくら機能の少ない旧式といえどバッテリーはすっからかん。

必死でレバーを回すものの、機種の問題か使い方が悪いのか、説明書の能書きほど充電速度が速くなく、もう三時間はレバーを回しつばなしである。

やはり水に落ちた影響は小さくないのかもしれない。

「おかげで腱鞘炎になりそうだ。人間の体って本当に弱えな。今更だけど」

そう言って苦笑しながら、真奥はすっとアシエスの額を見た。

「それでアシエス。どうなんだ。アラス・ラムスが、戦ってるのか？」  
アシエスも、おでこロケットの瞬間のことは一応覚えているらしい。

小さく首を横に振って、

「……よく分からナイ」

小さく呟く。

「でも、さっきは胸が暖かいものでイッパイになつて、こらえきれなかった感じなンダ」

「神妙な顔して言うとなれば聞くにええが、お前もう一つこらえきれなかったモンがあること忘れてねえだろうな」

真奥は、アシエスがこらえきれなかった腹いっぱい溜まった生暖かいもののことを言っているのだが、アシエスは器用にその一言を聞かえなかったフリをする。

「でも今は……」

そしてそのまま神妙な口調で、真っ直ぐ一方向を指差した。

「今は、分カル。あっちの方。イエソドがもの凄い力で、真っ黒い力とぶつかつてル」

「こっから東南……皇都中央の方だな」

真奥はアシエスが指差した方角に意識を集中する。

だが、イエソドの気配は元より、魔力も聖法気も一切感じ取ることとはできない。

アシエスが『もの凄い力』と言うからには、恵美がガブリエルと事を構えたときくらいには聖法気を発しているはずだ。

それならばいくらここが皇都外縁よりさらに郊外とはいっても、真奥に感知できないはずがない。

「くそつ、やつぱり俺、どっかぶっ壊れてんのか!？」

真奥は拳を握るが、いくら悩んでも解決の糸口が見えない。

それに、もつと深刻な問題がある。

蒼天蓋中央区に侵入しているはずの鈴乃とアルバートは何をしているのだ。

アラス・ラムスの力が解放されて激突しているとしたら、その相手は芦屋か天使以外ではありえない。

その戦いが一体いつ始まったのかは分からないが、鈴乃の策が成功するにしろ失敗するにしろ、戦端が開かれた時点で連絡があってもよさそうなものだが。

「こっちから連絡できねえってのは、痛いな」

魔力が集まらない真奥は、鈴乃やアルバートの携帯電話に向かって概念送受を発することもできない。

「ねえマオウ」

顔を顰める真奥に、アシエスが真剣な顔で言った。

「マオウが大変なのは分かっただけ。でもお願い! 行こう! ネーサマがすぐ近くにいます。私、我慢できない!」

「……」

真奥は同じく真剣な顔でアシエスを見返した。

先ほどアシエスがロケットになったとき、ここ数日、真奥がアシエスの力を使おうとして起こった体の不調は発現しなかった。

となると、真奥が聖剣を振るえなくても、アシエスが単独で力を行使することは問題ないのかもしれない。

アシエスは、日本ではカマエル相手に互角以上の立ち回りを演じていた。

それが彼我のエネルギー事情が大きく変わるエンテ・イスラでも適用されるかどうかは不明だが、少なくとも今のアシエスは、真奥ほど現状に対して役立たずというわけではなさそうだ。

「……ん？」

そこまで考えて、真奥はふと、アシエスと融合したときのことを思い出す。

「おい、アシエス」

「何？」

「お前、元はノルドと融合してたんだよね？」

「そうだよ？」

「じゃあまた、俺から離れることは可能なのか？」

「エ？ さあ、それハ……」

アシエスは驚いたように目を見開いた。

「オートーさん相手だからできると思うけど、戻るとかやったことないからナントモ……」

「やったことない？ でもお前、笹幡北高校では随分あつさり俺と融合したよな。ノルドから俺に簡単に移れるみたいなこと言ってたじゃねえか」

「『マオウには』簡単に移れるからそう言っただけだヨ。ただまあこつちでは色々弊害は出てるわけだし、元々相性は悪かったのカモ。あ、スズノとアルバートとかはそもそもダメ」

「あ？」

「チホは不思議と行けソウ。アマネは行けそうで行けなさソウ。リカとキサキはムリ。ルシフェルはニンゲンセーはともかく、きつと一番相性良いと思う。あのクソ天使は死ね、ムリ、考えたくもナイ。あ、エミって人はネーサマが行けてるってことは大丈夫だと思うヨ」

「な、なんなんだ？」

クソ天使というのは恐らくサリエルのことだと思われるが、アシエスが行ける、つまり融合できると判断している者達に、全く共通点がない。

真奥、恵美、千穂、漆原、ノルドと融合できて、天称は判断に悩み、鈴乃やサリエル、アルバート、梨香、木崎ができないと言われても、基準がよく分からない。

基準が分からないだけに、あの漆原が妙に高評価なのか、さらに釈然としない。

これで芦屋やエメラダあたりがどちらに配分されるかによつてはもう完全にパニックだが、アシエスと融合したときのことを思い出して尋ねてみる。

色々な混乱の最中にさらりと言われたことで今の今まですっかり忘れていたが、決して曖昧



にしてはいけない話だ。

「なあアシエス。もしかして『ヤドリギ』ってのは……」

真奥と融合する直前、アシエスは真奥のことを「ヤドリギ」と呼んだ。もしかしたら、アシエスやアラス・ラムスが融合できる人間のことをそう呼ぶのではないだろうか。

「ああうん。行ける人達のコト」

やはりそうか、と納得すると同時に、新たな疑問が湧く。

「それ、おかしくねえか」

「何ガ」

「『宿り木』って、宿主に寄生してる側の植物のことだろう？ お前やアラス・ラムスが俺達

と融合してるのに、なんで俺達が『ヤドリギ』なんだ？」

「ウン？ 何もおかしくないジャン？」

「あ？」

アシエスはなんでもなしのきょとした顔で、さらりと言った。

「この世の知恵ある者は、皆セフィロトのヤドリギだヨ。マオウ、多分順番間違えテル」

「じゅ、順番？」

真奥は混乱を深めるが、思考のための沈黙をアシエスは許さなかった。

「ねーマオウ！ そんなことヨリ！ ネーサマが危ない！ 私をネーサマのところまで連れて

つて！ マオウが動かないと、私も動けないンダヨ!!」

「あ、ああ……」

「行けばキットタブンオソラクめいびー私とネーサマが力併せてどんな敵もやつつけられるし、マオウは安全なところでポーっとしてて大丈夫だから、お願い！ 行こう！ 今スグ！」

「色んな意味ですげえ行きたくなくなった。はあ……」

どこまでも後ろ向きな保証になんら安心できない真奥だったが、アラス・ラムスが戦っているということは、既に恵美と何者かの戦端は開かれてしまっているのだ。

全くその気配を感じられない真奥には確証の持ちようがないが、アシエスは人からかうことはあっても、無用な嘘はつかない。

「アシエス」

「ナニ!?」

「恵美……いや、アラス・ラムスは、元氣そうなのか」

「すっげーバリバリだヨ！」

アシエスの回答は大変抽象的かつ古典的な表現ではあるが、とにかくまだ恵美とアラス・ラムスの力は良好な状態で放射されているということだろう。

「アシエス、お前、スクーターの運転できそうか」

「マオウ、まさかスクーターで行くノ!? 多分できると思うけどそんなユーチョーな……」

「アラス・ラムスが無事でいるうちは、スクーターだ。そこは譲らん」

恐らくだが、府中の運転免許試験場から笹幡北高校まで飛んだときのように、今のアシエスは真奥とともに空を飛べる。

だが真奥は、その手段を否定した。

「鈴乃からの連絡もない、恵美とアラス・ラムスは無事。なら焦って飛んでいってもなんのメリットもない。ガブリエルやカマエル達に俺達の存在をギリギリまで察知させるな。今ここで存在がバレてゲートで飛んでこられたら、今の俺達じゃそこからアラス・ラムス達と連携できる保証がない。お前も、会うなら確実にネーサマと会いたいだろ？ なら焦るな。焦ったらできるものもできなくなる」

「う……ん、分かった。運転はずっと見たし、それにオートーさんに付き合ってメンキョ取ろうとしてたんだモン、どこがどー動くか分かってればなんとかなるヨ」

「……ああ、そうだったな」

もう随分前のことのような気がする。

思えばアシエスとノルドとの出会いは、運転免許を取得すべく府中の運転免許センターに向かうバスの中だったのだ。

「ぜってえ恵美を連れ帰って、俺の免許取得にかかった金請求してやる」

真奥は頷いてアシエスの頭を軽く撫でてやり、極めて小さい残忍さと復讐心を発揮してか

ら、膝を打って立ち上がった。

「じゃあ荷物纏めるぞ。あ、そういえば鈴乃の奴、スクーターのキー置いてってるよな？」

「マオウ、出かける前に、ご飯食べてイイ!？」

「あれだけの騒ぎ起こしてよくまた飯なんか食おうと思うな!？」

真奥は笑いながら言う。

「蒼天蓋城に乗り込むなら道中でいくつか調達したいものもある。この先の町で食わせてやるから我慢しろ!」

早くもいつもの調子を取り戻しつつあるアシエスに突っ込みを入れる真奥。

アシエスもその返事は分かっているのか穏やかに微笑んで頷くが、ふと視界の端に収めた物を見て、真奥に尋ねる。

「マオウ、コレ」

それは、アシエスロケット事件の直前に真奥が千穂と恵美へのプレゼントにと購入した。三本の木製の匙だった。

一本の木から職人が掘り出すその彫刻は縁起物としても重宝されているらしい。

千穂への匙は桜のような小さな花があしらわれたもの。

恵美とアラス・ラムスへの匙は、一對の小鳥があしらわれたものだった。

折角包装してもらったものだが、遊水池への墜落という悲劇の末に、包装どころか箱すらダ

メになってしまい、こうして剥き出しになってしまっている。

「ああそうか、どうすっかな。細工が壊れたら意味ないから、きちんと緩衝材で包まないとな」

真奥は三本の匙を包めるものを探すが、あいにく精密な木彫りの細工を万遍なく保護できる緩衝材が目に入る範囲に無い。

そうして迷っている間にも、

「これスズノとアルパートの荷物、ドースンノ？」

「多分もうここには戻ってこねえだろうから、持っていかなきゃな。でも邪魔だな。預けておいて後でアルパートに取りに来てもらうか？ ああでもあんな騒ぎ起こした後だと没収される可能性も……」

「ねーマオウ、ここ、確か入る前に、チェックアウトのときに水がどうこうとか言われてなかつタ？」

「ああ、井戸の使用料と厩の水か……水が有料って辛いなあ。大して美味くもねえのになあ」  
次々に出立に当たった問題が飛び出してくる。

出発すると決めたものの、何もかも放置して部屋を引き払うなどということができるはずもなく、実際にチェックアウトして厩に保管してあったスクーターを引っ張り出し、予備のガソリンを給油するまでに三十分もかかってしまったのだった。





魔王と勇者、エンテ・イスラの聖堂に立ち会って

「あの男、あんなに強かったっけかい？」

アフロ頭のパンクファッションのラグエルは、蒼天蓋の郊外の丘からエミリアとアルシエルの戦いを眺め、驚いた声を上げる。

「東京タワーでは、ガブさんにポコポコにされてたような気がすんだけどさ」

「まー、あれも日本だったからなんじゃないの」

問われたガブリエルは、気のない返事だ。

「あのときの魔力だって、佐々木千穂って子の後ろにいた誰かさんが、本来地球にないはずの魔力を無理やり精製して集めてきたようなもんだし、純粋な魔力を摂取できるこっちじゃ勝手が違うってことでしょ」

「エミリアが手を抜いている、ということはあるまいな」

「うん？」

もう一人の声に、ガブリエルが振り向いた。

そこには、紅い鎧を纏い、幼い少年を連れた巨漢が佇んでいた。

「イエソドの力を足したエミリアは、ガブリエル、貴様を退けたのだろう。それがあの程度の悪魔と互角の戦いを繰り広げているのは、どういうことだ」

「カマエル、声が怖いけど、ひよっとしてこの間のこと、まだ怒ってる？」

「何かと詰めの甘い貴様らのことだ。計画が完遂される前からもう終わった気でいるのではな



いかと心配にもなる」

ガブリエルの飄々とした態度に、カマエルの声には明らかに苛立ちが混じっていた。

「信用ないなあ」

不満げなガブリエルを無表情に睨むと、カマエルは傍らの少年、イルオーンを見下ろした。

「エミリアは、不完全とはいえセフィラの子の『ヤドリギ』だ。その力が侮れないものであることは、よく分かっているだろう」

「ああ、そうだったねー、それで君、この前痛い目見たもんね。『サタン』相手に」

「……貴様……」

どこまでも不真面目な態度のガブリエルをカマエルは威嚇するように睨みつけるが、その程度で動揺するような男でないことは彼もよく分かっている。

「まー、それでもエミリアが負けることは万が一にもないよ。それにその万が一が起ころうだったら、ちよつと早いかもしれないけど僕らでエミリアを助太刀すればいいわけでしょ。僕だって油断してるわけじゃない。エミリアに接触するのはアルシエルやマレブランケとの戦いで十分消耗してもらってからって話だったじゃない」

「消耗って言ってもねえ、もう何時間戦ってるよ、あいつら」

ラグエルはうんざりした様子で、溜息をついた。

「十トウクと少した」

カマエルの硬い声。

そう、エミリアとアルシエルの一騎打ちが始まって、既にそれほどの時間が経とうとしていた。

いくら人外の力を持つ勇者と悪魔大元帥の戦いとはいえ、一対一の戦いの時間としては異常な長さだ。

しかもノンストップで全力の戦いを繰り返しているのである。

「いいじゃない、好きなだけやらせておけば。さっさと終わらせたいのは分かるけど、焦って詰めを誤れば、それこそサリエルみたいに一生を棒に振ることになるよ」

「ああ」

「……む」

ラグエルとカマエルは、何を思い出したか複雑そうに眉根を寄せる。

ガブリエルは二人の反応に苦笑しながら言った。

「まあじっくり待ちましょーよ。そのうちどっちも疲れてくるたる……」

「!!」

そのときだった。

カマエルの傍らにあったイルオーンが、鋭い動きで首を横に向けた。

「何、どしたの」

余裕<sup>4</sup>の笑みを崩さないガブリエルはいち早くイルオーンのその反応に気づき、声をかける。

「……む」

「なんだ？」

カマエルとラグエルも遅れてイルオーンを見るが、イルオーンは相変わらず丘<sup>はな</sup>の遠<sup>はる</sup>か彼方<sup>かなた</sup>、南の大地に目を向けていた。

「なにか、くる」

イルオーンの様子をラグエルとカマエルが不審げに見つめる中、ガブリエルは蒼天蓋<sup>ソラテガイ</sup>の方角に顔を戻し、二人の天使に見られないように口角を上げる。

「何が来るって言うんだい、イルオーン君」

「あれは……」

イルオーンは目を見開いて、その名を口にした。

「……………たしか、すくうた？」

「すくうた？」

その言葉に、ラグエルとカマエルが疑問の声を上げる。

「すくうた、すくうた……なんだっけか、聞いたことある言葉だけど」

ラグエルが眉根<sup>まゆね</sup>を寄せて首を傾げ、カマエルはイルオーンの視線を黙<sup>もく</sup>して追う。

「ようやくか……」

ただ一人ガブリエルだけが満足げにそう呟き、蒼天蓋の戦いを悠然と眺めていたのだった。

## ※

皇都中央区の整備された街道を、甲高い音を立てて二台のスクーターが最高速度で疾走する。ホソダ・ジャイロルフを駆る真奥貞夫は、遙か前方に見えた蒼天蓋城と、その上空で繰り広げられる銀と黒の光の競演を見据えながら悪態をつく。

「本当に鈴乃とアルバートは何やってやがんだ！ 考えられる限り最悪の展開になってんじやねえか！」

「マオウ！ アレ！ アソコ！ ネーサマガ!!」

真奥の耳に嵌ったイヤホンからは、ツーリング用トランシーバーを通じて聞こえるアシエスの興奮した声が響く。

「わーってるよ！ お前興奮しすぎだ、カタコトすげえことになってんぞ！」

「マオウ！ モウいいんじやナイ!? 飛ばうヨ！ ここまで来ればもう天使なんざカンケーネーッテ!!」

「だから焦るなって！ 蒼天蓋はデカいんだ！ 見た目ほど近づいちゃいないし、この距離じやまだあいつらと連携が取れない……おい、来たぞ!!」

真奥は正面を見て大声を上げた。

首都の蒼天蓋城の周囲を開く貴族街へと入る大門前で、何やら大勢の騎士達が、謎の機動物体の接近に慌てふためいている様子が見て取れたが、どうやらこちらを排除する選択肢を取っているようだ。

恐らくはファイガン義勇軍の殿軍だろう。

スクーター目がけて、攻撃用の法術火球や弓矢が雨あられと降り注ぎはじめたのだ。

「マオウ！ やつべえヨ！ どうすんノ!」

「全速力で突っ切れ!! 法術なんか怖くねえ!!」

「マジデ!? 怖くはないけど当たれば痛そうなんですケド!」

「大丈夫だ! 日本車の力を信じる!! うおおおおお!!!」

真奥はさらにエンジンをつかし、甲高い音を鳴らしながら迎え撃つ義勇軍の攻撃の嵐の中を駆け抜けてゆく。

「ヒャー! もーディーにでもなーレッツ!!」

その動きを見たアシエスも、破れかぶれな勢いで後に続いた。

ホンダ・ジャイロルフ特有のフロントガラスや屋根に、無数の法術や矢が降り注ぐ。

だがしかし、日本の技術力の結晶である繊維強化プラスチックのルーフは歪み、溶け、穴を空けながらも、全ての攻撃から乗員を守り抜いたではないか。

「オーすっげエ！」

「日本の技術ナメンなあ!!!」

甲高いエンジンせんどうの雄叫おこびとともに、真奥まおくとアシエスは義勇軍殿軍の哨戒隊しやうかいにそのまま突っ込んでゆく。

その勢いと気迫きぱくに義勇軍の八中騎兵達はちちゅうきへいは回避しながら道を開けてしまう。

慌あわてたように後ろから射かけられる矢も、最高速度のジャイロルーフにまるで届かない。

真奥とアシエスは空を縦横無尽じゆうけいむじんに駆け回る、圧倒的な力を持つ二人の戦いの軌跡にしか興味はなかった。

「アラス・ラムス、芦屋あしや、恵美えみ！ 俺は来たぞおおおお!!」

遠目ではあるが、もうはつきりと上空で力をぶつけ合う悪魔型の芦屋と、大ぶりの聖剣せいけんを携えた半天使化した恵美の姿を捉とらえることができた。

「マオウ！ 後ろからなんか来ル!!」

と、そこにアシエスの緊迫した声。

真奥がバックミラーに視線をずらすと、先ほどぶつちぎった八中騎兵の一隊が馬を駆って追いついてくるではないか。

中には弓に矢をつがえ、射かけてくるものまでいる。

「落ち着けアシエス！ あれを使え!!」

「えー？ こんなコケオドシ、本当に効くかなナ!?」

「俺達の敵は八巾じゃねえ！ 馬をビビらせて足止めさえすればいいんだ！ やれ！」

「はいヨー！」

アシエスは了承の意を示すと、サロベットの懐から、まるで簾のような厚みの赤い短冊を取り出す。

それはアシエスがロケットになった村で見た、魔除けの爆竹の束だった。

「チャツカメンって便利だ……ヒヤアアアアアアア!!」

スクーターの上で点火具を使ったアシエスの悲鳴が、イヤホンから聞こえて真奥の耳をつんざき、ついでもの凄い破裂音があたりを埋め尽くす。

短冊状に連鎖している爆竹が導火線の火によって次々に爆発しはじめたのだ。

「バカ！ 何やってんだ早く投げろ!! 火傷すんぞ！」

「ヒヤアアアアゲッホゲッホ!!」

アシエスは奇声と咳を入り混じらせながら、爆竹を背後の地面に叩きつける。

真奥も同じように、パーカーの懐から一房爆竹を取り出すと、チャツカメンを使って点火、即座に後方に放る。

背後で炸裂音と爆発による煙が充満し、矢を射かけてきた八巾の馬が恐慌をきたしている姿を一瞬だけミラーで捉えた真奥は、そのままスピードを上げる。

「アシエスー 無事か！」

「ケムい……ゲッホゲッホ!!」

「無事だなー おいそうこう言ってる内にもう目の前に別働隊だー クラクション鳴らせ！」

「おりやああああアアア!!」

中央区の中ほどの大路と大路の交差点にはやはり義勇軍の一隊が警戒しており、こちらに気づいて先ほどの一隊と同じように慌てふためいて真奥とアシエスを迎撃しようとする。

だが、その行動を押しとどめたのは、耳をつんざくような強烈な音圧だった。

真奥とアシエスが二人して、スクーターのクラクションを鳴らしまくったのだ。

聞いたことのない耳障りな音に動揺した義勇軍の一隊は真奥達を止めることができないばかりか、音に気づいて真奥達の方に目をやった瞬間、LEDヘッドライトのハイビームを目に当てられ、ほんの一瞬だが視界が眩む。

その一瞬の隙にすり抜けた真奥が置き土産とばかりに捨てていった爆竹の煙幕に混乱してすぐに追いつくことができない。

と、今混乱させた隊とは全く別の路地から、騒ぎを聞きつけたか真奥とアシエスに並走するように現れた騎馬の一隊があった。

「マオウー あいつら槍持ってルー 横から来る気だー！」

「落ち着け！ 爆竹は!?」



「使いきつタ！ あとはコンテナの中！」

「最初の一発で使いすぎだ！ ……せいっ！」

真奥は自分に迫る二騎に向かって先ほどのように爆竹を使い馬を足止めすると、アシエスに向かつてあるものを投げた。

「受け取れ!!」

「なにコレ!?!」

「馬の鼻づらにぶちかませ！」

「お、おう？ オオオオオ!?!」

アシエスが真奥から受け取ったのは、アウトドア専用の大ぶりの虫よけスプレーだった。

真奥と鈴乃が唯一喧嘩せずに購入したキャンプグッズが今、絶対にやってはいけない本来の用途以外の使い道で絶大な効果を發揮する。

殺虫剤の刺激臭と、飛沫を顔面に食らった馬は明らかに変調をきたし、混乱して転倒してしまった。

倒れた騎兵達が死んでいないことをバックミラーで確認しながら、アシエスはうめき声を上げる。

「ウマに悪いことしたヨ……」

「戦争に使う方が悪い」

真奥は果てしなく根本的なことを言い出してアシエスの非難を煙に巻き、

「おい、今なら周りに誰もいなさそうだ。コンテナから爆竹補給しとけ」

周囲の状況を確認しながら一旦停止を促しジャイロローフから降りると、積まれたコンテナを開いて爆竹の山を取り出す。

コンテナの中には旅に使った荷物や鈴乃とアルバートの私物が入っているのだが、水などの食料品を全て捨ててできた容積を、蒼天蓋進撃に際しての対人兵器輸送に当てたのだ。

もちろん、中央区に到達するまでの農工区などの村々で手に入れた雑貨としか言いようなものを組み合わせて作ったそれらは、こけおどしにしか使えない程度のものである。

だがアシエスの本気の力を察知されて天使達が総攻撃をかけてきたら対抗できる保証はない以上、ぎりぎりまでは一般人ができる範囲の武器を振るっていかざるを得ない。

だがあまり殺傷力の高いものを使って、万が一にも人を殺傷してしまつては、いかな芦屋や恵美やアラス・ラムスを救うためだったとはいえ、あまりにも後味が悪すぎる。

そう考えての真奥の武器選びだったか……。

「おいアシエス、いざというときのために、木刀はすぐ手に取れるようにしておけ」

「えー……片手ふさがるジャン」

「いざというときは相手に投げつけろ。とにかく極力、人間を傷つけるな」

「傷つけないかいいってモンでも……こんな戦い方でいいのかナア」

アシエスがボヤクのも無理はない。

ノー・ヘルメットで木刀を振り回し、大量の爆竹を好き放題鳴らしまくり、ライトで人の目を灼き、クラクションを使って全方位に騒音をまき散らす。

悪魔の王と、世界組成の宝珠セフィラから生まれた奇跡の少女がやっていることは、完全にBOSSOZOKUのそれだった。

否、平成の世の年月もそこそ経過した現代日本に於いて、このようなレトロかつなんの生産性もないチンケさが天井知らずの迷惑行為に走るBOSSOZOKUなど日本中どこを探しても存在しない。

ここまで来ると、ジャイロルフに竹やり出っ歯のマフラーや鳴り物のホーンが付いていないことが逆に惜しまれる。

「まだまだこれからだぜ！」

だが真奥は収まらないようだ。

「城に近づけば近づくほど、蹴散らすのは困難になってくるからな、これ使うぞ」

そう言って真奥が取り出したのは、爆竹を巻きつけた、中に粘性の高い液体が入った粗悪な作りのコルク栓の瓶だった。

口の部分には導火線となる紙がコルク栓に挟まれて瓶の中まで伝っており、どこからどう見ても、紛うことなき火炎瓶である。

「本気イ？」

アシエスのげんなりした問いに、真奥は自信たっぷりに答えた。

「あそこで戦ってる奴らと、どこにいるか分からねえ鈴乃と合流するまではな！ お前が戦わなきゃならなくなったら、俺が無事でいられる保証ねえんだから、極力お前が力を使うのは最後の手段にしたい。お前の力は目立つから、そこんとこ夜露死苦な！」

「……あっソ」

ここまで派手だか地味だか分からないがとにかく騒音や迷惑行為をまき散らしておいて、力が目立つもクソもない上にアシエスの耳にもおかしい真奥の発音だったが、とにかく真奥はこのCLASSICAL BOSSOZOKU STYLEをギリギリのところまで貫き通すつもりようだ。

「スズノお……早く帰ってきてマオウ止めテエ……これシンドイ……」

新たな爆竹の束を次々懐に収めながら遙か先の上空の戦闘を見上げ、アシエスは緊張感なくボヤいたのだった。

※

「……」

もう幾度目かも分からないアルシエルの爪による新撃を弾き返したエミリアの耳に、異音が届く。

甲高い唸りが遠くから近づいてくる音だ。

アルシエルもそれに気づき、攻撃の手を止めて音のする方角に目をやっている。

その音は、とても耳に馴染んだ、それでいて、こんなところで聞くはずのない音だった。

「あれは……」

眼下の地上に布陣した義勇軍の後方から唸りを上げて近づいてくる二台のそれは、

「ピザ屋のスクーターだ！」

エミリアとアルシエルが異口同音に驚きの声を上げる。

それは、日本ではデリバリーのピザ屋がよく用いる、屋根付きのスクーターだった。

「ま、まさかあれが……」

先の見えないアルシエルとの戦いに、疲労が見えはじめていたエミリア。

いつか魔王が現れるかもしれない、という希望に縋りながら、果たして本当に現れるのか、アルシエルの希望的観測ではないのかと思う瞬間もあった。

何せ、魔王がやってきたのなら感じられるであろう強大な魔力が、今に至るも一切感じられない。

そんな状態だから、真奥が一体どのようなように現れるのか、予想すらできなかったのだ。

「どこまで……無茶苦茶なのよ」

きちんと、免許は取れたのだろうか。

まさか勇者と悪魔大元帥の戦場に、魔王がスクーターで乱入してこようとは。

見下ろす大地を疾駆するスクーターは二台。一緒にいるのは鈴乃だろうか、それとも漆原だろうか。

中央区の大路を真っ直ぐ天守目にかけて疾走するスクーター二台を認めたエミリアは苦笑しようにした顔を、一瞬で強張らせた。

「な、何、あれ……」

眼下の義勇軍もスクーターの接近に気づいたらしく、何かと慌てふためきながら、スクーター目かけて散発的に攻撃を仕掛ける様子が見られる。

だが、二台のスクーターは全くスピードを落とす様子がない。それも当然だろう。

もしスピードを落としてしまったら、大変なことになる。

「あ、あれは……」

エミリアだけでなく、アルシエルもまた、その事実気づきエミリアへの攻撃も忘れ啞然としていた。

二台のスクーターは『王の軍勢』を率いていたのである。

『ちよっとおオオ!! もういい加減諦めようヨオオ!! 私の力使わせてヨオオ!!』

大地と空気を揺るがす轟音の中、アシエスの半泣きの声がイヤホンから漏れ聞こえてくるが、それも致し方ない。

『いいから爆竹投げとけ!』

真奥の投げやりな指示に、アシエスは大いに逆らう。

『もう効かないジャン! 慣れてんジャン! マオウの火炎瓶だって全然ダメジャン!!』

『ここまで来たんだ! 今更引き下がれっか!! それに下手なところで止まったら、後ろの奴らが止まらなくて将棋倒しになってスクーターごと轢き潰されるぞ!! スクーターの破片との合い挽肉になりたくなかったら止まるな! 走り続けろ!』

真奥は視界の端で、アシエスが涙目になって後ろを振り返っているのを捉え、次いでバックミラーに映る、絶望的な背後の状況を見て歯を食いしばった。

『だから飛べばいいって言ってんじやんかア!!』

『俺達だけ飛んだらスクーターがミンチだろうが! そんなことしたら後で鈴乃にポコポコに

されるし、それに機動デュラハン参戦は後で俺がもらうんだっ！壊されてたまるか!!」

「知るかそんなコト!!」

真奥とアシエスは、天守へと至る大路を、大勢のわけのわからない連中を引き連れて疾走、否、暴走していた。

真奥達のBOSS行為にもめげずに追いついてきた哨戒の義勇軍を筆頭に、元々義勇軍と戦っていたらしいマレブランケの兵やら、どこから湧き出した元々皇都にいたものと思われる義勇軍以外の八中騎兵の騎馬兵やら歩兵までが参加して、二人のスクーターを先頭に人魔が入り混じったまるで統制のとれぬ「王の軍勢」は、間もなく天守の大門へと到達しようとしていた。

「マオウー 前！ハゲとか悪魔とカ!!」

既にエミリアとアルシエルの戦いを見上げていたオルバやファーフアレロやバーバリッテイアの姿すら目視できるところまで到達していた二人だが、今ここで迂回にブレーキでもかけようものなら、後方の狼どころか、狂ったように追いかけてくる「王の軍勢」がブレーキに対応できず、真奥もアシエスもサバンナを大移動するバッファローの群れに飲み込まれた哀れな小動物の如くスクーターごと木端微塵になってしまいうだろう。

「ハゲも悪魔も知るか！このまま突っ切れ！城に突っ込むぞ!!」

「ウソでシヨオオオオオオオオ!!」



アシエスの悲鳴に構わず、真奥はさらにスロツトルを開くと、最後の火花とばかりにごっそり大量の爆竹に点火しながら、キャンプ用防水テープでクラクションボタンを押し込まれた状態に固定して鳴らしっぱなしにし、さらにはもう使うことはないだろうLEDランタンをサイレン全開にしながら前方で待ち構える義勇軍本隊目がけて投げつける。

「ま、魔王サタンっ!?」

「魔王様!?」

「なんだと!? 魔王様だと!?」

皇都中央区住民への迷惑行為全開で接近する『王の軍勢』の先頭に真奥の顔を認めたオルバ、フアフアレロ、そしてバーバリッティア。

「よお!! ちよっと取り込み中で、また後でなっ!!!」

だが真奥は前言通り、ぼんやり浮いて睨み合っているハゲとか悪魔とかを猛スピードでスル―した。

人の背丈より高い位置に浮いていたオルバの足元を二台のスクーターが通過し、巻き上げられた風のおかげでオルバの法衣が翻り、背教の大神官オルバ・メイヤー渾身のステテコが大エフサハーン帝国の偉大なる皇都に堂々開帳された。

「なんかひでえもん見た気がするがまあいいや! アシエス! 速度そのまま! コンテナ開けるぞ! 全部ぶっ散らばせ!!」

「もう知らん！ 好きにしロオオオオオ!!」

真奥はアシエスのスクーターの斜め後ろに陣取ると、木刀の先端であらかじめロックを緩めておいたアシエスのコンテナの取っ手を突つき、蓋を開かせる。

そこから転がり落ちるのは、真奥お手製の無数の火炎瓶だ。

アルバートの加入で使わずに済んでいた予備のガソリンを使い回した火炎瓶は、地面に落ちて即座に割れて、大路へとガソリンをまき散らす。

そこに真奥が火をつけた爆竹を放り投げると、

「ひやああああああああああアアアア!?」

「あちちちちちちちちちち！ うっわ！ 引火した!?」

当たり前のようにガソリンに引火して焦げくさい爆発を起こした。

その火勢は火をつけた真奥にも熱風を浴びせ、その拍子にアシエスと真奥が手に持っていた爆竹に引火してももの凄い勢いで爆音を奏ではじめた。

「痛いって痛いっていつてうわわわわわわわわああああいいいい！」

文字通り尻に火がついたスクーターと『王の軍勢』は、煙と火炎と爆音をまき散らしながらそのまま義勇軍本隊の真ん中を割って天守の大門を突っ切り、天守敷地内へと入ってしまうではないか。

その惨状にオルバやファーフアレルロやバーバリッティアが対応できなかった一瞬の間に、

元から二人を追っていた義勇軍の哨戒部隊がそのまま引き込まれるようにして天守敷地内になだれ込んでいき、オルバ達や義勇軍の本隊はただそれを呆然と見送るばかり。

今やこの騒動の本来の主役であるエミリアやアルシエル、マレブランケ頭領格やオルバなど完全に置いてけぼりで、真奥とアシエスの暴走スクーター率いる『王の軍勢』が、混乱したまま天守に突入して敷地内を縦横無尽に駆け回っていた。

蒼天蓋天守と雲の離宮がある天守敷地内もそれなりに広大な土地を有し、美しい庭や役場などの施設もあつたりするが、けたたましい爆竹と白煙のおかげで上空からは先頭車両がどこにいるか一目瞭然だ。

「あっ」

そのとき、エミリアとアルシエルは、同時に全く緊迫感のない声を上げた。

先頭車両の白煙が、雲の離宮の正面門で止まったのだ。

それと同時に、二台のスクーターを追いかけていた義勇軍の騎馬兵が正門の跳ね橋から落ちたり、門の幅に合わない隊列を組んでいたせいで壁に激突したり、それでも後ろの兵達が止まらずに将棋倒しになったりと、悲惨な光景が広がりはじめていた。

だが、どうやらスクーターの爆走は、それでも止まっていけないらしい。

雲の離宮の窓からはところどころ白煙が漏れはじめている。荒ぶるエンジン音、何かが壊れたり薙ぎ倒されたりする音、原因不明の爆発、人や馬の悲鳴、その他なんだか分からない音が

間断なく響き、離宮内が阿鼻叫喚の様相を呈していることが現場にいらなくても容易に想像ができた。

もはや誰もが、或いは本人達ですら、エミリアとアルシエルの戦いを忘れていた。

BOS-SO-ZOKUと『王の軍勢』に蹂躪された雲の離宮内部がどんな惨状を呈しているのか、固唾を呑んで見守ってしまう。

そのおかげでエミリアは東の空がかすかに白みはじめており、夜明けが近いことに気づいた。

「……っは！ い、いかん!!」

そのときアルシエルが、あることに気づいて慌てふためく。

「く、雲の離宮には……このままでは」

だがアルシエルの動揺は、全て過去に置き去りになった。

天が、震え、崩れた。

「っ！」

「なっ!!」

エミリアとアルシエルは、驚愕に目を見開く。

東大陸を統べる大帝国の蒼天蓋城に並び立つ雲の離宮が今、紫色の光の柱に貫かれ、崩壊を

はじめていた。

轟音が大地を揺らし、光の柱は天を貫く。

光の柱が黒い雲を裂き、そこから覗くのは、夜空に君臨する蒼い月と、紅い月。

エミリアは空を見上げた。

その空には、あの日のように、あの男の姿があった。

最後の一太刀を浴びせること敵わず、異世界地球へと逃した魔王サタンが、今、崩壊した蒼天蓋の天守の上空にて、二つの月を背負って大地を睥睨していた。

しかし、あの日と違うことがある。

魔王サタンは、魔王であって魔王ではなかった。

その圧倒的な魔力は間違いなく魔王サタン。だがその姿は、日本の笹塚でアルバイトに勤しむ勤労青年、真奥貞夫の姿であった。

大地にある全ての存在の視線を集めながら、魔王サタンはエミリアとアルシエルの下に、ゆっくりと降りてくる。

「……魔王様」

アルシエルが感極まったように、空中で跪き、主の降御を待った。

エミリアは、ただ立ち尽くしていた。

いつも調子のいいことを言って、自分を惑わし、懸命に働き、人間に愛され、人間を愛して

いる、意味不明な魔王の化身、真奥貞夫の姿がそこにある。

そしてその瞬間を狙いすましたかのように、紫の光の柱に負けじと、東の稜線から太陽の最初の矢が空を貫いた。

まるで王の降臨を祝福するかのように、暗い夜が明け、太陽が、朝が、魔王の出現を歓迎しているかのように、急速に空から夜を駆逐しはじめる。

そんな真奥の姿を振り仰ぎながら、エミリアは思う。

これほどの魔力を、何故今の今まで自分は感じ取ることができなかったのだろうか。

だがそんなエミリアの疑問に答えるほど、真奥貞夫は気の利いた男ではなかった。

「つたくよお……」

降ってきた声は、いつもと全く変わらぬ軽い声。

「免許は取れねえ、鈴乃には大量の借金、一週間もシフトに穴開けた挙句に当然その分のバイト代は出ないし、帰ったら代わってくれた奴らにお礼して回らなきゃなんねえ、本当に踏んだり蹴ったりだ」

どこまでも魔王らしくないその言葉が、今のエミリアにはなぜかとても心地よく響く。

「お前ら、帰ったら説教な。あと、来月いっぱい俺が何しようとか文句は言わさねえぞ。何回失敗しても、絶対免許取ってやる。スクーターだって買うんだからな！」

「……御意に」

アルシエルは、跪いたまま深く頭を垂れる。  
そして。

「……迷惑かけて、ごめんなさい」

エミリアもまた、素直に、そう口にしていた。

驚くほど素直に、そう言うことができた。  
だか。

「なんだよ、恵美お前、捕まってるうちになんか変なもん食ったか」

聖剣を携えたまま、悄然とするエミリアを見て、逆に真奥が顔を顰めた。

「な、何よ」

「操られたりしてんじやねえだろうな。素直すぎて気味悪いぞ」

「……」

いつものエミリアならここで怒り出すところだが、なぜか全くそういう気にはなれず、

「私にだって、そういうときもあるのよ」

素直に、今の自分がいつもと違う、ということを認めた。

「許してもらえないとは思わないけど……でも、もしまた日本に帰れたら、あなたに沢山謝らな  
きやいけないことがあるわ」

「お、おう……お、おい芦屋。恵美やつはおかしくねえか？」

この世の全てをひれ伏させるかもしれない魔力を内包する真奥は、心底不気味そうな目でエミリアを見ながらアルシエルに問いかける。

「御意。ですが……私もエミリアも、此度の意に沿わぬエンテ・イスラへの帰還で、多くの経験を致しました。今のエミリアがおかしいかどうかは、日本に『帰還』し、ゆるりと語り合えばよろしいでしょう。我々もエミリアも、先の戦いで多くのものを失いましたから……」

「……ああ」

真奥はアルシエルのその言葉にはとなつて、顔を上げ、崩壊してしまつた雲の離宮を見下ろして、声をかける。

「おい、上がってこいよ」

真奥の声の行く先に、エミリアもアルシエルも視線を向ける。

すると、光の柱の中から、ゆつくりと進み出る影があつた。

紫色の光と朝日の逆光で、小柄な影の人物の表情は判然としない。

だが、小柄な影に横抱きに抱えられている大柄な男性のシルエツトを捉えた瞬間、エミリアの心臓は一瞬で破裂するのではないかと思うほどに激しく高鳴つた。

「恵美、俺もお前に、昔のことを今更許してもらえとは思つちやいない。だが、詫びの印として、お前が失くした大切なもの見つけたから、返しとく。ま、俺は最初に見つけたってだけで何か世話したワケじゃないし、今偶然そこにいたのを預かっただけなんだがな」



「……………ああ」

エミリアの魂の声<sup>も</sup>が漏れる。

記憶にあるその姿より、幾分歳を取っただろう。

だが、その堂々たる体軀<sup>たぐ</sup>、穏やかな表情を、分らないはずがない。

忘れるはずがない。

聖剣はその瞬間手の中から虚空<sup>こくう</sup>に消え、エミリアは空手になった両腕で、小柄な影が差し出すその男の体を受け止めた。

その手に伝わる体温。心臓の鼓動<sup>こどう</sup>に、エミリアの心臓もまた強く脈打つ。

男の体は軽かった。

エミリア・ユステイーナは今や、悪魔大元帥<sup>あくまだいげんすい</sup>に全力で城の屋根に叩きつけられても鼻を打つ程度で済むほどの屈強な肉体と聖法氣<sup>せいほうき</sup>を持ち、何も知らずに泣くだけの小さな少女ではなくなっていた。

それでも、溢れる涙は止めようがなかった。

言葉で聞いても、実感など得られなかった。

実感が得られなかったからこそ、苦悩し、答えを出せずにいた。

だがこうして答えを手に入れたとき、エミリアは、知った。

自分は、やはり勇者などではなかった。

「お父……さん……」

浅い<sup>い</sup>が穏やかな呼吸をして眠る、穏やかな<sup>すくなく</sup>壮年の男の顔が、紫色の光に照らされて浮かび上がった。

二度と会えないと思っていた父が、生きて、こうして今、エミリアの腕の中にいる。

それだけで、エミリアの中では、全ての戦いが終わったような、満たされた思いが広がったからだ。

自分は、正義の勇者などではない。

愛する父との再会だけを願っていた、農夫の娘、エミリアでしかなかった。

「ほん……とうに……夢じゃ……ないのよね……」

まるで自分を戒めていた呪縛<sup>じゆばく</sup>の鎖<sup>くさり</sup>が解けたように、心が穏やかになっていく。

「夢じゃねえよ。だからさっさと結界張ってやれて。あと芦屋<sup>あしや</sup>。お前ちよつと離れろ」

「は……」

「は？ あ、か、かしこまりました」

「え、あ、そ、そうよね、……っ！」

人間にとって有害な魔力を放射するアルシエルが身を引いたことで我に返ったエミリアは、涙を拭いながら慌てて父、ノルドの肉体を聖法<sup>せいぽう</sup>気の結界で包む。

「で、今回はそれだけじゃねえんだ。恵美<sup>めぐみ</sup>、アラス・ラムスは元気だろうな」

「……もちろんよ。さっきまで元気いっぱいにアルシエルと……え？ 何？」

まだ涙が収まらない瞳を拭いながらそう言うエミリアだったが、ふと、顔の中でアラス・ラムスが騒ぎはじめて目を瞬かせる。

「え？ 何、え？ わ、分かったわ。はいっ」

ほとんど言葉にならないアラス・ラムスに急かされるようにして、エミリアは聖剣ではなくアラス・ラムスを具現化する。

中空に現れたセフィラ・イエソドの赤子は、真っ直ぐに、ノルドを抱えていた小柄な影を見ていた。

「ぼば」

「よお、アラス・ラムス」

真奥は、娘の元気な姿に思わず顔を綻ばせる。

「今日はアラス・ラムスに、会わせたい奴がいるんで、連れてきた」

「……うん」

アラス・ラムスは、真奥の心を予め知っていたかのように、頷く。

「あしえす、ひさしぶり」

アラス・ラムスが、小柄な影に向かって手を伸ばす。

その瞬間、雲の離宮を貫いた光の柱が天に消え、曙光に少女の顔を浮かび上がらせた。

その容貌そうぼうを見て、エミリアもアルシエルも息いきを呑む。

「……ネーサマ」

その少女は、成長こそしているが、銀色の髪に一房の紫色の前髪を持ち、アラス・ラムスと  
うり二つの顔立ちをしていたのだから。

「ま、魔王!? そ、その子は!?」

「魔王様、やはり、その少女は」

「あしえす……」

「ネーサマ……ひさしぶりだね」

対峙たいじした二人の、セフィラの少女は、一人は真っ直ぐ、一人はもじもじしながら、相手を見  
た。

「うん」

「驚いたヨ。ネーサマ、まだ赤ちゃんなんだ」

「あしえす、おつきくなった」

花のように微笑ほほえむアラス・ラムスの顔を見て、アシエスがうつむく。

「……うん」

「あしえす?」

「……………ヴんっ……………!!!」

うつむいたアシエスの体が震えはじめ、顔が見る見るうちに歪み、あつという間に涙と鼻水でいっぱいになり、そして、

「ねーざばああああ!! あいだがつダヨおおおおおおうえええ!!」

あつという間に決壊したアシエスは、ぐしやぐしやの顔でアラス・ラムスに抱きついた。

赤ん坊のアラス・ラムスのお腹に鼻水だらけの顔をこすりつけながら、アシエスは人目もはばからずに泣きじやくる。

「やん、あしえすばっちい」

アラス・ラムスはちよつと嫌そうな顔こそしたものの、アシエスを引き離そうとはしなかった。

「ねーざまああああ!! うえええええ!!」

「あしえす、なかないの、いいこいいこ、なかないー」

やはり、こうしているとアラス・ラムスはアシエス・アーラの姉のようだ。

本人もアシエスを求めて無茶をやらかした上に散々泣きじやくったくせに、いざ『妹』を前にすると、如何にもお姉さんらしく得意げな顔でアシエスの髪を小さな掌で撫でている。

「ぶううえええええええええ!! ざびじがつだヨおおおおお!! ねーざばあああうあうあうあうあうあ!!」

「え、えつと、魔王?」



「魔王様……これは、一体……」

唐突な展開にまるでついていけないエミリアとアルシエルに、真奥は苦笑しながら答える。

「感動の再会は、一組だけじゃなかったってことさ」

「は、はあ……」

「よ、よく分からないけど……」

エミリアとアルシエルは、顔を見合わせる。

そこには、先ほどまで十時間にもわたる死闘を繰り広げた緊張感は微塵もなく、ただ、いつもの笹塚の六畳一間のアパートで、訳の分からない真奥の行動に振り回される、芦屋四郎と遊佐恵美そのままの姿があった。

「ま、あれだ、帰ったら、盛大な家族会議を始めなきゃならんてことだ」

「は、はあ……」

「よ、よく分からないけど……」

「つと」

そのとき、その場に全く相応しくない、マナーを弁えない音が鳴り響いた。

小さな小さな、電子音だ。

エミリアとアルシエルは戸惑って周囲を見回すが、真奥はズボンのポケットを探ると、あるものを取り出した。

「携帯？」

エミリアは、真奥の手の中でポロポロになっている携帯電話を認めた。

折り畳み式の旧式の電話は外装が熱で溶け、関節部のパーツが砕けて配線が見えてしまっている。真奥がなんとか開くと、無残にも液晶画面にもひびが入っていた。

それでも、着信していた。液晶の隅にかすかに光が灯り、タガの外れたバイブレーション機構が機械の中でガタガタと鳴っている。

「爆竹とか、熱とか、池に落ちたりとか、あとはさっきそこで事故ってぶついたりとか、もう色々な」

真奥は苦笑してそれをエミリアに見せつける。

「でも大したもんだろ、画面や外装がこんなになっても中身さえ無事ならちゃんと機能するんだぜ。スリムフォンにはできねえ芸当だよ。充電しといて良かった」

真奥は着信ボタンを押して、電話に出る。

液晶が潰れていても、相手は誰だか分かっている。

「一体何をしたこのバカ魔王!!!」

着信一番、全く優しくない怒声が真奥の耳を貫き、ついで傍にいたアラス・ラムスとアシエスもまた、その声が聞こえたかのように身を竦ませた。

「うっせえよ。お前らがチンタラしてつから、アシエスが我慢できなかったんだよ」



「すずねーちゃのこえ？」

アラス・ラムスが目を輝かせる。

もちろん着信しているのは電話通信ではなく、鈴乃すずのからの概念送受イデアリントだった。

「こちらは大変だったのだ!! それより何をした!! 何故雲の離宮の前で義勇軍が将棋倒ししょうぎになっているんだ!!」

「あん? お前ら、天守てんしゅが見えるところにいるのか? 安心しろよ。あちこちぶつけたけどスクーターはちゃんと後で直す……」

「質問に答えろ!! 力が戻ったのか! というかスクーターを壊したのか!! お前人の物を勝手に!! おいまお……」

「はいアシエス」

「え? あ? え? あー、あれ? もしもしスズノ?」

「アシエス!? アシエスか!」

「うーんと、えーっと、あのネ」

アシエスは真っ赤になった目尻めじりと鼻を拭ぬぐって、べろりと舌を出した。

「ネーサマがすぐそばにいるって思ったら、コーフンしちゃって」

「……!!!!」

「スズノ何言ってるか分からないヨー! ん? マオウに変わるノ? ハイ」

「……ってことらしい」

「らしい、ではない!! なんてことをしてくれたんだ!!」

「ああ? なんなんだよ」

真奥が下を見ると、確かに蒼天蓋天守の隣の、小天守と呼ぶべき城郭に、崩れた城の瓦礫が降りかかり、原型が分からない状態になっている。

「そこにはエミリアの父親と統一蒼帝がいるのだぞ!!」

「知ってるよ」

「……んあっ!?」

概念送受を通して唾まで飛んできそうな鈴乃の驚愕の声。

「そこでアシエスを俺からノルドに移し替えたから、俺魔力戻ったんだよ」

「ま、待てっ!? で、ではエミリアは父親と再会できたのか!? 統一蒼帝はどうしたのだ!?」

「ああ、安心しろ。ジジイは後でリヴィクオッコがそちに届けるから。芦屋が全部言い含めてみたいだよ。お前ら、一度は潜入に成功したんだって?」

「何!? アルシエルが? もう訳が分からんぞ!?」

それはそうだろう。

真奥もごくわずかな時間しか言葉を交わしていないせいで詳細は不明だが、傍らに控えるアルシエルがリヴィクオッコに何を言い含めたかは概ね理解している。

アルシエルは、皇都・蒼天蓋からはとんどの八中騎兵を放逐した。

それはひとえに皇帝すら巻き込んだ、首都での義勇軍との大規模な戦闘を発生させないためである。

首都で内戦が勃発すれば当然人間悪魔問わず多くの戦死者が出るし、そもそもガブリエルから聞いた天界の目的は、エミリアがアルシエルと戦い彼を撃破することだ。

ならば無用な犠牲を出す必要はないと、アルシエル自ら、統一蒼帝に掛け合い大規模な兵力の移動をごく短時間で成功させた。

もちろんアルシエルがそれを為し得たのは『演出家』の裏の努力もあったわけだが、真奥はそこまで把握してはいない。

真奥が把握しているのは、アルシエルがそのような行動に出た『理由』である。

悪魔大元帥アルシエルが、天界に踊らされているエフサハーンの騎士団や民達の命が多く失われ、国家が乱れることを好しとしなかった、その理由。

だがそれは、

「……」

「え？ 何？」

真奥の視線に気づいてエミリアが問いかけてくるが、真奥は無言で首を横に振った。

これは、決して『人間』には知られてはならないことだった。

「悪いが説明は後だ。人間の世界の細々としたことはお前に任せる。こっちも忙しくてな。頼むぞ、訂教審議会。ジジイをうまく使えよ。よろしく頼む」

「あ、まお……………」

真奥は煙に巻くために一方的にそう言うのと、携帯電話をポケットにしまって頭上を振り仰ぐ。

「芦屋、あれで、全員か？」

「恐らくは。あの赤鎧の男は、初めて見ますが」

アルシエルも気づき、立ち上がって頷く。

「俺は一幕目は完全に見逃したが、ここから第二幕ってところか？」

「この舞台の狂言回しは、皆辛抱が足りませんので」

アルシエルの視線を追って、エミリアも真奥も、そしてアラス・ラムスもアシエスも厳しい顔つきになる。

風雲吹きさぶ蒼天蓋の空に、三つの影。

そこにいるのは、見たくもないのに、何度も見た顔ばかりだった。

「がういえう……………」

アシエスの髪を撫でるアラス・ラムスの厳しい声が、風に舞った。

※

真奥達を下から見上げるオルバは焦っていた。

こんな事態は、明らかに計画の外にある。

見れば周囲のファイガン義勇軍の八巾騎兵達にも、混乱と戸惑いが蔓延しはじめていた。唐突にやんだ戦闘と、空を貫く紫の光。

そして今の今まで人知を超えた戦いを繰り広げていた勇者と悪魔大元帥が、まるで長い間離れ離れになっていた家族のように一人の人間を囲んでいる姿を見上げ、

もちろん謎の乗り物二台を追跡していった『王の軍勢』達も色々な意味で訳が分からない状態だろう。

魔王サタンが異世界日本での仮の姿のままいる理由は今もって不明だが、とにかくこの状況を『彼ら』が見ていないはずがない。

魔王サタンの妨害は、彼らのシナリオにはなかったはずだ。

だが彼らさえ現れれば、魔王サタンとて敵ではないはず。

オルバがそう思い返したその瞬間、彼方の空に、オルバの求める『彼ら』が現れた。

オルバを制止していた二人のマレブランケも、そして上空のエミリアやアルシエルも、その

接近に気づいてそちらを向く。

そうだ、まだ何も終わってはいない。

「彼ら」とエミリアが協力して倒す『敵』が少し増えただけの話だ。

最悪『彼ら』の力があれば、今空の上にいる者達全てを消滅させて事を収めることも不可能ではない。

「ガブリエ……っ!!」

オルバが、迫りくる『彼ら』に呼びかけようとしたその瞬間だった。

「ご健勝そうで何よりです、オルバ様」

オルバの背に、冷たい殺気が突きつけられた。

その惨憺な女性の声に、聞き覚えがあった。

「異世界日本にて、査として行方知れなかったオルバ様が、まさかエフサハーンにいらっしやるとは、思いもいたしませんでした」

「き、貴様……っ」

「ですが……尊敬するオルバ様との再会した喜びも覆るほど残念なことに、私はオルバ様の罪を問わねばならぬ立場にあります。これまでのオルバ様の暗い策謀にまみれた背教行為の数々を、私は見逃すわけには参りません」

そのときオルバの背後に突如現れたその声の主を、オルバの肩越しに見て、声を上げたのは

ファーフアレロであった。

「ああ、貴様は……では、先ほどの『スクーター』でやってきたのは貴様なのだな？」

東京都庁の屋上にて相見えた、新たな『悪魔大元帥』の姿に、ファーフアレロは深く頷いた。

「クレスティア・ベル……」

うめくオルバと、呼びかけるファーフアレロの声が重なる。

大法神教会訂教審議会筆頭審問官、録月鈴乃ことクレスティア・ベルは、あくまで静かに、言葉を紡ぐ。

「残念ながら、あれは私ではない。私はつい先ほど、西大陸から戻ってきたばかりだ。あれに乗ってきた者は今、あそこにいる」

「何？」

一瞬だけ複雑な胸中が顔に出たベルは上空をちらりと見るが、すぐに表情を正しファーフアレロに告げた。

「マレブランケの頭領よ、今この瞬間だけは、新生魔王軍悪魔大元帥クレスティア・ベルとして貴様に命じる」

「な、何っ!? 新生大元帥っ!? ファーレ!? なんの話だ!？」

どうやら事情を知らないらしいパーバリッティアが頓狂な声を上げるが、ファーフアレロ

がそれを横から制する。

「パーバリツティア殿」

「し、しかし……」

「それで、我らに何を命ずる、新たなる大元帥よ」

「べ、ベル、貴様一体何を……」

うめくオルバを無視して、

「マレブランケの頭領とその一党よ。これから起こる全てのことに、黙って従え。そうすれば魔王サタンは貴様らの独断専行を許し、魔王名代、大尚書カミーオ殿の下への帰参を許すだろう」

「に、人間、貴様、カミーオ殿を知っているのか！」

ベルの言葉にパーバリツティアは驚愕し、ファーファレルロは小さく頷く。

「よからう。我々は、大元帥閣下殿の指示に従う」

マレブランケの頭領は、鋭い眼差しで、彼らの真の主、真奥貞夫こと魔王サタンと対峙している三つの人影を振り仰いだ。

「我らが愚かであったことは今更言い訳のしようもない。だが、結果としてこのオルバと、天界の者どもに煮え湯を飲まされ、多くの同胞を失った。その報いは受けさせねばなるまい」

「話が早くて助かる……オルバ様も、よろしいですね？」



「な……」

身じろぎ一つ許されない殺気。

かつて自分の下で爾々と異端審問の聖務に従事していた、暗い影を負った女の姿は、そこにはなかった。

堂々たる自信と、己を立てる誇りに裏打ちされた気迫と力が、こうして間近にいるからこそ強く感じられる。

「い、一体なんだと言うのだ、貴様、一体何が……」

「今も昔も、私が願うことは変わりませんよオルバ様。全ての民が正義と安寧に満ちる信仰の光の道を歩む世を目指すことだけが、私の望みです。それを目指す心の強さを、私は彼の地にて手に入れただけのこと」

ペルはそう静かに告げると、再び真奥遠と対峙する三人の男を見上げた。

見間違えようのないあれば、自分が今まで信じてきた神への、最後の信仰心を打ち砕いた男、真紅の全身鎧の巨漢、カマエル。

記憶にないアフロの男は、真奥やエミリアの話に聞いた、ラグエルという天使だろう。

最後の一人は、今更確認するまでもない。

大柄な上背と、人を食ったようなにやにや笑い、「I LOVE LA」のTシャツが苛立たしいセフィラ・イエソドの守護天使、ガブリエルだ。

## ※

「よお、三流演出家ども、ようやくお出ましか」

三人の天使を前に、真奥が不敵に笑う。

「……つたく、どこまでもオレらを邪魔するねえ、お前は」

ラグエルの顔は、殆ど憤怒に歪み、

「サタン………サタン!!!」

カマエルに至つてはもう真奥が悪魔型だろうがなんだろうが目にしただけで口からマグマを吐き出しそうなほどの怒りに歪んだ叫びを上げていた。

「今回ばかりはもう容赦しねえぜ。この前お前さんがカマエルを一方的にやつつけたって話は聞いてるけど、ここはエンテ・イスラだ。聖法氣の方が圧倒的に大氣に満ちたこの世界で、魔王、お前がオレらに敵うはずがない」

「ラグエルよ、そういうことは実際に勝ってから言うもんだぜ。ダメだったとき、恥ずかしいぞ？ 俺悪魔の親玉だから、そういうところ遠慮なく全力で突つつくぞ？」

「ダメかどうかは、すぐに分かるさね。見たとこカマエルがやられたっていう妙な力も持っていないようだしね」

真奥は、それ以上取り合わず矛先を変える。

「……で、ガブリエル、どうなんだ、お前もやんのか」

ラグエルの傍らで腕を組みガブリエルに振ると、ガブリエルはやれやれといった様子で頷いた。

「まあ、やるかやらないかつつたら、やるよ」

「そっちは……聞くまでもねえか」

カマエルは、真奥を視界に捉えた瞬間から既に殺気に満ち満ちた目で真奥を睨んでいる。

笹幡北高校で見た三又の槍こそないものの、徒手空拳だけでも大天使の力が圧倒的なのはこれまでのことでよく分かっている。

「オレらは天界の安寧のため、エンテ・イスラから邪悪な悪魔を駆逐しなければならぬ。魔王サタン、お前さんにその邪魔をさせるわけにはいかないんだ」

だが真奥は、そんなラグエルの言葉を一笑に付した。

「やっぱりどこまで行っても三流だな、お前らは。そういうことはちよつと前に、もうここにいる勇者サマがやってるんだよ。規模も役者もずつと小さいことやって、エラそうに『邪悪な悪魔を駆逐』だあ？ ヒット商品の後追いするなら、もうちよつとヒネれこのB級!!」

「相変わらずね」

どこかで聞いたような罵倒に、思わずエミリアの口元が緩む。

「なんとも言え、それがオレらの計画には必要なんだ。それに、例えばエミリアがアンタの側に立ったとして……」

ラグエル、天使とも思えぬどこまでも薄汚く絡みつくような視線に、エミリアは嫌悪感で口を歪める。

「そのあとどうする。オレらに牙を刺くのは結構だが、これだけの人数の前で魔王サタンに味方し、人間世界を裏切った後、どうするつもりだ？」

「……っ」

「父親の麦畑が、オルバや我々に握られていることを忘れるな。今この場でオレらに逆らえば、魔王だけでなく折角再会した父親も消滅することになるぞ」

「ああ？ 父親の麦畑だあ？」

初耳の情報に、真奥は思わずエミリアを振り向く。

エミリアは真奥の目を見ることができず、頬を赤くして顔を伏せた。

真奥にしてみれば、取るに足らないことに固執して自ら足枷をつけたようにしか見えないだろう。

それを馬鹿にされるかと思うと、エミリアの心は頼りなく委む。

「……まあ、うん、いいや」

だが、予想に反して『はっかじゃねーの』というような、真奥の罵倒は届かなかった。

「大事に思うもんは、人それぞれだ。まあ、だからこそ……」

そして真奥はげんなりした顔で、ラグエルに向き直る。

「お前らの三流ぶりが、改めて際立つてもんだな。どこまでマジなんだお前ら。例え手に負えねえ変態でも、自分の力で自分の望みを叶えようとしてる分、サリエルの方がお前らの何百倍もマシだぜ」

真奥は鼻と口を嫌そうに歪めると、自分の掌に拳を打ちつける。

「つまり、だ」

真奥は、吐き捨てるように呟く。

「今ここで、お前らを一瞬でぶっ飛ばしちまえば、どこにあるかは知らねえが、恵美ん家の畑とやらが潰されることは、なくなるわけだな。アシエス。ノルドがあんなになってるけど、お前も戦えるか？」

真奥はアシエスに確認する。

雲の離宮内でリヴィクオツコに守護されたノルドを発見した際に、真奥からノルドへと融合先を戻したアシエスだが、かつてのアシエスの説明を信じるなら、『ヤドリギ』であるノルドが人事不省状態だと彼女の力も落ちるはずだ。

「あふうう……うん、でも、マオウ、あいつらブットパスんでシヨ？ もっといい方法、あるヨ。ここでなら、デキル」

まだ涙と鼻水の収まらないアシエスだったが、真奥の呼びかけに答え、その輪郭が再び紫色に光はじめる。

「ちよつと、そのカタそうなヒト」

「む？ あ!?」

アシエスは、無造作にアルシエルに近寄った。

「マオウ、こつちじゃげろげろだったんだ。多分、元が聖法氣だったからなんだと思うけど、これ、イケそうだからもうネ？」

「なんだ!? こ、こら！ どこに手を入……やめろ！ 恥を知れ!! 何をするっ!!」

アシエスは、真奥に臨みアルシエルの首根っこを掴むと、無理やり引き上げて、大元帥の威厳に相応しい頑丈そうな鎧を、素手で引き剥がしてしまったではないか。

「ああっ！ なんと言うことを！ せ、折角、折角っ……!」

これはアルシエルではない。芦屋四郎の悲鳴だ。

それなりに贅を凝らしたと思われる大元帥の新たな鎧とマントは、イエソドの欠片の少女にまさぐられ引き剥がされ、ポロポロにされていく。

そこにかかった金と、手間と、大元帥の矜持が『芦屋四郎』に悲鳴を上げさせているのだ。

「やっぱりあッター!」

恐怖の悪魔大元帥を半裸にひん剝いたアシエスは、満足げに『それ』をかざす。

それは、イエソドの欠片。

かつてオルバが魔界にもたらし、銚子の海でチリアットの念話晶球から光を発し、パーバリッティアの手の中で、聖法気ではなく魔力に大きく反応した、イエソドの欠片。

「これ見ると、このヒトも行けるかもネ」

「な、なんの話だあッ!?」

悪魔大元帥の肩書きも形なしの哀れを誘う悲鳴を上げるアルシエルを無視し、アシエスは真奥に向けてVサインを見せると、もはやアルシエルから興味を失ったようで、さっと空を蹴って真奥の下へ飛び、

「ちょ……な、何してるのよ!?」

真奥に抱きつくと、額を真奥に近づける。

接近する真奥とアシエスの額にエミリアはこんな場合であるにも関わらず顔が紅潮しかけるが、

「……そうだよな、やっぱ、そう思うよな。俺が自意識過剰とかじゃないよな。勘違いしても仕方ないよな」

真奥の、どこか安心したような声が耳に届いた瞬間、もう視界が紫色の光で満たされていたのだった。

光の中で真奥の額と、アシエスの額が接触する。

「頭じゃないとダメなんだ、やっパ。『知る』ためニハ」  
そして、発動する。

とにかく、結界に包んだ父を取り落さないようにするのが精いっぱいだった。

エミリアがうつすら目を開けたとき、そこには異様な光景が広がっていた。

紫と、黒の奔流。

風とも、光とも、闇とも、砂とも言えるかもしれない。

ただ黒の奔流に、紫の奔流。

皇都の偉大さと美しさを象徴する空を黒と紫の一色に染め上げ、響いた声はただただ重く。

「本当に、俺は部下に恵まれてるぜ」

それでいて、どこまでも軽く。

「芦屋、お前よくこんな欠片を、持ってたな」

「は？」

「長い間魔力に晒されたイエソドの欠片……おかげでアシエスのが俺に馴染みやすくなったみてえだ」

「……ふっへっへっ」



「!?」

黒の奔流と紫の奔流が消えた瞬間、そこに現れたのは相変わらず人の姿のまま、圧倒的な魔力だけをその身から放射する人間型の真奥貞夫。そして、

「カクゴしとけよこのクソ天使どもガ！」

瞳を赤く光らせ、凶悪な表情を浮かべたアシエス・アールであった。

「マオウ！ 殺るヨ！」

「おお」

アシエスは、物騒な一言とともに、歯を剥いて笑い、三度光ると、その全身を一瞬で光の粒子に変えて、真奥を取り込む。

エミリアはその現象に目を見張った。

それはまさしく、エミリアと融合する際に、アラス・ラムスに起きる現象ではないか。

そして次に起こったことは、エミリアだけでなく、アルシエルやマレブランケの三人の頭領にオルバ、さらには地上に控える大勢の八巾騎兵達の度肝を抜いた。

「……進化聖剣・片翼。……？」

エミリアは、自分の目で見ている事態が信じられなかった。

真奥の手に出現したそれは、エミリアが振るい、アラス・ラムスが融合した。進化聖剣・片翼。そのものの姿をしていた。

唯一の進化聖剣・片翼。と違うところは刀身に満ちる力が聖法気ではなく、魔力だということだが、単なる模造品ではないことはその空気からも明らかであった。

「もう一振りの……聖剣って……」

「あしえすは、いもうとなの」

新たな聖剣に誰もが驚く中で、ただ一人、アラス・ラムスだけが、隠しようのない喜びを瞳に浮かべながらそう言った。

「い、妹？ さ、さっきの子、アシエス・アラが？」

「うん。あしえすは、いもうと。いえほどの、もうかたほう」

「片方……」

エミリアは、アラス・ラムスの言葉に愕然とする。

今まで考えたこともなかった、進化聖剣・片翼。という聖剣の銘。

エミリアは、注ぎ込まれる聖法気の量でその外見が変わることを『進化』なのだばかり考えていた。

『片翼』も、ただそういう名のものなのだろうと思っていた。  
だが。

翼は一つでは、機能しない。

大空に羽ばたくには、必ず対になる翼が必要だ。

ならば、どこにもう一つの『片翼』が、当然あるはずなのだ。

「で、でも『聖剣』でしょ？ なぜ魔王が……あの『聖剣』からは魔力が……」

「イエソドの欠片は、決して聖性にのみ属するものではない、らしい」

エミリアの疑問に答えたのは、破り飛ばされた鎧や衣類を魔力で必死に補修しているアルシエルだった。

「セフィラという存在について、我々は大きな認識違いをしていたようだ。貴様とアラス・ラムスの『それ』も、魔王様とあの少女の『あれ』も、決して聖なる剣などではない……ここにあったボタンが一つなくなっている……」

「いえほどは、いのちといのち、ここるところをむすぶえだ。わたし、ずっとあしえすといっしょだった」

「心を結ぶ枝……？」

エミリアが『娘』の言葉を飲み込めないうちに、

「ばば、がんばって!!」

アラス・ラムスの声に押されるようにして、サタンの戦いは口火を切った。

真奥は鼻と口を歪めると、アシエスの剣を無造作に振る。

「う!?」

「……っ」

「わお」

それだけで、三人の天使が思わず身構えた。

もう一振りの聖剣がただ振りかぶられた。

それが、天使達をひるませたのだ。

それほど力。エンテ・イスラ征服の最盛期を思わせる真奥の底知れぬ魔力こそは、先ほどまで涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしている、セフィラの子、アシエスと、かつてオルバによって魔界に持ち込まれ、バーバリッティアの手を経てアルシエルに渡った欠片によるものであった。

「まあ、とにかくだ」

真奥は、吐き捨てるように呟く。

「今はお前らをまとめてぶっ飛ばす。そうすりや地上の戦争は人間同士の話し合いで終わるし、どっかにある恵美ん家の畑が潰されることも、なくなる。後のことは後だ」

「何……うぐおっ!!!」

その場の誰もが、真奥の言葉を最後まで聞くことなく、気づけばラグエルはただただ重い衝撃に、吹き飛ばされていた。

誰もが、真奥の動きを捉えられなかった。

ガブリエルとカマエルですら、今まで隣にいたラグエルが、一瞬で真奥に置き換わったよう

にしか見えなかった。

今の速度が音を越えているのは、真奥の動きについていけなかった音が、衝撃波を周囲にまき散らすことから分かる。

エミリアはノルドとアラス・ラムスを法術結界で庇い、アルシエルも再び着衣を乱されてはかなわないと身を守ることに専念する。

ラグエルが吹き飛ばされたのを見て、カマエルが黒鉄の槍を、ガブリエルがデュランダルを反射的に顕現させるが、まったくもって無意味なことだった。

「サタン……今日こそ殺す……」

「ちょ、カマエル？ 冷静にならないと今はヤバそうなんだけど？」

ガブリエルの表情には珍しく大いに動揺が見られたが、黒鉄の槍の先端から刃のような殺気を放つカマエルは、フルフェイスの兜の奥の表情が察せられるほどの憎悪を漏らす。

「サタン殺すサタン殺すサタン殺すサタン殺すサタン殺すサタン殺す殺す殺す殺す」

「……だから、俺はお前には会ったことねえってのに」

「サタンンンンンン!! おおおおっ!!!」

真空を作り出すほどの速度で繰り出されたカマエルの槍の穂先を、真奥はまるで竹刀か何かのように、聖剣で軽く弾いた。

「ぬうっ!？」

「おら」

その隙を見逃さず、真奥は右のカマエルに水平に斬撃を繰り出し、左のガブリエルに向かって漆黒のエネルギー塊を叩きつける。

「サタアアアアンン……」

「ごあっ！」

二人の大天使は、その速度についていくことができず、カマエルの槍は剣閃のパワーを受けきれずに中心から真つ二つに折れ、ガブリエルもまた衝撃を受けきれずにラグエルのように激しく飛ばされる。

三人の天使を三方向に吹き飛ばした真奥は、天の紅い月を宿したような怒りに燃える瞳で、無様な者達を睥睨した。

「俺は怒ってんだ。俺の仲間を、部下を、民を、支配する予定の人間達を、散々に振り回していたぶってくれたお前らにな。今日という今日は、もう容赦しねえ！」

「ちょ、ちよつと！」

エミリアは慌てて父の結界を強化するが、それでも背後に庇っていなければ心配になるほどに、真奥の動きはめまぐるしく、エミリアの目では捉えられない。

ガブリエルも、エミリアの知らない全身鎧の天使も、人知を超えた力で戦っているのは間違いないのだが、日本であれば真奥やエミリアを翻弄した大天使が、悪魔の姿ですらない真奥

貞夫一人に完全に振り回されてしまっている。

新たなる。進化聖剣・片翼<sup>ハート</sup>は、相変わらず刀身が欠けたままのデュランダルを柄元<sup>ツカもと</sup>から一刀で断ち割り、真奥の拳は、新しいカマエルの鎧をまるで紙のように引き裂いてゆく。

なんとか最初の衝撃から立ち戻ってきたラグエルなど、真奥は手を使うどころか目で気合を発しただけで、忌々しいアフロを一部ごっそり消滅させてしまった。

「ち、ちよつとデタラメすぎんねこれ……うわああああっ!!!」

アシエス・ペターハーフの切っ先から放射された赤色の光線をもちろに肩に食らってガブリエルはもんどりうち、

「サタン、サタンンン!!! おのれええええええええ!!!」

鎧の胸板を一撃で破壊されたカマエルは激痛にうめき、

「な、なんなんだ、お前本当に、ガブさんにいいようにされてたサタンなのか!」

アフロがパズルピースの凹<sup>くぼ</sup>パーツのようになってしまったラグエルに至っては、かつて本人がそう言っていたように戦闘には不向きなのか、真奥に近づくことすらできない。

「ああ、娘が見てる前だからな、お父さんいつもより頑張っちゃうぜ、おらよ!」

「うううううううっ!!!」

真奥はおちよくるように、明らかに届かない距離からラグエルに向かって。進化聖剣・片翼を一振りする。

だが、見えない刃が軌道に合わせてラグエルを切り裂いたかのように、明らかに遠すぎる距離から真奥の力がラグエルの全身に無数の浅い傷を負わせるではないか。

## ※

そしてその戦いを、オルバやバーバリッティアにファーフアレロ、そして地上の義勇軍達もまた、呆然と見上げていた。

頭上で繰り広げられている事態は、完全に彼らの理解を越えていた。

「ま、まさか大天使達が、あのような……」

この事態に一番驚いているのは、オルバであろう。

彼はいざとなれば、大天使達が圧倒的な力でこの場を収めると信じて疑わなかった。

彼らには実際それだけの力があり、オルバの知る最盛期の魔王サタンすら、やっとエミリアと互角の力しかなかったはずだ。

「……さて、そろそろかな」

ただ一人冷静なのは、もちろん真奥の「仲間」であるクレスティア・ベルだ。

「べ、ベル、一体どうするつもりだ。彼らは本物の天使だ、このまま魔王サタンに与し、エミリアともども天も、エンテ・イスラも裏切るつもりか」



泰然<sup>たいぜん</sup>としているベルに向かってオルバは口角泡を飛ばすが、もはやベルは、オルバが語るような信仰の次元に、自分の身を置いていなかった。

「まさかオルバ様の口からそのような言葉を聞くとは」

苦笑を浮かべたベルは、オルバの背から離れると、ゆつくりと義勇軍に向き直る。

「本物の天使」など、この世にいるはずがないでしょう」

「……な……っ……!?」

およそ大法神教会<sup>だいはうしん</sup>の聖職者と思えぬその言葉に、背教行為すら躊躇<sup>ためら</sup>わないはずのオルバは呆<sup>あつ</sup>気にとられてしまう。

この女は何を言っているのだ。今日の前にある存在が、目に入っていないのか？

オルバは上空で戦う三人の天使をただで振り仰<sup>あが</sup>ぐが、ベルは小さく首を横に振る。

「彼らは『ガブリエル、カマエル、ラグエルと名乗っているだけの、ただの人間』です」

そしてそう断じた。

「翼を生やしてただの強い力の持ち主が天使と名乗れるなら、私も東急ハンドで仮装用の翼を購入して装着し、天使と名乗って見せましょう。オルバ様ともあろう方が、聖典に謳<sup>うた</sup>われる

『天使』がああの人達であるなどと本気で思いでいらしたのですか」

オルバを説諭<sup>せつご</sup>するベルの顔には、嘲笑も、呆<sup>あ</sup>れもなかった。

ただ、自分の信<sup>しん</sup>ずるところを否定された一人の老人に信仰を問う、一聖職者の顔であった。

「人々が信仰を寄せる『天使』とは、教義と聖典から人々が学び心に刻んだ、善性と規範の象徴のことで、どこか遠い所からやってきた、強大な力の持ち主のことではありません。いつから道を踏み誤られたのか知る由もありませんが、かつて一度は敬愛したオルバ様が、そのようなことも分からなくなってしまうかと思うと、私は悲しい」

一瞬だけ悲しげにオルバを見たベルは、すぐに凜とした表情を取り戻し、  
「……義勇の旗の下に集いし八巾の騎士達よ、私の声を聴いてほしい!!」

上空の戦いを戸惑いながら眺めている騎士達に呼びかけた。

「諸君らの戸惑いは分かる。だが、今諸君らの目で見たものは、全てそのまま真実だ。今まさに、聖剣を携えた二人の『勇者』が、諸君らの愛する偉大なる帝国、エフサハーンを再び恐怖に陥れた『悪魔』に鉄槌を下しているのだ!」

「な、何!？」

「悪魔だって?」

「せ、聖剣の勇者?」

「エミリア様は、しかし……」

「形は聖剣だがあの力は……?」

「悪魔は、まさしくあのアルシエルだろう!」

ベルの声を聴いた騎士達の間からは、当然のように新たな情報を疑う声の方が多く聞かれ、

純粋な気持ちで打倒アルシエルのために集まった騎士団らがその言葉を素直に信じないのは当然だった。

「ベル、貴様何を……」

オルバはオルバで、ベルのあまりに荒唐無稽かつ無理やりの軌道修正の演説に呆れた顔をする。

一体どういうつもりか知らないが、その程度のことを一人の人間が叫んだところで、誰が信じると言うのか。

「確かに、彼の者がアルシエルであることは間違いない！だが、この度のエフサハーンの国難を招いたのは、アルシエルでも、マレブランケでもない。私は今、そのことを諸君らに証明しよう!!ここにゐる勇者エミリアの仲間、オルバ・メイヤー殿と……」

「な、何い!？」

突然の指名に、オルバは慌てふためくが、それでもベルの言葉は止まらない。

「アルバート・エンデ殿、そして……マレブランケ頭領格、リヴィクオツコ」

「なっ!!」

ベルが指さすその先には、いくつもの人影があった。

そこにかつての仲間であるアルバート、そして隻腕のマレブランケの顔を目にしたオルバは再び驚くが、三度目の驚きは、アルバートのすぐ傍らに、法術結界に守られて立っていた。

小柄なベルよりもずっと小さく、曲がった背はただでさえ小柄な身長をさらに小さく見せる。贅を凝らした豪華な衣類がかえって老いさらばえた身を貧相に見せ、一見してなんの威厳の欠片もない。

だが、それでも。

「偉大なる帝国の主、統一蒼帝陛下が、証を立ててくださろう」

ベルの静かな言葉に、その場の全員が打たれた。

「へ、陛下……!?」

最初にアルシエルが現れたときよりも一層慄くような声が、一つ、生まれ、そして、今や空を照らす朝日が、その姿をさつと照らし出したとき。

「皇帝陛下……!!」

「蒼の帝……!!」

「皇帝陛下だ!!」

「帝が!!」

「陛下!!」

「き、跪拝、跪拝せよつ!!!!」

自分の足で立つことすらおぼつかないその老人の出現で、義勇軍の士気は粉々に打ち砕かれた。

騎兵達は武器を捨て、拳と掌を胸の前で合わせ、次々に跪いて老人に向かい頭を垂れる。

アルシエルの命によってその身柄を真奥が現れるまでリヴィクオッコに守られ、真奥の命によってリヴィクオッコにより送り届けられ、アルバートの結界に支えられて立つ吹けば飛びそうな小さな小さな老人。

彼こそ、広大な東大陸の大帝国エフサハーン全土を統べる皇帝、統一蒼帝その人であった。

賊に埋まり、生気の失せた乾いた肌の下にある濁った瞳をちらりと空に上げた老皇帝は、掠れた溜息をつくと、

「……誰ぞ、ある」

うめくようにそう言った。

その声に弾かれるように顔を上げたのは、義勇軍の八巾騎兵の中で最も位の高い、正翠巾の將軍の一人であった。

「正翠の將よ……彼の……女性の申し述べること……全て、真実で、ある」

「ははあっ!!」

「天使を……名乗る、者どもの、言に乗り、魔なるマレ、ブランケを、寄せたは我ぞ……」

「ははあっ!!」

正翠巾の將軍は、冷や汗を流しながら、統一蒼帝の言葉一言一句を漏らすまいと耳を澄ませている。

その言葉の示すものが、善か、悪かは問題ではない。

帝の言葉は全てが真実であり、その意を汲むことこそ、エフサハーン八巾騎兵の正義なのである。

「全ては……我が……大エフサハーンを、強きに、盛り立てんと、するため、そなたら……民を強く、世界に知らしめんが、ため……」

「恐れ多きお言葉にございます!!」

「だが……所詮は……西の蛮族の、下世話な神話の、主を騙る、俗物ども……我を廃し、蒼き天蓋を我がもの顔で歩き……我が民を、悪魔と人の争いに巻き込み、傷つけんとした……」

統一蒼帝の、老いさらばえた呼気に紛れた言葉には、しかし老いてなおも消えぬ皇帝としての野心と怒りと、欲望が満ち満ちていた。

「アル……シエルは……むしろ、我が身を、雲の離宮に、守り……我が忠勇たる、八巾の騎士らに、同士討ちの憂き目を見せぬよう、計らった。我が帝国の人民を、救い、我を西の、心ある勇士どもと引き合わせた……策士よ」

その言葉に、さしもの八巾にも動揺が広がった。

エフサハーンに於いては語る言葉全てが真実である統一蒼帝自ら言ったのだ。

アルシエルこそがエフサハーンの国と民を守った、と。

「……我が寄せたる、魔が、初めから、アルシエルであつたなら……我が威光は……今こそ、

四海五土にあまねく渡ったやも……しれぬ」

恐ろしいことに、統一蒼帝は、天使達が引き入れた最初の将がパーバリッティアではなくアルシエルであつたなら、彼の力でエフサハーンは真実他大陸と戦端を開き、世界を征服したかもしれないと告白したのだ。

「我が……忠勇たる……八巾の……猛者よ。敵の姿を過つな……聖剣の下に、集え……我がエフサハーンの威光を、天に、示せ」

全ての兵に、この囁かれた声が聞こえたはずがない。

それなのに、全ての義勇兵が、改めて姿勢を正し、統一蒼帝に臨拝する。

「……偉大なる統一蒼帝陛下の御言葉、大法神教会訂教審議会筆頭審問官クレスティア・ペル、並びに大神官オルバ、謹んで、頂戴、仕りました」

「こ、こらベル、貴様……っ!？」

「よーお、オルバ、元氣そうじゃねえかあ、久しぶりだなあー!」

勝手に肩書を利用されそうになって焦るオルバだったが、帝の玉体を正翠巾の將軍に預けたアルパートが、いつの間にか親友のように、その太い腕をがっちりオルバの肩に回しているではないか。

「同じ勇者の仲間として、ここは一緒に頑張ろうじゃねえか。なあ……」

どこまでも底抜けに明るい笑顔を浮かべるアルパートだが、オルバの耳に顔を寄せると、誰

にも聞こえぬよう低い声で呟いた。

「お前さんの野望がなんだかは知らねえが、ここでゲームセットだ。せめて最後は人間らしく死ね」

「あ、アルバー……」

「さて、ベル審問官！ 教えてくれ、今俺達が倒すべきは……エンテ・イスラの脅威となる本当の敵は、誰なんだ!?」

もがくオルバをその屈強な腕の力で抑えながら、アルバートは大声でベルに尋ねる。

ベルは一つ頷くと、すつとその指を、空に掲げた。

「訂教審議会筆頭審問官として、今、審判を下す。我々人間の真の敵は、聖剣を携えし者の敵。天使を名乗る三人の『背教者』達だ！」

「く……は……はは、はははは」

真奥に胸倉を掴まれたまま、だらりと両手足を脱力させたガブリエルは、苦しげに笑った。

「ま、まったく、ひどいなあ……い、一応君に色々教えてあげたんだから、ちよつとは手加減してくれると思ったのに……」

「ムシのいいこと言っただけじゃねえよ。それでも手加減してやってんだ。今回のことだけじゃ



なく、今までお前には散々コケにされた恨みがあったからな」

「ああ……そっか、納得……はは」

「とりあえず、殺しはしねえ。お前は日本に連れ帰って、知ってること洗いざらい吐かせてやる」

「お、お手柔らかにね……」

「あいつにもお願いしとけよ。俺以上に情け容赦ない奴だからな」

「あー……性格キツそうだもんねえ」

真奥とガブリエルが揃って見ているのは、当然というか、エミリアだった。

当のエミリアはこちらの会話が聞こえる位置にはいないが、悪口を言われていることだけは分かるのか、眉根を寄せてこちらを睨み返していた。

「う……」

「サ……タ……」

そのとき、真奥がガブリエルを締め上げているのとは反対側の手で、襟首を纏めてつまみ上げられているラグエルとカマエルが、うめき声を上げた。

終わってみれば、真奥の一方的な勝利であった。

当初はラグエル達が画策していた通り、もつと苦戦が予想されていたのだ。

お互いが本領を発揮できるエンテ・イスラという場で、まさかセフィロトの守護天使がこの

程度の力しか持たないのかと、真奥自身拍子抜けしたほどだ。

「今これだけは聞いておくか。一体このカマエルって奴は、結局俺になんの恨みがあるんだよ。身に覚えなんかないし、正直気持ち悪いってレベルじゃねえぞ」

「……うん、それ、話すと長くなるよ。多分、君が僕に吐かせたいことのメインに関わってく  
る話」

「じゃあ帰ってからでもいいや。つか、お前はいいとして、こっちの二人どうすっかな。力を取り戻させないだけなら……って、そういえば……おい、イルオーンはどうした。確かイルオーンは、ゲブラーだからカマエルの担当なんだろう？」

「……あー」

ガブリエルも、真奥に言われて初めて思い立ったように頷いた。

「そうだよ……カマエル、何やってんの、イルオーンがきちんと働けば、こんなに一方的にやられてないんじゃない？」

「え」

ガブリエルの言葉に、真奥は軽く驚く。

「じゃ、じゃあもしかして、カマエルは恵美とアラス・ラムスみたいに、イルオーンと融合してんのか？」

「いや……融合とは違うはずだけど……なんで、イルオーンは……」

「マオウ、今、イルオーンって言っタ!?」

そのとき唐突に、サタンの脳内にアシエスの甲高い叫びがこだまする。

「お、お前いきなり叫ぶな。あ、ああ言ったよ。やっぱ知ってるのか? イルオーンのこと」

「もちろんダヨ! でも、そのカマエルって奴からはイルオーンの気配は感じないヨ。第一そいつ、私達のヤドリギにはなれない奴だヨ」

「なんだって!?」

真奥はアシエスの言葉に目を見開く。

カマエルは、ヤドリギになれない。つまり、セフィラの子との融合はできない?

「……おい、うちのイエソドが、イルオーンはいないつつつてるぞ」

「え、そんなバカな……だってここに来る前は僕らと一緒に……カマエル、君、ゲブラーを支配下に置いたって……」

「支配下あ!? バカ言ってるんじゃないヨ! 私達は何者にも縛られないンダ! 全てのセフィラは、「ダアト」の完成のタメに動いて、「ダアト」の完成で解き放たれル! ヤドリギも一時のことにしか過ぎナイ! 私たちは世界組成の宝珠! 誰の支配も受けはしナイ!」

「お、おい待てアシエス、お前また重要そうなことさりと……」

「マオウ! もうこんな奴らのことほっといて、ネーサマとネーサマのヤドリギと一緒にイルオーンを探しに行こう! そんなで、こいつらの家に乗り込んで滅茶苦茶に暴れてやろう! ハ

ヤク！ さあハヤク！ とつてもハヤク！ どんどんハヤク！」

「だあああ、落ち着けて、色々整理しなきゃいけないことあんだから、一回引き上げ……」

「魔王っ！ 上っ!!」

「……させろってあああ!」

エミリアの鋭い声すどが飛んだときには、既にその現象は起きていた。

「うげっ、こ、これは！」

真奥まおくに胸倉むねぐらを掘ほみ上げられたままのガブリエルは「ソレ」を見上げて恐怖のうめき声を上げる。

太陽が照らす美しい蒼穹そうきゆうが引き裂かれるように、空間にひずみが生じ、暗い亀裂かみれつが開いていく。

それだけでも異常事態であることは間違いないが、それがなんの力も感じさせず、なんの音もせず、エミリアが警告を発する今の今まで誰もその現象に気がつかないことこそ、何より異常だった。

「ま、魔王、君、さっさと逃げた方がいいよ、これ、マジでヤバイ！」

「ああん？」

今まで見たこともないほど、ガブリエルは慌わてていた。

一瞬いっしゆんいつもの調子づいた演技ではないかと疑った真奥まおくだが、その瞳ひとみに浮かんでいる感情があ

まりにガブリエルに似つかわしくない。

間違はなく、ガブリエルは恐れ慄<sub>おそ</sub>いていた。

「こ、これはゲートだ！ でも、ただのゲートじゃない。この場の全ての……うわわわ！」

「う、うおっ!?」

「きやあああつ！」

「な、何事だっ?！」

まるで掃除機で部屋の塵芥<sub>じんがい</sub>を全て吸い上げるかのように、突如<sub>とつじょ</sub>夜空に開いたゲートは、その下にいる全ての物を吸い上げはじめではないか。

「ぐ、な、なんだこれは！」

地上にいるベルも、そのゲートの作用に吸い上げられぬよう必死で地面に伏して耐えているが、ちよつとでも気を抜くとすぐに吸い上げられそうだ。

それはアルバートやオルバも同様で、八巾<sub>はっしん</sub>騎兵<sub>きへい</sub>達は統一<sub>いついっそうてい</sub>蒼帝<sub>そうてい</sub>を守るべく、人間カマクラを作り上げてお互いを支えてるが、それでもちよつと油断すれば、すぐに足元<sub>あしもと</sub>を拘<sub>か</sub>われてしまいそうになっている。

「う、あ、ま、マズいつ……」

だが、すぐそばに摺<sub>つ</sub>まる場所<sub>ところ</sub>がなかったのが災<sub>わざわ</sub>いし、ベルの軽い体が一瞬<sub>いつしゅん</sub>、地面から離れそうになる。

必死に飛翔して抵抗しようともがくが、なぜか全身に力が入らない。

「あ……」

そのまま木の葉のように巻き上げられそうになったベルを、

「何ボサっとしてやがる」

空中で受け止めた者がいた。

ベルは自分の体を支える大きな存在を振り返り、目を見開く。

「り、リヴィクオッコ!?」

「日本であんなだけ根性見せたくせに、この程度のことであんなにわたくしやねえよ」

ベルを救ったのは、かつて死闘を演じたマレブランケ、リヴィクオッコではないか。

「き、貴様は……」

「俺は、吸い上げられていない」

「何!？」

「フアーレも、バーバリッティアもだ。アルシエル様も、魔王様も……どうやらこのゲート、

強い聖法氣のみを吸い上げてるようだぜ……」

「な」

リヴィクオッコの言葉に周囲を見回してみれば、アルバートとオルバは吸い上げられぬように必死で耐えているが、八巾騎兵達はそれほど強い力を受けているようには見えない。

リヴィクオツコの肩越しに遥か上空に目を凝らすと、

「うおおおおおおおおいおいおいなんだ畜生!!!」

両手に抱えた天使が強力に吸い上げられて、一緒にそのまま体を持っていかれそうになっている真奥の姿があった。

「うげがげがごこげ苦しい苦しい死んじやう死んじやう!!」

ガブリエルですらこの吸引には抗えないらしく、自分の体を引っ張るゲートとそうさせまいとする真奥の勢力に阻まれ、思い切り胸倉と首が締まってしまっている。

「いやあああああっ!!」

「え、恵美っ!!」

見ればエミリアも、このゲートの吸引をもろにその身に受けているらしい。

「ぐ、た、耐えろエミリア! 貴様それでも勇者か!!」

「勇者とかそういうのもう関係ないわよこれええ!!!」

「あ、暴れるな! 爪で切り裂くぞ!!」

「わ、私はいいからお父さんを……」

「ええい! なんで私がエミリアの父親なんぞを守らねばならんのだ!!」

エミリアはアルシエルとファーファレルロの二人がかりで支えられているが、やはりベルやガブリエルと同じように体の自由が効かないらしい。

一方、魔法術結界に包まれたノルドは、大きな力でこそないにしろ、魔法術結界のせいで吸引されてしまっているらしく、エミリアに代わってバーバリツティアが押さえている。

「おいこらガブリエル！　なんだこれ！　何が起こってる！　……って、あつ！！！！」

その瞬間、二人の天使の襟首を掴んでいた真奥の左手が、暴風に煽られて滑った。

「こ、この待てっ！！　畜生っ！！！！」

その一瞬の油断で、気絶したラグエルとカマエルの体が天高く吸い上げられ、空を引き裂いたゲートの中に消えてゆく。

「この……おい、ガブリエルっ！！」

真奥はなんとかガブリエルの服を手繰り寄せる。このままでは手を離してしまうと判断し、首と脇を後ろから羽交い絞めにして、全力で引き下ろしにかかった。

「あぐえええっぐー！」

「どういうことだ！　魔法術が強い奴から順に吸い込まれてるぞ！！」

「ぐる……じい……し、死ぬ……」

「おいっ！　ガブリ……」

「マオウっ！！　あれッ！！」

アシエスの、過去どんな瞬間よりも緊迫し、それでいて憎しみのこもった声が響いたのは、そのときだった。



真奥はその声の迫力に、ガブリエルを必死に引き留めている途中であるにも関わらず、謎のゲートを振り仰ぎ、そして見た。

「あれは……」

ごく、小柄な影が、ゲートの中に見えた。

それは人の形をしていた。

上背はそう大きくない。せいぜい漆原やサリエル程度の背丈だ。

だが、妙にずんぐりした印象を受けるのは、球体のような頭部と、ぬいぐるみのように膨らんだ全身の輪郭のせいだろう。

その独特なシルエットを、真奥はつい最近、テレビで見たことがあった。

それこそ、日本でなら子供だって知っている。あの服がなんと呼ばれるものか。

だがだからこそ、こんな場所、こんな状況で見えるはずのない服であった。

「……………宇宙、服？」

ゲートの中に垣間見えた「人」が纏っているのは、地球で宇宙飛行士と呼ばれる者だけが着用する、宇宙服としか呼べない形状をしていた。

光の通らぬ球状のバイザーの奥にあるはずの「顔」は、真奥の位置からは全く見えない。

だが、なぜか、宇宙服の人間が、何かを言ったのが分かった。

その瞬間、

「ああああああああああアアアアアア!!」

真奥の中にいるアシエスが、苦悶の悲鳴を上げはじめたのだ。

「あ、アシエス、どうした!」

「うぐ……ぐ、あがああアアアア!!」

だが、アシエスは真奥の呼びかけに答えない。ただひたすら苦鳴を上げ続けている。

「どうしたの、アラス・ラムス! 大丈夫!!」

そのとき、聞きたくないエミリアの悲鳴が、真奥の耳に飛び込んできた。

アシエスに異常が発生した瞬間、もしかしてと思ったことは事実だ。

だが、

「恵美! どうした! まさかアラス・ラムスが……」

「わ、分からないっ! 急に苦しみ出して……」

「く、くそ……なんだってんだ!? おいアシエス! しっかりしろ!!」

「ま……マオウ……い、痛い……苦しイ……ああアアアア!!」

「アシエス、あし……う!?」

「アラス・ラムス! アラス・ラムスっ!!」

真奥とエミリアの体に、同時に異常が起こった。

二人の体から、紫色の光の粒子が漏れ出して、それがゲートに吸い上げられているのだ。

「まー！ いたい！ いたいよおっ!!!」

「マオウ……体……体ガッ！ うわああああアア!!」

「アラス・ラムス！」

「アシエス！ くそ、くそっ！ おいガブリエル！ なんなんだこりゃ!! あいつは一体何者なんだ!」

「……く、首……しまる……これ……決まって……僕ら、大天使は……誰の命を……受けてると……」

「誰の命……っ!」

何故、今まで考えなかったのだろう。

今まで真奥達の前に現れた天使を名乗る者達は、天兵連隊を除けば皆、お互いを同格のものとして接していた。

サリエル然り、セフィラの守護天使であるガブリエルもカマエルも、審判の天使ラグエルも、御大層な役割と肩書と力を持ちながら、それぞれが同格の天使だった。

だが、彼らは常々言っていたではないか。

天界の命。己の任務を、語っていたではないか。

天使たる彼らにその命を、任務を与えられるのは誰だ。

そんな存在は、一つしかない。

「そんなものは『この世』に『存在』してはならないんですのよ」

真奥がその思いに至った瞬間に、蒼天蓋上空に開いたゲートの吸引力が不意に消えた。エミリアやガブリエルを吸い上げようとする力は消え、唐突に重力の支配が戻る。

「あぎゅっ!!」

その衝撃でガブリエルの首は完全に締め、遂に白目を剥いて氣を失ってしまった。だが、真奥はそんなことに構っていらなかった。

「あ、アシエス!? 大丈夫か!」

「アラス・ラムス! しっかりして!」

吸い上げる力が消えた途端に、真奥とエミリアからの光の粒子の流出が止まった。

それと同時に、アシエスを苛む苦悶も収まったようだ。

アラス・ラムスも同様らしく、エミリアが自分の胸を抱きしめて必死で声をかけているのが見えた。

そのことに安堵しながらも、再びゲートを振り仰いだ真奥は、これまでの衝撃の事態の数々

も木端微塵に吹き飛んでしまうほどの衝撃に襲われることになる。

「うおわあああああああ!」

「な、なんだああああ!!」

「ぎ、ぎええええええええ!!」

アルシエルとファーフアレルロ、そしてパーバリツティアが、真奥と同じそれを視認した途端、この世のものとも思えぬ叫び声を上げ、

「な、な、な、なんだありやああああ!!」

「ど、どうしたリヴィクオツコ!？」

地上でも、リヴィクオツコが恐怖に顔をひきつらせ、彼に助けられたベルが驚き慌てている。

そして真奥は、恐らくこの場の誰よりも自分の見ているものが信じられず、叫び出したい衝動にかられていた。

それくらい、有り得ない事態であつた。

ある意味、宇宙服を纏った謎の存在よりも、もつともつと謎めいていて、もつともつと恐ろしいものが、顕現けんげんしているではないか。

ゲートの吸引で巻き起こった風すら大草原のそよ風に思わせる、黄金色のクジャクの羽が突き立った鍔広の帽子は、目に痛いほどの蛍光色の真紫。

その縁からこぼれ出る貴族のような卷髪はどこまでも優美でありながら、帽子と同じ色の煌





と、そこまで言って、志波はエミリアを見た。

エミリアも一度だけ直接言葉を交わした志波のことを思い出したようで、全身に疑問符が駆け巡った表情を浮かべている。

「そちらのお嬢さんと、真奥さん達をヤドリギたらしめている子達を放っておけないと思いますして」

「や、ヤドリギ……って」

アシエスの口から何度か聞いたその言葉を、何故志波が知っているのだろう。

「遠い遠い私の妹、弟達が苦しんでいるのを放っておけるほど、私も薄情にはなりきれませんでしたの」

そして志波は、見る者を圧倒する質量と圧力を伴った微笑みを浮かべると、遥か空のゲートに向き直り、

「……今日のところはお引き取りくださいな。私と事を構えることが得策でないことくらい、お分かりになるでしょう？」

と、ゲートの中の宇宙飛行士に呼びかけた。

その呼びかけが聞こえたのかどうかは分からない。

だがゲートの中の宇宙飛行士は、ついと踵を返すとこちらに背を向け、そして、

「あ……」



その場の全員が見ている前で、現れたときと同じくなんの前触れも余韻すらもなく、ゲート  
を消し去った。

後に残るのは空と、二つの月と、戦闘と光の柱の余波で崩壊寸前の蒼天蓋天守と雲の離宮。  
そして、

「終わった……の？」

エミリアの眩きと同時に、呪縛から解かれたようにゆっくりと立ち上がる、悪魔と、天使と、  
人間達。

「いいえ、何も終わってなどおりませんわ」

超然と空に佇む志波美輝は、エミリアの言葉を明確に否定した。

「それどころか、まだ始まってもないと申し上げるべきでしょうね。佐々木千穂さんにお話  
を伺ったときにはこれほど混乱しているとは思いませんでしたが、どうやらかなり  
こちらの世界の症状は重篤なようです……」

「……大家さん、あんた、一体……」

「ノン、ミキティと」

「は、はあ……」

カマエルの鎧よりもずっと鮮やかな真紅のルージュから艶めいた吐息とともに囁かれては、  
真奥も顔かざるを得ない。

「真奥さん、それに芦屋さん、鎌月さん、遊佐さんも、まずは日本にお戻りなさいませ。それらの素敵な青年とご一緒に。それから、今後の話をいたしましょう」

志波の言う『素敵な青年』とは、激闘の末にゲートに吸い上げられそうになったせいで真奥に首を絞められて気絶してしまったガブリエルのことだ。

日本に帰ることはともかく、一緒に連行されたガブリエルが世にも凄惨な恐怖を味わうことがなぜか予見できてしまい、つい同情の念が湧いてしまう。

「で、でもちよつと待ってください！　こ、この状況を放置して戻るわけには……！」

エミリアは、慌てて志波に言う。

エフサハーンとマレブランケを陰で操っていた天使達は倒され、謎のゲートも収まったが、それでもエフサハーンが見舞われた混乱が解消したわけではない。

未だ多くのマレブランケは健在であり、混乱した八巾の騎兵達もアルシエルが日本に戻るのをただ黙って見てはいまい。

裏で天使や悪魔が糸を引いていたとはいえ、エフサハーンは現在エンテ・イスラ全土に向けて宣戦布告の真つ最中であることにも変わりはない。

「さあ……それは私には関係のないことですし」

「で、でも……」

エミリアは地上からこちらを見上げる多くの目を見下ろす。

そのどれもが、これから一体自分達はどうすれば良いのか、という不安に揺れていた。

戦いを続けるべきなのか、戦う相手は誰なのか。

こんなとき、かつてのエミリアであれば、勇者として人々を鼓舞する言葉の一つも出たかもしれない。

だがエミリアは、既に自分が己のためにしか戦えない、利己的な人間であったことを強く実感してしまっていて、そのような心境ではどのような言葉を発しても、これだけ大勢の者達に真意が伝わるとはとても思えなかった。

聖剣を携えているとはいえ、明らかに魔力を放っている真奥が何かを言うなど論外である。と、そのときだった。

「あ……っ」

「む！」

地上の、ベルのすぐ傍に、小さな空間のひずみが生まれたではないか。

規模は小さいが明らかにゲート出現の兆候であり、先ほどの現象を体験した面々は思わず身構えるが、

「よつと……うわ、随分無茶苦茶になってますねー」

「これは、予想だになかったことになっているな」

ゲートから飛び出してきた二人の人間は、エミリアのよく知った顔だった。

「え、エメ!?」

一人は、セント・アイレの司教座で背教審理の真つ最中だったはずの、エメラダ・エトウ・ヴァであり、そしてもう一人は……。

「と……ルーマック將軍!?」

エメラダ以上に予想外の人間の顔を認めて、エミリアは大声を上げてしまう。

エミリアよりも十は年上だろうか、だが外交用の儀仗鎧に身を包んだ美しき女將軍、ヘイゼル・ルーマックは、ゲートから出た瞬間の周囲の惨状に顔をしかめつつも、上空のエミリアの姿を認めると大きく手を振ってきた。

少し視線をずらすと、そこでは先ほどのゲートの暴風が止まったのを確認した八巾騎兵達が、改めて統一蒼帝の無事を確認している。

その全てを俯瞰した志波は、一言優雅に呟いた。

「こちらの世界のことは、こちらの世界の皆さんでお決めあそばせ」

「みなさん! 停戦! 停戦してくだい! エメラダ・エトウ・ヴァと、アルバート・エンデのお願いです! 一旦停戦!!」

「皇帝陛下も停戦を希望している! お前ら皆一旦止まれ! 止まらねえ奴は、勇者エミリアの名の下に俺がぶっ潰す!!」

誰もがどう動くか決めかねる中、エメラダと、アルバートがそれぞれの方法で場を鎮めはじ

めた。

「……お前達も、降りてこい!!」

最後に、ベルが空に向かって叫ぶ。

地上の仲間の声に、真奥と、アルシエルと、エミリアは顔を見合わせた。

「行っておいでなさい。それくらいの時間はあります。その間こちらの青年と、あと……」

「あ」

「え」

志波は、小さく指を動かした。

するとまず意識を失っているガブリエルが、真奥の手から離れ、打ち上げられたマグロのようになぐつたりと宙に浮かぶ。

そして次に、真奥とエミリアの全身が淡く光り、次の瞬間には二人の目の前に、憔悴して目を閉じたアラス・ラムスとアシエスが顕現していた。

「この子達は私が面倒を見ますから。特に真奥さんは、そのまま降りては地上の人に迷惑がかかるでしょう?」

「ヤドリギ」である真奥とエミリアの意志に関わりなく、イエソドの欠片の子供を顕現させる離れ業を見せられ、志波の存在の謎は、否が応にも増すばかりであった。

真奥はエミリアと一瞬顔を見合わせて、すぐに自分の魔力を極限まで抑えてから、地上に

ゆっくりと下降する。

このときはまだ、真奥もエミリアも、アラス・ラムスとアシエスが、何故顕現したかを理解していなかった。

※

「随分<sup>ずいぶん</sup>むちゃくちゃやりましたね。蒼天蓋<sup>ソウテンサイ</sup>天守<sup>テンシュ</sup>がボロボロじゃないですか」  
「全くだ！」

地上に降りてきた真奥とエミリアを出迎え、最初に声をかけてきたのはエメラダとベルだった。  
「ある意味、魔王軍の侵攻でイスラ・ケントウルムが崩壊したときと同じくらい、世の中に与えるショックが大きいかもですよ？」

「め、面目ねえ」

当の魔王が、気まずそうに謝るが、それにしても真奥には解せないことがある。

「そ、それよりもエメラダお前、何か宗教裁判とかにかけられてたんじゃなかったのか？ なんだこんなところにいるんだ？」

「しゅ、宗教裁判!?」

エメラダの境遇を知らなかったエミリアが驚いて頓狂<sup>とんきやう</sup>な声を上げるが、エメラダは相変わらず

ずのほほんとした態度で、傍らそばにいるベルを見た。

「ベルさんとうるマックさんが助けてくれました」

「鈴乃と、ルーマック將軍？」

「助けるというほどでもない。ちよつと、国に巢食うドブネズミの尻しりを突いただけのことだ」

名を呼ばれた儀仗ぎようぎ鎧よろいの女性騎士ヘイゼル・ルーマックはなんでもないことのように肩を練すくめた。

「ルーマックさんは、私が背教審理にかけられたことを知って、わざわざ中央大陸から帝都に戻ってきてくださったんです」

「エメラダが背教審理にかけられるようなヘマをするはずがないと思ってな。こいつなら、もつとうまく立ち回る。どうせピンあたりが絡かかんでいるのだろうと思つたら案の定だ」

「まるで私が腹黒みたいじゃないですか」

エメラダは抗議するが、ルーマックは肩を練める。

「実際そうだろう」

「そんなことありませんー」

エメラダは口を引き結んで不満そうに頬ほを膨ふくらませるが、残念ながらルーマックの言葉を否定してくれる人物はこの場にはいないようだ。

「それに私だけではここまで短時間でエメラダを解放することなどできなかった。アルバート殿と、ベル審問官の力あってこそだ」

「俺ワケわかんないんだけどよ、鈴乃お前、西大陸に行つて帰ってきたのか？ どうやって？」  
真奥の記憶では、鈴乃とアルバートは半日前に自分とアシエスを宿に置いて皇都に潜入したはずである。

それがどういう理屈で、遙か遠く西大陸のセント・アイレでエメラダとルーマックを助けることができるのか。

「雲の離宮への潜入に失敗して……ガブリエルに、セント・アイレ帝都に飛ばされたのだ」

「ああ、何かどつかに飛ばされたらしいことはリヴィクオッコから聞いたが……」

真奥は思わず、上空で志波の力で浮かんでいるガブリエルを見上げてしまう。

「正直もう戻つてこれないかと思つた。だがセント・アイレ帝都にはエメラダ殿がいる。彼女に『天使の羽ペン』を使つてもらえば、まだ望みはあると考えた」

「背教審理の議場にベルさんがアルとルーマックさんと一緒に踏み込んだときには、夢でも見てるのかと思ひました」

「背教審理……あつ！」

真奥はその言葉を聞いて思い出した。

鎌月鈴乃こと、クレスティア・ベルの、聖職者としての本来の立場を。

「セント・アイレの重鎮、しかも救世の英雄の一人を背教審理にかけるような重大な案件を、訂教審議会筆頭審問官の私の承認なしに行うなど余程の事態だ。私の上には現責任者である



大神官ロベルティオ様しかないからな。一体どこの馬の骨が審理の開始許可を出したのかと思つてな」

背教審理ということは、当然被告人がどのように大法神教会の教えに背いたかを審理しなければならぬ。

その判断を下す教会機関と云えば、かつては異端審問会。今は、名を改めた訂教審議会に他ならない。

「審理の担当官と、証人台でふんぞり返っていたピピン將軍は、私の顔を見るなりその場で腰を抜かしたぞ」

「んで、ベルが審理を止めてる間に、ルーマック女史がピピンをふんじばって、『背教の証拠』を全部その場で洗い直させたんだ」

アルバートが解説役を引き継ぎ、この半日の間に世界の反対側で繰り広げられていたもう一つの大きな戦いに、エミリアは啞然としてしまう。

「でも、油断してたつもりはありませんけど、私としたことが、ボウフラ・ピピンにしてやられるなんて、本当にはらわたが煮えくり返りました……ね、オルバ？」

エメラダは唐突にオルバに話を振った。

本人と真実を知る真奥達にしか分からないことだが、ラグエルとカマエルが消え、ガブリエルが倒され、マレブランケ達が真奥とアルシエルの背後にいる今、この場にオルバの本当の味

方は一人もいないのだ。

身を震わせて立つこともできないオルバを、エメラダは蛇のように睨みつける。

「な、何?」

「トボけても無駄ですよ。日陰者のくせに、随分精力的に動き回ってみたいですね?」  
オルバは、剃髪した頭の上まで真っ白になっている。

「何も知らないカシアス城塞市の聖堂司祭をエフサハーンのお金で抱き込んで、ウジ虫ビンの一派と渡りをつけて、スローン村周辺を管理させてたらしいじゃないですか。ピン・ザ・ドブネズミはあなたからももらえるお金がよっぽど嬉しかったみたいですよ?」

「そ、それは……」

「スローン村周辺を嗅ぎまわる邪魔な私を、背教審理で帝都に閉じ込めて、ほつくほくしてたところを、ベルさんがひっくり返してルーマックさんが後ろからレイピアでえいっ! ってやったら、吐き気も嫌がって引つ込むくらい汚いものが出るわ出るわでした」

「あ……あ……」

「それをルーマックさんが審理に持ち込んで、ベルさんが色々こわい文言つけて教会側の審理担当官に報告させたら、サンクト・イグノレッドからわざわざ大神官のセルバンテス様が天の階を使ってまでお越しくださったって、私の審理を中止させてくださって、言って膝をついて頼んできましたよ? そりゃあそうですね? なんとか行方不明で済んでた大神官の

不祥事の明確な証拠が挙げた上に、カシアス城塞市の聖堂司祭の不正の証拠まで押さえちやっただけです。」

エメラダはもはや完全に血の気が引いているオルバをいたぶるように一言一言ゆっくりと言う。

「スローン村周辺にいた教会騎士や近衛騎士なんかも、ゼーンドゥンで縛めてこちらの手のうちにあります。私の親友の実家に、なあにをしようとしていたんですかね？」

「え、エメ!? そ、それじゃあ……」

エメラダの言葉に、エミリアは思わず叫んでしまった。

スローン村周辺の、オルバの手勢にエメラダやルーマックの手が入った。ということ。

「……エミリア……私達の力が至らなかったばかりに、辛い思いをさせてしまったみたいですね。でももう、大丈夫。今は法術監理院の者達が、あなたのお父様の畑を守っているわ」

エメラダは、優しくそう告げる。

エミリアは、両手で顔を覆うと、小さく息を吐いた。

安堵と、喜びと、後悔と、希望がないまぜになった、心の立てた音だった。

エミリアの心の緊張が解けたことを見届けたエメラダは、セント・アイレ宮廷法術士の肩書に相応しい毅然とした態度で言い渡した。

「オルバ・メイヤー。あなたは民を惑わし、大法神教会の教えを冒瀆し、世界中の人々を危機

に陥れ、救世の英雄の地位を貶めたその責任を負わなければなりません。その罪は、あなたの命一つで償えるものでは、決してないと思いませんか？」

オルバは、がっくりと項垂れて、その宣言をただ聞いていた。

今度こそ、オルバの罪は、世に向けて明らかにされるのだ。

「ですが、あなたに一片でも人の心が残っているのなら……今エンテ・イスラを覆う闇の真実を語る意志があるのなら、神聖セント・アイレ帝国はその罪を満く機会を保障します。オルバ、あなたの愚かな夢は、今、終わりました」

「ぐ……」

項垂れたオルバを拘束するように、その腕をアルバートが掴み上げ、オルバは一切抵抗することなくそれに従った。

オルバの意志が折れたことを見届けると、エメラダはまた大きく息を吐く。

「はあ、やつぱり疲れますね」

「そういうところが腹黒だと言うのだ……さて」

エメラダが脱力した瞬間を見たルーマックは、溜息交じりでそう言ったが、すぐに顔つきを引き締めると、息を詰めてこちらの様子を窺っていた、元ファイガン義勇軍の八巾騎兵達に向き直る。

「さて……八巾の騎士達よ。我が名はヘイゼル・ルーマック。五大陸連合騎士団の、西大陸代

表である。統一蒼帝陛下に拝謁せんがため、参上仕つた」

普通の外交ならば、絶対に有り得ないことである。

要人がゲートを使って他国の中枢に直接乗り込むだけでも立派な国際問題なのに、アポなしに皇帝に面会させるなどと、無礼にも程がある行為だ。

だが、

「申して……みよ」

しわがれ声とともに騎兵達を割って現れたのは、王侯クラスの公使を派遣しなければ本来目通りすることも敵わない統一蒼帝その人であった。

「此度は、特別……だ。蒼き空の下、我も……そなたも、一人の人間であることに、変わりはない」

「ありがたきお言葉」

ルーマックはエフサハーンの礼儀に則り統一蒼帝の前に跪拝し、エメラダもセント・アイレの高官としてそれに倣う。

「陛下。私は五大陸連合騎士団を代表し、陛下に戦の矛を収めていただきたく、参上致しました」

「……うむ」

ルーマックの口上は続く。

「この度、皇都・蒼天蓋に起こった悲劇は、今このエンテ・イスラ全土を覆う悲劇の、ほんの一端に過ぎませぬ。魔王軍の災禍の爪痕もいえぬまま、人と人同士が相争えば、世界の真の危機を見逃すことに繋がります。貴国の偉大なる歴史を途絶えさせることにもなりかねず、それは陛下の御心に沿わぬことと存じます」

「……うむ」

「何卒、五大陸連合騎士団立ち合いの休戦協定の場に、貴国の代表に御来座いただくわけには参りませぬか。わずかな時でよいのです。東西南北の民がまたわずかの間でも、魔王軍以前の平和を享受すべく、陛下の御心を頂戴したく」

エミリアは、ルーマックの口上を聞きながら、ふと横目で真奥の様子を窺う。

「……あれ？」

そして様子を窺ってから、何故そんなことをしたのか自分に問いかけた。

まるでこの世の争いの全てを魔王軍の責任にしているかのような口上を、真奥が気にしていないかどうか気になったのだ。

魔王軍以前のエンテ・イスラは、決して全ての人々が手を取り合って笑顔で過ごす平和な世界などではなかった。

大同土の水面下の睨み合いはもちろん、小国同士の戦争など珍しいものでもなかったし、エフサハーンはもちろん南大陸のハールーン王国は今も内戦に明け暮れている。

もちろんルーマックの口上は外交上の方便なので、それをそのまま受け止める必要は誰にもないのだが、エミリアは、今までなら真奥の気持ちなど慮ることがなかったであろうことに気づき、一人で戸惑ってしまふ。

一方、当の口上を受けている統一蒼帝は、思った以上にあっさりと、ルーマックの申し出を受諾した。

「……よかろう。先の……宣戦は……我が不徳の致すところ……正蒼帝の騎士長を、向かわせよう」

「……ありがたき幸せに存じます」

ルーマックは、深々と頭を垂れて感謝の意を示した。

ルーマックとの会談を終えた統一蒼帝は、ファイガンの八巾騎兵達に守られて、かなりみずばらしくなったものの、建物そのものは無事だった蒼天蓋天守へと帰った。

それを見送ると、エメラダとルーマックは、エミリアの下に駆け寄った。

「後のことは心配しないでください」

「今更エミリアにこんなことを言っても信じてもらえないかもしれないが……エンテ・イスラ全土が、少しずつ、エミリアが一人で背負ってきた重荷の意味を分かりはじめているんだ」

「エメ……ルーマックさん……」

「これからはいエミリア自身のために戦ってください。私もアルもこれまで通り全力で応援しますから」

「……ええ、ありがとう」

エミリアは深く頷いて、友を抱きしめた。

エメラダは、ずっと分かっていたはずだ。エミリアがいつだって自分のためにしか戦っていないかったことを。

それでも、こうしてずっと傍にいてくれる。

その友情に、いつか報いたい、心からそう思った。

二人の微笑ましい抱擁を見届けたルーマックは、今度は厳しい顔で、圧倒的魔力を人間の体の内に隠した青年に向き直った。

「君がエンテ・イスラを侵略した魔王であるということに、私は驚きを禁じ得ない。本来ならば、こんな悠長に話をするようなことはおかしいのだろう」

「ンなことは俺が一番よく分かっている」

「しかし……不思議なことに、君達は今のエメラダやアルバート、そしてエミリアにとって、なくてはならぬ存在のようだ。何より君達とベル審問官の力がなければ、エメラダを助けることも、オルバ・メイヤーの罪を暴くことも、東大陸を再び五大大陸連合の交渉の席に着かせるこ



ともできなかった。全てを水に流すことはできないし、いつか我々は君達悪魔の罪を断罪するが……それでも、今このときだけは、感謝する」

小さく目札するルーマックに、アルシエルは複雑な表情を浮かべ、ベルは素直に頭を垂れたが、唯一真奥だけはそれを鼻で笑い飛ばした。

「やめとけて。腐っても俺は魔王で、こいつらは悪魔だ。この前は失敗したが、エンテ・イスラ征服を諦めたわけじゃない。そんな甘いこと言ったら、いつか後悔するぞ」

「そんな日が永遠に來ないよう、折って……さて」

ルーマックは不敵な笑みを浮かべて真奥の挑発を受け流し、ふと、真奥の後ろに控えるパリッティアとファーフアレロ、そしてリヴィクオッコに目をやった。

「それはそれとして、君達にそのままニッポンとやらに帰られても困る。マレブランケ達をどうにかしてもらわねば、ここで今すぐ戦端を開くことになるが」

「わーってるよ。そもそも俺は、こいつらに魔界に帰れずーっと口酸っぱくして言ったんだからよ」

真奥は顔を顰めると、

「はいっ！」

相も変わらず、まるで部屋の窓を開けるような気軽さで、ルーマックの傍らにゲートの穴を開けてみせた。

「バーバリッティア」

「……は」

背後に呼びかけ、マレブランケの筆頭頭領格が答える。

「先に、チリアットが帰つてゐるはずだ。今度のこと懲りたる。当分、大人しくしろよ」

「……御意に……」

「魔王様」

「おう」

かしこまるバーバリッティアに続き、ファーフアレルロも真奥の傍らに跪く。

「全て魔王様の仰せの通りにございました……我らの不明、どうぞ、お許しくださいませ」

「少しは尊敬したか？ 他のマレブランケ連中、残さず連れて帰れよ？」

「はっ……」

「……おい」

一方のリヴィクオッコは、ペルと向かい合っていた。

「これから何をするつもりか知らんが……死ぬなよ」

「まさか、マレブランケに我が身を心配される日が来るとは思わなかったな」

ペルは苦笑するが、不快ではないらしい。

リヴィクオッコの失われた腕に手をやると、

「次に相見えるときには、刃でなく言葉を交わす間柄になっていることを祈る」

「言ってる。まったく人間てのはどいつもこいつも訳が分からねえ」

「お互い様だ、私も最近では、悪魔という連中がとんと分からん」

ほんの二年前には、決して有り得ない光景。今も、日本の笹塚、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室でしか有り得なかったはずの光景が、エンテ・イスラの世界に顕現した。

人間と悪魔の対話。

人間と悪魔、双方ができるはずのないと思っていたことが、今、こうして実現しているのを見て、エミリアは思わず唇を強く噛みしめる。

パーバリッティアとファーフアレルの号令で蒼天蓋に残っていたマレブランケ達が招集され、さすがに悪魔の大部に慣れないルーマックが身を引いて見守る中、新生魔王軍は、真の魔王が開いたゲートによって皆魔界へと帰参していった。

「ねえ……魔王」

「ん」

マレブランケ達を見送る真奥の背に、エミリアは、進化聖剣・片翼も破邪の衣もない、遊佐恵美は声をかける。

「私、あなたに謝らなきゃいけないことがあるって、さっき言ったけど……あの」

「マレブランケ達のことか？」

「……うん、私……」

恵美は、ぼつりぼつりと、これまでの経緯を話しはじめる。

エンテ・イスラに帰った直後のこと、父親の麦畑が生き残っていたこと、その麦畑のためだけに、マレブランケの頭領格を義勇軍に殺させたこと。

全てを詳らかに、正直に話した。

真奥は一度も遮ることなく、ただ恵美の告白を聞いていた。

「だから……私にはもう、あなたを責める資格もな……」

「そんなこと気にしてんのかよ。バカじゃねえか」

「え」

「冷たいようだが、正直そんなん、どうでもいい」

「ど、どうでもいいって……マレブランケだって、あなたの配下の悪魔じゃないの？」

「確かにそうだが、俺はフーフアレルロが日本に来たとき、エンテ・イスラから撤退しろって何度も言った。パーバリッティアも、頭領格達も、その言葉を実行しなかった、だから運悪く情勢を読み切れなかった奴らが死んだ。それだけのこった」

「……で、でも……」

「お前がそんなことで揺れててどうすんだよ。お前が自分のためだけに悪魔を殺したってんなら、それこそ最初からずっとそうだろう」

「……っ！」

それは、間違いないその通りだった。

だからと言って一度揺れてしまった心の均衡は簡単には戻らない。

そんな恵美の動揺を察したのか、真奥は殊更大きく溜息をついて、わざとらしく首を横に振った。

「それがお前って勇者で、そうさせたのは俺って魔王だ。そこに今更変な理屈捏ねくんなよ。究極的には俺とお前の関係は、最初から何も変わっちゃいねえ」

真奥はそこで、初めて恵美を振り向いた。

なぜかこのときも、恵美は真っ直ぐ真奥の顔を見ることができずに、慌てて目を逸らして俯いてしまう。

真奥はもちろんそんなことには構わず、はっきりと言い放った。

「俺が勝手に、お前のこと大元帥だと言ってたくらいだろ、変わったことなんか」

「なっ……」

恵美は弾かれたように顔を上げた。

人前で大元帥呼ばわりされたことが問題なのではない。

大元帥に指名された日のことが一瞬で脳裏を駆け巡り、思わず顔が赤くなってしまう。

「そ、それはだからその、あなたが勝手に言ったことでしょー！ わ、私は受けるともなにとも

言ってな……」

「だからそう言ってるんだろ俺の勝手だってよ……大体、恵美、お前今は俺よりもっと謝らなきゃいけない相手がいんだろが、まさか忘れたわけじゃないだろうな」

恵美の困惑にも構わず、真奥は顔を顰めた。

「下手すりゃ土下座したって収まんねえぞ、ちーちゃんと、鈴木梨香」

「……あ」

恵美は、虚をつかれたように口をあんぐりと開ける。

「ちーちゃんはお前が帰ってこねえつつって毎日心配して泣いてたし、鈴木梨香は、お前が不用意に概念送受を送ったりしたから、ガブリエルが芦屋をさらうところに出くわしちゃってえらい目に遭ったらしいな」

「あ……その……」

「あ、ちなみに俺はもう、ちーちゃんの誕生日プレゼント買ってあるからな。お前、どうせなんの用意もしてねえんだろ。あーあ、ただでさえちーちゃん凹んでんのかなあ？」

「……………あう」

恵美は真奥が告げる真実と、己の浅はかさが友の身の上にもたらした結果に衝撃を受けて、うめき声を上げて黙り込んでしまう。

「はあり、お前本当にどうしたよ。相当悪いもん食ったな、こりや」

手をもじもじさせながら、二の句が継げなくなってしまった恵美を、真奥は呆れながら見ていたが、慰めるように恵美の肩を軽く叩いてやる。

「ま、それだけ大変だったってこったな。日本に帰ったらちゃんと謝って、話せることを一からゆっくり話してやれ。友達なんだから、分かってくれるさ」

「……………うん」

恵美は触れられた肩に思わず手を当てながら、小さく頷いた。

※

その連絡は、突然だった。

学校から帰った千穂は、自室の机に靴を置いた途端に鳴った携帯電話の音に飛び上がった。慌てて着信画面を見た千穂は、その瞬間全てのものを放り出して部屋から飛び出した。

「千穂!? また出かけるの!？」

学校から帰ってきたと思った千穂が再び風のような勢いで家を飛び出していったことに、驚いた母から声がかかるが、千穂の心はそれにすら対応できないほどに急いでいた。

家から飛び出すと、夕暮れの笹塚の町を千穂は一心不乱に走った。

百号通り商店街は買い物客や通勤通学の帰りの人々でこった返し、なかなか先に進むこと

ができない。

それでも千穂は、器用に人並みを掻き分けながらひた走る。

「ああ、もうっ!!」

だが、こんなときに限って駅前で赤信号に引っ掛かってしまう。

千穂は迷うことなく首都高下を通る歩道橋の階段を駆け上がった。

この歩道橋を歩いて渡るのと赤信号が青に変わるのを待つのではほとんど時間差がないのだが、それでも千穂は、でき得る限りの全力で走った。

背後で、信号が青になった音を聞きながら、千穂は京王線笹塚駅のガード下を駆け抜ける。相変わらず放置自転車の多い場所だが、千穂はそんなことは気にならなかった。

緩やかなカーブを描く菩薩通り商店街を駆け抜け、用水路沿いに真っ直ぐ進み、途中細かい路地をいくつも曲がると、ようやく目的地が見えてくる。

木造二階建ての古いアパート。

千穂の、何より大切な場所。

千穂の大切な人達が集う場所。

「あっ!」

千穂は走りながら見た。

ブロック塀に囲まれた裏庭に、見覚えのある光。



千穂は目に入る汗を拭いながら一心不乱に駆け「ヴィラ・ローザ笹塚」の看板が掲げられた  
ブロック塀の門に飛び込み、裏庭に駆け込む。

「真央さんっっ!!」

携帯電話に表示された人物の名を叫びながら、千穂の靴の裏が、以前草取りをしたのにまた  
大分伸びてしまった雑草と土を踏みしめたとき、そこにいた者達が、千穂の声に気づいて振り  
向いた。

「おう、ちーちゃん。早いな」

「あ」

「おお」

「あら？」

「あ、チホだ」

「ちーねーちゃ!!」

そこには、沢山の人間がいた。

泰然とした顔、疲れ切った顔、一仕事終えた顔、背負われて意識のない顔、様々だ。

そして一人だけ、とても決まり悪そうに、すこしだけ顔を伏せながら千穂の名を呼んだ者がいた。

「……千穂……ちゃん」

「遊佐……さん……」

その瞬間、千穂の目からは滝のように涙が流れ落ちはじめた。

こらえきれなかった。

衝動の赴くままに、千穂は再び地面を蹴ると、その胸に飛び込んでいった。

「遊佐さああああああん……！　よかったああああああ！！」

「ち、千穂ちゃん……」

「私、私、心配したんですよおおお、すっごく、心配で、私、もう、遊佐さんに、会えなかつたら、どうしようって、ひっく、うえっく……うええええええええ」

「千穂ちゃん……ありがとう……心配かけて、ごめんね、ごめんね……っ」

胸に縫りついて泣く千穂の肩を、恵美は恐る恐る抱きしめた。

「ちーねーちゃ、たあいま！　わぶっ!?」

「アラス・ラムスちゃん……」

千穂はスカートの裾を引っ張る小さな手に気づくと、その幼い顔を見下ろし小さく息を呑む。

だが即座に身をかがめてもの凄<sup>す</sup>い勢いで掻<sup>か</sup>き抱<sup>いだ</sup>いた。

「無事で……よかった……っ！ 本当に、本当に、本当によかった……っ！！」

「あん、ちーねーちゃ、泣いちゃ、めっよ」

「うええええええええ」

アシエスと再会して以降、妙<sup>まよう</sup>に人に対してお姉さんぶるアラス・ラムスが千穂の髪を撫<sup>な</sup>でる。千穂はひとしきり泣き切つてから、ようやく落ち着くと帰還した面々を見回す。

そして芦屋<sup>あしや</sup>に背負<sup>かか</sup>われているガブリエルに気づいて目を丸くし、ついで真奥が背負<sup>かか</sup>っている見たことのない男性を見て、再び千穂は恵美を見た。

「遊佐さん！ もしかして……っ！」

「そうよ。目を覚ましたら、千穂ちゃんにも紹介させて」

恵美は恥<sup>は</sup>ずかしそうに頬を赤らめながら、小さく微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。

「私のお父さんよ」

「遊佐さんっ！！」

千穂は感極<sup>かんごく</sup>まってしまい、アラス・ラムスを解放した手でそのまま、また恵美に飛びついた。

「おー、感動の再会<sup>ざいかい</sup>だ」

そのとき、アパートの二〇二号室の窓<sup>まど</sup>ががらりと開き、中から天祿<sup>てんろく</sup>が顔を出した。

「お帰<sup>かえ</sup>り芦屋君、無事で何より。ちゃんと伝言は伝えたよー」

「恐れ入ります」

仰々しい大元帥の鎧ではない、襟が伸び、裾がすり切れたユニシロ一式を纏った人間、芦屋四郎は苦笑して天祢の顔を見上げる。

「天祢殿、留守中、何か変わりなかったか」

まだ法衣姿の鈴乃が尋ねると、天祢は苦笑して顎をしゃくった。

「ミキティ伯母さんがそっち行つたつてことで察して。変わり大有りよ」

「天祢」

真奥達ともに戻ってきた大家の志波は、心なし厳しい声音で姪を窘めた。

「さて、遊佐さんのお父様の看病をするにも、真奥さんや鎌月さんのお部屋というわけにもいきませんでしょう。今の状態では病院に担ぎ込んだりタクシーで遊佐さんのお宅にお送りするわけにもいきませんし、とりあえず一〇一号室を開けて参りますわ。遊佐さん、お父様をそちらに。掃除は行き届いているはずなのでご安心あそばせ」

「あ、は、はい、ありがとうございます。お世話になります」

恵美は千穂に抱きつかれたまま、志波の厚意の言葉に会釈をする。

「芦屋さんは、お手数ですけどそちらの素敵な青年を私の家まで運んでくださいませ。今、一〇一号室の鍵を取りに行きますから、一緒に参りましょう」

「は、はい……」

志波の言葉に芦屋はもちろん、真奥も顔をひきつらせた。

これからガブリエルに一体どんな悲劇の運命が待っているのだろうか、そもそも折角無事に笹塚に戻ってこられたのに、志波の家の中に入った芦屋が戻ってこられるのだろうかとか、いろいろな不安が脳裏をよぎる。

「まあ、あれだ、とりあえず部屋に入ろう、まだ荷物がこれから届くし、さすがに疲れたから落ち着きたい」

真奥は千穂達の様子を見ながら、背負ったノルドを支え直してそう言う。

「荷物……って？」

恵美に抱きついたままの千穂が問うと、答えたのは苦笑する鈴乃だった。

「まあ、色々な。エメラダ殿にはまた色々苦労をかける……っと」

そのとき鈴乃はふとあることに気づき、天祢を振り仰いだ。

「そういえば天祢殿、ルシフェルは？」

天祢はなぜか、その問いに、気まづげに鈴乃から視線を外した。

「ああその、漆原君……まあちよっと、色々あって、入院してる」

「えっ!? まだ退院できてないんですか!？」

天祢の衝撃的すぎる言葉に、そんな衝撃を通り越した反応をしたのは他ならぬ千穂である。ずっと日本にいた千穂がそう言うからには、漆原が入院したという話は間違いないことな

のたろう。

「はあ……こっちは何事もないままだと思つてたのになあ」

真奥がその会話にげんなりするが、

「ま、それでもなんとか一つ、ヤマは乗り越えたことだし」

そう言つて、真奥はまだ恵美に抱きついたまま、涙の収まらない千穂に向かつて、満面の笑顔で言つた。

「ただいま、ちーちゃん」

千穂もまた、その笑顔に負けないくらいの笑顔で、

「真奥さん、遊佐さん、アラス・ラムスちゃん、芹屋さん、鈴乃さん、アシエスちゃん」

元気いっぱい、言つた。

「お帰りなさい!!!」



## 終章

ノルド・ユステイーナの昏睡は、最初に恵美が想像していたよりずっと深いものだった。ノルドが芦屋とともにヴィラ・ローザ笹塚からガブリエルの手によって誘拐されてから一週間以上の日が続いている。

体はかなり衰弱し、エンテ・イスラから帰還して丸二日経ってもまだ意識が戻らない。

ノルドが日本で生活していたことは分かっても、どこで暮らしていたかも、住所どころか戸籍や保険がどうなっているか分からない以上、医者にもかかれない。

一応アシエスに尋ねてみたものの、

「住所？ うーん、ミタカ？」

という極めて広い範囲を搜索しなければならぬ答えが返ってきて、誰もが追及を諦めた。鈴乃の診断で三日以内に目覚めれば命の危機は回避できる、ということだったので、ノルドは、志波の計らいで開放されたヴィラ・ローザ笹塚一〇一号室に安静に寝かされていた。

恵美は帰還後も永福町の自宅マンションには一度戻ったきりで、後はヴィラ・ローザ笹塚の一〇一号室にノルドを寝かせるための布団や最低限の生活必需品を持ち込んで、ずっとつきっ



きりで看病に当たっていた。

看病という意味では、漆原の容体も心配になってくる。

天祢はなぜか頑として口を開こうとしないのだが、千穂の話の端々から、大家の志波が漆原の入院に関わっていることは想像に難くない。

問題は、未だに入院先を誰も教えてくれないことだ。

芦屋は漆原の容体以上に、診療代金の請求を考えて帰還早々に顔を青くしているし、そうでなくてもエンテ・イスラ親征によってますます増えた謎を、これから志波の協力の下、全員で一つ一つ解き明かしていかなければならないのだ。

ちなみに真奥の無意識の暴挙によって完全に息の根を止められたかに思われたガブリエルは奇跡的に命を繋いでいたが、志波によるとノルドよりずっと命の危険があるとのこと、現在志波宅に収容されている。

世界の謎を解き明かしたいのはやまやまの真奥だが、アパートの隣に建つ志波家の中で一体どのようなおぞましい儀式が行われているのかを想像すると、それだけで身の毛がよだつ。

しかも唯一志波家に足を踏み入れた芦屋が、まるで真奥の悪い想像を裏付けるように頑として志波家の中の様子を語ろうとしないので、魔界の王は隣の土地に立つ恐怖の伏魔殿について悪い想像ばかり膨らませてしまう。

「魔王、ちよっといいか」

勝手に膨らむ謎の恐怖に真奥が身震いしたとき、やおら鈴乃が魔王城の呼び鈴を鳴らしてから入ってきた。もちろん今は、見慣れた普段の和装姿だ。

あれだけ大々的に大法神教会の内外で大立ち回りを演じた鈴乃がこうして日本に戻ってこられるのも、ひとえにエメラダとアルバート、そしてルーマックの力によるところが大きい。

大神官オルバの背教行為やセント・アイレの近衛騎士団長と教会の癒着は、教会の権威を大きく失墜させるに十分な大騒動だ。

だがそれを暴いたのがクレステシア・ベル、つまり同じ教会組織の訂教審議会であるというだけで、腐敗が自浄作用によって清められたと捉える向きも多かったのだ。

そのことで大法神教会は危ういところで致命傷を負わずに済んだが、逆に言えば、教会はクレステシア・ベルに生殺与奪の権利を握られたことになった。

何せクレステシア・ベルは今日に至るまでの教会の暗部を余すことなく知り尽くしているのだ。そして今やクレステシア・ベルには、金銭による癒着ではない、信仰と正義の精神によって結ばれた神聖セント・アイレ帝国との強固な絆がある。

五大大陸連合に復帰したエフサハーンの八中騎兵達の中にも、エメラダ・エトウーヴァ、アルバート・エンデと並ぶ新たな「勇者の仲間」としてクレステシア・ベルの名を称える声が上がっており、そんな今の彼女の自由をなんらかの方法で阻害しようものなら、大法神教会はどんな恐ろしい報復を受けるか分かったものではないのだ。

もちろん鈴乃自身は教会により人々の信仰が守られることが第一だと考えているので教会組織そのものを害する気は毛頭ない。

だが正義と信仰を誤つ権力者に容赦するつもりはないことは、エメラダの背教審理を中断させたときに、既に大神官セルヴァンテスに言い含めてある。

エメラダによると、セルヴァンテスからその伝言を聞いた筆頭大神官ロベルティオは、心労が祟って床に臥せってしまつたらしい。

とにかく今のクレスティア・ベルこと鎌月鈴乃は、今やエンテ・イスラ最強の聖職者と言つても過言ではない。

オルバに代わりエミリアを助け世界の未来を救う者として、エンテ・イスラで誰よりも自由な行動が保障されているのだ。

「志波殿との会談の日程を千穂殿に知らせたところ、参加する旨のメールが返ってきた」  
「ん？ それだったら俺のどこにも来たぞ？」

真奥は首を傾げながらも、携帯電話を取り出して千穂からのメールを開く。

「それは分かっている。同時送信の記録が残っていたからな。ただ、ちょっと聞きたいのだが、千穂殿の様子、どこかおかしくないか？」

「ん？」

帰還した際の泣きっぷりは確かにもの凄かったが、真奥の目には取り立てて何か大きな変化

はないように思う。

「いつもより絵文字が少ない気はするが……気にするほどじゃないと思うが」

そう言って真奥が取り出した携帯電話は、なんと雲の離宮でボロボロになってしまったあの携帯電話のままである。

「……観念して機種変更をしたらどうだ。そんな状態で充電したら危険だろう」

「したいところだが金もねえし、当てにしている奴が、ほら、また、さすがにさ」  
真奥はそう言って、アパートの畳を指さす。

「ああ、そうか」

鈴乃はその指さしの意味を理解して、複雑な顔で頷いた。

「まあメールもそうだが、他にも気になることがあつてな」

「ん？」

「我々が帰還したあの日……ほんの一瞬だが、千穂殿が、まるで何かに怯えているような、悲しんでいるような表情をした気がしたんだ」

「そうだったか？」

あのときの千穂は、終始真奥達の帰還を喜んでいたようにしか見えなかった。

「確証が持てんからお前に聞いているんだ。何か千穂殿から相談をされていないか、そうでなければまたぞろお前が千穂殿の気持ちを慮らないような無神経なことを言ったのではないか

と思つてな」

「……あのな」

「いい加減、否か応かだけでも返事をしてやったらどうだ」

「お前この前からやたらとそのこと突っ込んでくるなおい……」

このことに關してだけは気のせいではなく、以前と違つて鈴乃は、明らかに真奥と千穂の關係についてあれこれと突っ込んでくるようになっていた。

どちらの方向に持つていきたいのかは分からないが、芦屋の手前決まり悪くて仕方がない。

「まあ、それは冗談にしてもだ」

「冗談に聞こえなかったぞおい」

「ノルド殿の看病に必要なものの買い出しをエミリアに頼まれているのだが、一人ではなかなか難儀な量だ。一緒に来てくれないか」

「ええ？　なんで俺が」

真奥は思わず、嫌そうな声を上げる。

「そんなに嫌そうな声を上げなくてもいいだろう」

だがなぜか、鈴乃が傷ついたような顔になり、真奥は慌てて首を横に振る。

「あ、いや、今のは恵美の用事だつてことでつい条件反射で」

「確かアルバイト先の同僚へ、シフトを変わってもらった礼の品を買いに行くと言っていただ

ろう。ついでに一緒に行ければと思っただけなのだ。そう邪険にするな」

「ベル、貴様何を言っている？」

「ん？」

芦屋の問いに、鈴乃は純粹な疑問の表情で首を傾げた。

「今まで貴様、魔王様と積極的に行動をともしようとしたことなどなかったではないか。魔王様が混乱されるのも無理はない」

「ん……そ、そうか……？　ん？」

芦屋の指摘に、鈴乃はなぜかうろたえたように一歩後ろに下がるが、その瞬間、共用廊下の入り口の扉が開いてそちらに注意が向く。

鈴乃の視線を追って真奥と芦屋がそちらを向くと、アパートの共用廊下の入り口に、人影があった。

「……あつ」

真奥と鈴乃と、そして芦屋に気づいた鈴木梨香は、複雑そうな顔で、ぺこりと頭を下げた。

恵美は、一〇一号室の呼び鈴が鳴らされた音で、意識を取り戻した。

慌てて目をこすり、そのことで自分がすっかり座ったままだた寝をしてしまったことに気

づく。

一昼夜一睡もせず父の看病をしていたせいで、疲労はピークに達していた。十数時間ぶつ続けで戦うことができるのに、二十四時間以上起きていると体力がぐっと落ちる自分の体が不思議でもある。

時計を見ると、どうやら三十分は寝込んでいたようだ。

そこに再び呼び鈴が鳴る。

時間から考えて、恐らく買い物を頼まれてくれた鈴乃だろう。

「あ、ベル、ごめんね、今開けるわ」

恵美は顔にかかった前髪だけをさっと払うと、

「ありがとう、沢山あつて重かったで……………」

玄関の扉を開けて、そこに立っていた人物を見て、息が止まるほど驚いた。

「よっ、おひさ」

およそ一月ぶりに顔を合わせた日本の友人は、何げない顔でそう短く言うと、恵美に向かってビニール袋を差し出した。

「梨香……」

恵美は戸惑い、その袋を受け取りあぐねていると、

「重い、早く」

普通に急かされた。

「あ、ご、ごめん……」

慌てて受け取ってから、

「あ、あの、梨香、あのね」

中も改めず、手に持ったまま、恵美は顔を歪ませて、何か言わねばと口を開くが、それを止めたのは、他ならぬ梨香だった。

「一応今の状況を説明しておく、鈴乃ちゃんにお願いして、私が買い物行かせてもらったの。全部で三千円ちよつと。あとでレシート渡すね」

「う、うん……あ、あのそれで梨香……」

「ちよい待ち。先に私から言いたいことがある。いい知らせと悪い知らせがあるんだ。どっちから聞きたい？ 一度、これ言ってみただったんだ」

これまでと、まるで変わらない梨香の様子。

恵美はどう対応するかを決めかねたまま、

「え、えつと……じゃ、じゃあ悪い知らせから……」

使い古されたハリウッド・ロジックに付き合う。

「おっけ。残念だけど、クビだったさ。フロアリーダーも粘ってくれて、私や真季ちゃんも代われるところはなんとか頑張ったんだけどね……さすがに一月も連絡なしの無断欠勤は底いき



れなかった」

「そ、そう……それは、そうよね」

恵美は平静を装ってはいたものの、『悪い知らせ』に、思った以上にショックを受けていた。なんだかんだ言つて、日本に流れ着いてから長い時間を過ごしてきた職場だ。

自分の真実を明らかにすることはできなかったが、日本で大切にしてきたコミュニティにもう戻ることができないという事実は、意外なほど心に重くのしかかった。

不思議なことだが、勇者の志が砕けた瞬間よりも、もしかしたらショックが大きいのではないかとも思う。

だがそれも、嘘をつき続け、浅はかな行動をした報いなのだろう。

「さて、じゃあもう一つの良い知らせだけど……ちよつと荷物下ろしたら？」

「え、あ、う、うん。……はい」

恵美は床に荷物を下ろして、改めて梨香に向かい合った。

日本の友人は、ちよつと斜に構えたように微笑むと、恵美の目を真っ直ぐ見て言った。  
「これから私になんて呼ばれるか、選ぶ権利をあげよう、エミリア・ユステイーナさん」

「っ……」

恵美の心臓が、キュツと縮む。

「り、梨香……私……」

目の奥が熱くなり、口が震える。

だが、泣いてはいけない。梨香に、日本の一番の友人に嘘をつきつけてきた自分が泣くのは卑怯の極みだ。

しかし梨香は、そんな恵美の表情の変化を見逃さなかった。

「こら、あんたが泣くのはずいぞ、私はおかげさまでものすげー怖い目みたんだから、私の方こそ泣かせてほしい。つつーか超泣いた。マジ怖かったんだもん」

「……うん」

「ただね、先回りして言うておくけど、強いて謝ってほしいことって言えば、逆にそのことくらいしかないんだわ、これが」

「……へ？」

「いやね、もちろん驚いたよ？ 実家が海外どころかそもそも世界が違うとか？ しかも、もの凄くバカ力持ってる勇者で？ んで、あまつさえエミリア・ユステイーナだなんてご大層な名前だもんね」

「バカ力って……」

「でもさ、もし私が男で、あんたと結婚しようと思うなら色々面倒なことは多いんだろうけど……でも幸い私は女で、あんたの友達だったんだこれが」

冷静さを失っている恵美は気づかなかったが、梨香のこのロジックは、梨香と恵美の關係に

のみ当てはまるものではない。

梨香は女で、彼女の想い人は、男だ。

梨香が一瞬だけ、切なげな瞳で天井を、その上にある二〇一号室を見上げたことに恵美は気づかなかった。

「ど、どういう……」

「……あ、うん。えっとさ、私は今は高田馬場に住んでるけど、実家が神戸だってことは知ってるよね、前にちらっと話したし」

「……うん」

「高校のときに、水泳で国体の選抜メンバーになったって話、したっけ？」

「え、ええ!? こ、国体!? 聞いてないわよ!」

「まあ結局選抜落ちたしね。あとね、私中学のとき、ずーっとクラスメイトに、りかつぱりかつぱって呼ばれてたんだ。女の子のあだ名にべはないだろべはってずっと思ってた」

からからと笑ってから、梨香は立ち尽くす恵美の手を、優しく握った。

「ね? 友達の過去なんて改めてバラし合わなきゃそうそう知る機会なんかないんだよ。あんたの場合、人よりちょっと経歴が特殊なバリエーションだったってだけじゃん」

「……梨香……」

「私にとって大切なのは、気取らずにバカ話できて、仕事帰りにちよっとお茶して……まああ

んたがクビになっちゃったからこれはちょっと雲行き怪しいかもだけど……んで、私の友達でいつづけてくれるって、そんなくらいだよ。それ以上のことは、ある意味オマケだよ」

「うん……」

「だからさ、別に『あんたの人生を原稿用紙に纏めて明日までに提出!』とか言うつもりないから、これからもし気が向いたりしたら、そんなとき落ち着いて話して頂戴」

「うん……うんっ……」

「おいこらー! 泣くなー! それだけは許さんぞー!」

「うん……うん……っ!!」

「あーあーもう。お父さん、まだ目が覚めないんでしょ。涙は感動の再会のとくに取つときなさいよ。あーこりやだめだもう。何年振りに会う娘がいきなりこんな顔してたら、幻滅されるよ。真奥さんが魔王だって話もそうだけど、あんたが勇者だって話も早速怪しく思えてきたぞコラ」

こらえようとしてもこらえきれず、肩を震わせる恵美を、梨香はしっかりと抱きしめる。

「とりあえず、色々お疲れ様。お父さん、早く良くなるといいね」

「うんっ!!」

「……ちよっと、涙はもう諦めたけど、鼻水はやめてね、そしたら本気で怒るよ」

梨香の肩に顔を載せてぼろぼろと泣きじやくる恵美を、梨香は苦笑しながらも抱きしめつづ

けた。

「で、私はあんたをなんて呼べばいいの？　今まで通り恵美？　それとも、鈴乃ちゃんみたい  
にエミリア？」

「……梨香に……ぐすつ……エミリアって呼ばれると、なんだか照れくさい……」

恵美のか細い声を聴いた梨香の顔が、悪戯心に染まる。

梨香は恵美の背を優しく叩いて身を離すと、にんまりと笑って恵美の顔を覗き込んだ。

「つしや、決定、これからエミリアって呼ぶわ」

「え、ええっ!?」

「エミリア、エミリア、うん、格好いいじゃん、よろしくねエミリア」

「り、梨香、ちよつとあの」

「エミリアも私のことりかっべって呼んでいいから」

「そ、そういう問題じゃないわよーり、梨香お願いだからこれまで通り……」

「うーん、そういう顔されると益々いじめたくなる。ねー恵美、あ、違ったエミリア、實際このひと月、その、エンテなんたらってとこでどうしてたの？　恵美の、あ、エミリアの話、もうちよつと詳しく聞きたい」

「全然に口に馴染んでないじゃない」

しつこく恵美をエミリアと呼ばわる梨香だったが、恵美もだんだんおかしくなってきたしま

って、涙を流しながら笑い出してしまう。

「でもさ、エミリア、こつちじゃずっとバイト暮らしたたんでしょ？ 早めに新しい仕事探さないとお父さんの看病もままならないんじゃない？ あと、あのアラス・ラムスちゃんだって、結局今はあんたが世話してるんでしょ？」

「あ、う、うんそれは……」

考えてみると、時給千七百円の職場を失ったのは、日本で生活する上でかなり重いダメージであった。

いくばくかの貯えはあるものの、迅速に次の仕事を見つけないければ早晩永福町のマンションの家賃支払いも危うくなるだろう。

現時点で例え父の容体が良くなったとしても、即座にエンテ・イスラの故郷に帰るという選択肢はあり得ない。

真奥から迷惑料として請求されている免許取得料や、エンテ・イスラ遠征の経費のこともあるし、エメラダにも帰還当初に都合してもらった旅費を、なんらかの形で返すと約束してしまっている。

身から出た錆とはいえ、なかなか状況は過酷そうだった。

「真奥さんと千穂ちゃんが、デリバリーがどうたらでマグロナルドがえらく人手不足だって言ってたけど、応募してみたらず？ あともう折角だから、このアパートに引っ越してきちゃいな

よ。家賃安そうじゃん。周りは事情知ってる人ばかりなんだしさ、その方が気楽だと思うけど」

だからこそ梨香の提案は至極現実的であつたが、恵美もこれまでの経緯を鑑みれば、ここでその案を通すにはさすがに抵抗を覚える。

「えっと……前よりずっとその可能性は考えなきゃいけないけど、でもどっちも最後の手段でことで……」

「まあそこらへんの按配はエミリア次第だけど、無理はしちゃだめだからね？」

「う、うん……って、だからお願い梨香、エミリアってやめ……」

どうにも梨香から呼ばれると気恥ずかしさが押さえられず、梨香の方も若干無理して言っている感が隠しきれないため、恵美はなんとかして旧来の呼び方に直そうと頼み込もうとしたそのときだった。

「えみ……りあ……」

低いうめき声が、部屋の中に響いた。

恵美と梨香は、思わず顔を見合わせてから、

「え、恵美、ちょ、ほら、ちよつとそっち！」

「う、うん、あ、梨香、上がるなら適当なとこに……」

「私はいいいから早く！」

唐突な事態におたおたしながら、恵美と梨香は、横たわるノルドの傍らに並んで顔を覗き込む。

ノルドの顔は、悪夢にうなされているかのように歪んでいた。だが、昨日一日には見られなかった反応だった。

「お父さん……お父さん？」

汗をかいている父の顔を、梨香が買ってきたウェットティッシュで拭う恵美。

「恵美、ほら、もっと呼びかけて！ お父さん、エミリアがすぐそばにいるよ！ 目え覚ませ！」

梨香も恵美の傍らで、騒ぎすぎない程度に呼びかける。

と、

「……う」

「っ!!」

はつきりと、口から声が漏れた。

恵美の耳朶を打つその声は、記憶にあるそれよりも、ほんの少し高い音のように思える。

それでも、

「（お父さん……聞こえる？）」

「お、出た、異世界の言葉ってやつだ」



恵美は父に、呼びかける。

「（お父さん……起きて、お願い、話したいことが、いっぱいあるの）」

「なんて言ってるかよく分からんけど、お父さん日本語も分かってたよね!? エミリアがいるぞ! 目え覚ませ!」

「う……………」

「（お父さん、また、お父さんと一緒に暮らせるんだよ。お父さんは、嘘つかない、また私と一緒に暮らせる日が来るって言ってくれた。来たんだよ、お父さん。私…………）」

「（えみ……………」

「（帰って……………」

恵美は、そして梨香は、横たわったノルドが薄く、だがはっきりと光の灯る目を開けて、恵美に向けて掠れる声で呼びかけるのを見た。

「目……………」開けた、え、恵美、私ちよつと真奥さん達に知らせて来るわ、ちよ、ちよつと——  
鈴乃ちゃん! 真奥さん! 芦屋さん!!」

梨香がけたたましく飛び出していく音が頭に響くのか、ノルドはかすかに顔を顰めたが、却ってそれが臍な意識を刺激したようだ。

声は掠れているが、なんとノルドは、自分の腕の力で上体を起こしたではないか。

恵美は慌てて背と腕に手を添え、それを支える。

記憶にあるよりわずかに老いた父と、記憶にあるよりずっと大きくなった娘が、遙か異郷の地で、しばし、見つめ合った。

やがてノルドが掠れた声で、微笑んだ。

「……ああ、エミリア……これは、夢か……？」

「(ううん……夢じゃ……ないよ)」

自分はこんなにも泣き虫だったのだろうか。

恵美は、とめどなく流れる涙を、拭うこともせず、

「(お父さん……お父さん……っ！)」

幼いあの日、そうしたように、父の体を抱きしめた。

あのときの涙は、別れと絶望の涙だった。

だが、今、恵美の頬を伝う涙の色は、窓から差し込む日本の太陽に照らされて、暖かく光る、希望の色をしていた。



## 統章

エフサハーン皇都こうとの象徴である蒼天蓋城ソウテンガイの崩壊のニュースは、エンテ・イスラ全土を瞬またたく間に駆け巡った。

世界中がエフサハーンの動向に注目しはじめ、それと同時に大陸東部の内乱の火種がまたぞろ熱くなるのは必至であった。

とにかく急務は、全土での八巾騎士団はちいんの再編成と、政治の混乱と皇都の民の動揺を鎮めることである。

その任に当たったのは主にファイガン義勇軍を組織した者達で、本来目通りの叶うはずがない統一蒼帝の玉音をその耳で聞いた義勇軍騎兵達の士気は高かった。

だが、先行きを不安視する声は、マレブランケの一派が消え去った今こそ、全土で囁かれていた。

一度全世界に向けて宣戦布告した罪を、五大大陸連合騎士団の議場で糾弾されるのではないかと不安の声。

蒼天蓋が支配された途端にファイガンに義勇軍が興ったのは、国内に八巾騎士団の中に皇都

に反旗を翻し得る行動力を持った者がいる証明であるという不安の声。

統一蒼帝の老いと統治能力の衰えを囁き合う声。

かつては蒼穹の代名詞とまで謳われた蒼天蒼が無残な修繕中の姿をさらすその中で、統一蒼帝は、老いさらばえた耳でその全てを聞いた。

だが、老いに浸食されて尚、垂れた瞼の奥で野望を失わないその瞳は、飢えた獣のように爛々と光っていた。

「彼の者は……誠の策士……誠の将器よ……」

数日前の、あの強大な悪魔大元帥との会談を思い出し、統一蒼帝フリー・シュンイエンは黄色く欠けた歯をのぞかせてにやりと笑った。

「為すべきは……一天四海五土を統べる、……偉大なる、国」

彼の者は、同じ舞台に降りてきた。

ならば、我が命続くかぎり、踊り続け、そして未来へと残そう。

「我が大エフサハーンの栄華を永久たらしめるのなら……」

その決意と、野望の光は、遙か時の彼方を見ていた。

「我が覇道の裔を継ぐは、人にあらざるもまた、一興」

## 作者、あとがく — AND YOU —

何かにつけて憂鬱な朝、学校が隕石で吹っ飛んでないかなとか、会社が爆発して消滅してないかな、とか思ったことがない人って、あまりいないのではないでしょう。

テストだとか人間関係だとか、日常が嫌になる原因がはつきりしている場合はもちろん、特別悪い出来事がなくても、日常のルーチンを繰り返すことに心底うんざりしたり、ふと頭をもたげてきた理想と現実のギャップがたまらなく嫌になってしまったり、そんなことがある度にちよつと後ろ向きながら割と純粋な願い事として、

「あー、隕石落ちてこねえかなあ」

とか思ったりするわけです。

ただそう思う人も、心の底から世界の滅亡を願っているわけではなく、今抱えてる重いもん全部放り出してハワイにでも行ければ霧散する程度のカタストロフ願望でしかありません。

ただ残念なことに決してそういうわけにはいかないのが人間というもので、どんなに重くてもしんどくても、逃げたい逃げたいと思っても、なかなか捨てられないもんです。

そうこうしているうちに時間が過ぎて、色々なことが良きにつけ悪きにつけ落ち着いてきてしまうのですが、逃げられも捨てられもしないなら、せめてできるだけ明るい良い形で物

事を決着させたいと和ヶ原は強く思います。

ある時点からこうと決めて進んだ道を、そのまま迷いもなく、障害に負けもせず突き進める人間は、決して多くありません。そんな人間ばかりなら、むしろこの世は成り立たないでしょう。

今回のお話に登場する連中も、突き進もうとしたり、迷ったり、今まさに障害にブチ当たったり、進もうとした道をドロップアウトしそうになって、なんとか足掻いて、そして今、進んできた道で出会った大きな分かれ道で、意を決して一つの方向を選ぼうとしています。

前巻あとがきでもお話した『はたらく魔王さま!』の新たなステージへの遷移。

その分岐点となる物語がこの十巻というキリのよい場所に來たのは、はつきり言って全くの偶然ですが、気持ちの上でも喜ぶと同時に、今まで以上に気を引き締め、新たなステージ、十一巻へと進んで行きたいと思います。

是非また次巻でお会いできることを願って。

それではっ!!





●和ヶ原聡司著作リスト

「はたらく魔王さま！」  
(完結文庫)

「はたらく魔王さま! 2」  
(同)

「はたらく魔王さま! 3」  
(同)

「はたらく魔王さま! 4」  
(同)

「はたらく魔王さま! 5」  
(同)

「はたらく魔王さま! 6」  
(同)

「はたらく魔王さま! 7」  
(同)

「はたらく魔王さま! 8」  
(同)

「はたらく魔王さま! 9」  
(同)

「はたらく魔王さま! 10」  
(同)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム

<http://dengekibunko.dengeki.com/>

※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「和ヶ原聡司先生」係

「029 先生」係

---

本書は書き下ろしです。

# はたらく魔王さま!<sup>まおう</sup>10

わがはらとし  
和々原聡司

発行 2013 年 12 月 10 日 初版発行

発行者 塚田正晃  
発行所 株式会社 KADOKAWA  
〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3  
03-3238-8521 (営業)

プロデュース アスキー・メディアワークス  
〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-8-19  
03-5216-8399 (編集)

装丁者 荻窪祐司 (META + MANIERA)

印刷 株式会社桃印刷

製本 株式会社ビルディング・ブックセンター

※本件が無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配付は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークス お問い合わせ窓口までにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。

※定価はカバーに表示してあります。

©2013 SATOSHI WAGAHARA

ISBN978-4-04-866161-4 C0193 Printed in Japan

## 電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで「小さな巨人」としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言っ

てよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を取録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times, Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日  
角川歴彦



## はたらく魔王さま！

和ヶ原聡司  
イラスト／ORG

世界征服間近だった魔王が、勇者に敗れて辿り着いた先は、異世界・東京。だった？ 六量一間のアパートを飯の魔王城に、フリーターとして働く魔王の明日はどっちだ？

わ6-1 2078

## はたらく魔王さま！2

和ヶ原聡司  
イラスト／ORG

店長代理に昇進し、ますます張り切る魔王。そんなある日、魔王城（築60年の六量一間）の隣に、女の子が引っ越してきた！ 心穏やかでいられない千穂と勇者だったが？

わ6-2 2141

## はたらく魔王さま！3

和ヶ原聡司  
イラスト／ORG

東京・笹塚の六量一間の魔王城に、異世界からのゲートが開く。そこから現れた幼い少女は、魔王をパパ、勇者をママと呼んで——？ 波乱必至の第3弾登場！

わ6-3 2213

## はたらく魔王さま！4

和ヶ原聡司  
イラスト／ORG

バイト先の休業により職を失った魔王。しかもアパートも修理のため一時退去となる。職と魔王城を一気に失い失意の魔王は、なぜか、海の家。ではたらくことに？

わ6-4 2281

## はたらく魔王さま！5

和ヶ原聡司  
イラスト／ORG

無職生活続行中の魔王が、まさかの薄型テレビ購入を決断！ 異世界の聖職者・鈴乃もそれに便乗することに。そんな中、恋する女子高生・千穂に危機が迫っていた。

わ6-5 2348

# はたらく魔王さま! 6

和ヶ原聡司  
イラスト/OCG

マクロナルドに復帰した魔王は、心機一転新たな資格を取ることに。そんな中、千穂が概念迷宮を覚えたと言い出す。鈴乃が修行の場を選んだのはなぜか銭湯で?

わ-6-6 2423

# はたらく魔王さま! 7

和ヶ原聡司  
イラスト/OCG

真奥と恵美がアラス・ラムスのお布団を買いに3人でお出かけ!? 千穂が真奥と初めて出会った頃のエピソードなど、第7巻は他2編を加えた特別編でお届け!

わ-6-7 2490

# はたらく魔王さま! 8

和ヶ原聡司  
イラスト/OCG

恵美がエンテ・イスラに帰省することになり、羽を伸ばす片屋、心配する千穂。一方真奥はマッグの新華朗のために免許試験を受けるが、試験場で思わぬ出会いが?

わ-6-8 2519

# はたらく魔王さま! 9

和ヶ原聡司  
イラスト/OCG

恵美と片屋を救出に向かう魔王達は何を持っていくかで大騒ぎ。日本の生活に慣れた恵美はエンテ・イスラでの旅路に大苦戦。庶民派ファンタジーは異世界でも相変わらずです!

わ-6-9 2587

# はたらく魔王さま! 10

和ヶ原聡司  
イラスト/OCG

窮地の恵美に片屋から手紙が届く。魔王が異世界に来ることを知った恵美は、再び立ち上がる。一方魔王は、お土産を求めてアシエスと街をブラついていて!

わ-6-10 2657



## エロマンガ先生 妹と開かずの間

伏見つかさ  
イラスト／かんざきひろ

高校生兼ラノベ作家の俺には引きこもりの妹がいる。一年以上会ってない。どうにか部屋から出てきて欲しい。その願いは、相違給師・エロマンガ先生によって叶えられた。

## 覚醒ラブサバイバー

砂守岳央（沙P）  
イラスト／梅太郎

僕は隣に座る西崎さんのことが好きだ。平凡な僕がおくるつまらない高校生活は、偶然やってきたデートのチャンスで大きく変わり始め……。ニコニコ動画の大人気楽曲を本人自ら書き下ろし！

## 現代日本にやってきたセガの女神にありがちなこと

師走トオル  
イラスト／KEI

「電撃文庫×SEGA」プロジェクト展開中！セガの歴代ハードが八百万の神となつて現代日本の羽田に降臨。セガの歴史がバトル＆コメディイストでノベライズ化！

## 魔女は月出づるところに眠る 上巻

ローブを纏つて生まれた少女――  
佐藤ケイ  
イラスト／文倉十

《あちら側》と《こちら側》を繋ぐ魔女たちの祖、オリエンテ夫人復活をめぐる争いに巻き込まれた悪魔の運命は!? 魔女が織りなすファンタジー譚、開幕！

## 魔法少女試験小隊

哀川 曜  
イラスト／雅（まさ）

世界には《魔法少女》と呼ばれる者達がいます。ファンタジーではなく、極めて科学的な存在。その中でも異質なものの少年と少女が出会った時、物語は始まる。

# 滅葬のエルフリーデ

西屋まつり  
イラスト／mamuru

# メイドが教える魔王学！ ～ご奉仕は授業のあとで～

泉谷一樹  
イラスト／しゅがすく

# 鮎原夜波はよく濡れる

水瀬葉月  
イラスト／白井鋭利

# 鮎原夜波はよく濡れる2

水瀬葉月  
イラスト／白井鋭利

# 我が妹は吸血鬼である

まい  
小龍野廻則  
イラスト／zpolice

江戸海に浮かぶ軍艦学園では、滅葬流技戦と呼ばれる海戦バトルが繰り広げられており……。第19回電撃小説大賞〈大賞〉受賞者、西屋まつりが贈る、貴族学園バトル・ストーリー！

幻想職の資格が重視される現代、「魔王」の資格を日指して私立魔王学園に入學した落こぼれの暗上歴ミカゲ。そんな彼を「スライムレベルですか、このクズが！」と過くのは美しき毒舌メイドさん？

ふわふわぼんやりした、海を漂うクラゲのような少女・鮎原夜波。だが彼女は、濡れれば濡れるほど強くなる「ウンディーネの戦士」だった……。濡れ逃げアクション開幕！

呪われた水・を生成する怪物・ヴォオジャンノイの謎に迫る夜波たち。そんな彼らの前に、ずぶ濡れで興奮する謎の女子高生が出現し……。敵か、味方が、ただの愛憎か？

6年前に吸血鬼に襲われ、生き別れになった最愛の妹が我が家に帰ってきた！ しかも、血が大嫌い、マンガやアニメが大好きなネット廃人寸前の妹吸血鬼として……。

お-16-1	2555	み-7-28	2659	み-7-27	2612	い-12-2	2666	あ-37-4	2663
--------	------	--------	------	--------	------	--------	------	--------	------



我が妹は吸血鬼である2

小鹿野君則  
イラスト／ZPOlice

俺のかーちゃんが17歳になった

弘前龍  
イラスト／バセリ

俺のかーちゃんが17歳になった②

弘前龍  
イラスト／バセリ

ミス・ファールブルの蟲ノ荒園

物原純平  
イラスト／藤ちょこ

ミス・ファールブルの蟲ノ荒園2

物原純平  
イラスト／藤ちょこ

オタク系吸血鬼の妹と同居生活を送る兄・笹森は、ある日テレビ番組に登場した。自称吸血鬼アイドル・を目撃し、急襲に出る。しかし謎のプロデューサーから反撃を受け……。

かーちゃんが17歳に!? いきなり何を言っているのか自分でもわからないが、どうやら17歳とやらが関係しているらしい。永遠の17歳の秘密とは! 小説大賞最終選考作品!

クラスメイトのメー子と家族の前でいきなり俺との結婚宣言!? 嫁姑する妹の優待を横目に、俺とかーちゃん、ばーちゃんにメー子と17歳だらけの家族会議開始!

謎の巨大生物「蟲」が闊歩する近代。洋上で連綿した特・翠太郎は、辿り着いた荒地で蟲の研究をする美少女・アリと出逢い——蟲と蒸気が彩る空想冒険活劇登場!

謎の生物(蟲)を宿す翠太郎と蟲愛する美少女アリ。二人と危険な、死神、との長い長い一日が幕を開ける。蟲と蒸気が彩るスチームパンク・ファンタジー第2弾!

も-24	2667	も-2-3	2562	ひ-12-2	2664	ひ-12-1	2566	お-16-2	2661
------	------	-------	------	--------	------	--------	------	--------	------

おもしろいこと、あなたから。



# 電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」「電撃コミック各誌」からデビュー！

上遠野浩平（ブギーポップは笑わない）、高橋弥七郎（灼眼のシャナ）、  
成田良悟（デュラララ!!）、支倉凍砂（狼と香辛料）、  
有川 浩（図書館戦争）、川原 礪（アクセル・ワールド）、  
和ヶ原隼司（はたらく魔王さま!）など、  
常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。  
新時代を切り開く才能を毎年募集中!!

**電撃小説大賞・電撃イラスト大賞・**

**電撃コミック大賞**

※第20回より賞金を増額しております。

賞  
(共通)

大賞……………正賞+副賞300万円  
金賞……………正賞+副賞100万円  
銀賞……………正賞+副賞50万円

(小説賞のみ)

メディアワークス文庫賞  
正賞+副賞100万円  
電撃文庫MAGAZINE賞  
正賞+副賞30万円

**編集部から選評をお送りします！**

小説部門、イラスト部門、コミック部門は1次選考以上を通過した人全員に選評をお送りします！

**イラスト大賞とコミック大賞はWEB応募も受付中！**

最新情報や詳細は電撃大賞公式ホームページをご覧ください。

<http://asciimw.jp/award/taisyo/>

編集者のツボポイントアドバイスや受賞者インタビューも掲載！